
トリエスタの聖騎士

ゆげつげ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

トリエスタの聖騎士

【Nコード】

N5402Q

【作者名】

ゆげつげ

【あらすじ】

「わたし聖騎士になります！」

思い込みの激しい聖騎士オタクの女の子が不思議な指輪を手に入れて男の体に変身☆

そんな彼女を取り巻く事件とそれに振り回される可哀想な王子様との笑いあり、涙あり？の物語になる予定。

※男女カップリングですが、途中BL風な表現を含みます。

ナサニエル・レインの誕生 — 1 —

わたしこと、エルザ・クリンプトンは悲しんでいた。生まれてこの方16年。今までにないくらいに、悲しい出来事が起こったのだ。

わたしの生家であるクリンプトン家は、聖トリエスタ王国の南外れの小さな村を治める、しがない貴族。

爵位は一番下っ端の男爵だ。

クリンプトン家がこの土地を領地としたのはいつのことだったか。もう何代も前のご先祖様が、かつて行なわれた戦争でご尽力された際、後にその褒美として与えられたモノと聞いている。

村の名前はミネリ。

背後にはそびえ立つ山々を抱え、これといって珍しいものがあるわけでもない、辺鄙な所だ。

唯一の自慢は澄んだ空気と村人たちのその人柄といった、のどかな村。

わたしはそれが気に入っていた。

ずっとこの村で暮らしきて、いずれは結婚しなくてはならなくても、大好きな読書と、大大好きなライアン・フランシス様への愛さえあれば、どこでもやっていけると思っていたのだ。

けれど数時間前――。

「エルザ、少し話があるんだが」

「あら？お父様」

わたしが日課である、ライアン・フランシス様の肖像画に愛を捧げる行為（つまり接吻）をしている所へ、お父様がやってきた。

お父様は娘のわたしから見ても、まだお若くて恰好よくて、大変素晴らしい方だ。

わたしの愛するライアン・フランシス様ほどではないけれど、とても魅力的な男性だと思う。

少しくすんだ金色の髪と、その口に蓄えたお髭がセクシーななんと、屋敷のメイドたちが影で噂している事を知っている。

それからグリーンの瞳。わたしと同じ色をしたその瞳は、今、困惑の色を浮かべていた。

「エルザ……聞いてもいいかい？」

「はい、お父様」

わたしはベッドに腰掛け、膝に抱え上げていた　ライアン・フランシス様の肖像画に傷がつかないよう細心の注意をはらいながら、それを脇に置く。

「エルザ、わたしの目はどうかしてしまったのだろうか……先ほど、お前がその肖像画に、その、キキキ、キスをしていたように見えたのだが」

お父様ったら、顔が引きつっていらっしやる。

「ええ、その通りよ。お父様」

「なぜ、肖像画に？」

「もちろん、愛しているからです」

「あ、愛とは、つまり……その肖像画に描かれている人物を、エルザが愛しているということかい？」

「はい、お父様」

「そのやたらとキラキラしたその男をか？」

お父様の言い方には少しだけ引っかかりを感じたものの。
わたしのライアン・フランシス様は確かにキラキラしていらっしやる。それはもう、眩しいほどに。

風になびく その美しい金髪は月明かりの妖精が飛び立った軌跡のようだと言うし、澄んだ夏の青空を想わせるブルーの瞳は、底がしれない。

「ええ、お父様。エルザはこれをお方を愛しております。もう、わたしの身も心も、全て。この方に捧げているのです」

「……身も、心も……全て？」

わたしの言葉を聞いた途端、お父様の顔色は白から赤、赤から白、白から青に変わって、今は灰色にみえる。

——ばたんっ！

と、大きな音を立てて、仰向けに倒れると、お父様はそのまま動かなくなってしまった。

「旦那様！」

扉の外で控えていたのだろう。

執事のバスンが今の音を聞きつけて、わたしの部屋の中へ飛び込んできた。

「何があったのですか！？エルザお嬢様！！」

あまりの出来ごとにわたしは首を振る。

「わからない……話の途中でお父様が突然、顔色を変えられて……」
バスンがお父様の脈を確認しながら、わたしに問いかけてくる。
「一体、何のお話をされていたのですか？」

「それはもう、わたしのライアン・フランシス様に捧げる思いの数々を……」

わたしが言い終わる前に、バスンは深いため息と共に、暫しその頭を抱えてしまった。

「とりあえず、旦那様を部屋にお運びします。エルザお嬢様はここ

で大人しくしておいてください」

大人しく、だなんて失礼しちゃう。

わたしはいつだって、大人しくしているもの。

大人しく本を読んだり、大人しくライアン・フランシス様のお姿を想像してみたり。

時にはその想像で、悶えてベッドの上を転がることもあるかもしれないけれど、大抵いつもは大人しくしている。

なんたって、これでも貴族の娘ですからね。

他の貴族のご令嬢がどのように過ごしているかは、まだそのような方たちに1度もお目にかかったコトがないからよくわからないけれど。

きつとみんな、屋敷の中で大人しく、慎ましやかに暮らしていると思う。もちろん、わたしのようにね。

わたしがみんなと違うのは、ただ1つだけ。

ライアン・フランシス様への愛！それだけだと思うの。

わたしはそれから、先ほど お父様の乱入で中断されていた ライアン・フランシス様（肖像画）への愛の行為を再開した。

それから程なくして、部屋の扉が叩かれる。

「エルザお嬢様、旦那様がお呼びです。書斎の方へいらしてください」

「ええ、わかりました」

扉の向こうから聞こえたバスの声に答えると、わたしは抱えていた肖像画を元にあった場所。部屋のどの位置からも眺めることの出来る壁に戻して、外に出た。

お父様の書斎は2階のわたしの部屋から階段を下りて、すぐ脇の所にある。

——トントン。

扉をノックして、わたしは部屋の中へと声をかけた。

「お父様、エルザです」

「——入りなさい」

扉の向こうから声がして、わたしが部屋の中へ入ると、目の前にはお父様とお母様。

それから、先週生まれたばかりの弟がお母様の腕の中で、スヤスヤと安らかな寝息を立てていた。

わたしがプレゼントした白い最上級の産着に包まれている弟の、まだ薄らとしか生えていない髪はブルネット。お母様と同じ髪の色だ。

そして、閉じられている瞳の色はグリーン。お父様とお母様と同じ色。

わたしは……わたしの瞳の色もグリーン。

けれど、その髪の色は両親とはとても似つかない変わった色をしている。

赤みがかった金髪……というかピンク？

わたしのその髪は「奇跡の色」と呼ばれるもの。

たいへん素晴らしい色だと、みんな褒めてくれるけど、わたしはあまり好きではなかった。

この世界で誰もが持つていとされる、聖力。神から与えられた聖なる力。

その力が強いと、体からその一部が漏れ出し、その姿形に影響をあたえると言う。この世で最も尊き神に近い姿に。

ファームリアム。ここ聖トリエスタ王国が神と崇めるその方は、桃色の髪と赤い瞳を持っている。

「お父様、わたしにお話とは何ですか？」
わたしにはこれから隣町の仕立て屋に行かなければならない用事がある。

今朝方、随分前に特注していた服が　ようやく完成した、という知らせが届いたのだ。

……ああ、早く着て見たい。

ライアン・フランシス様のお洋服。

それは少ない資料から、研究に研究を重ねて描きあげたデザイン画によるもの。

きっと本物以上に本物な仕上がりになっているはずだ。

材質なんかに　こだわって、基調となる白い生地には弟の産着にも使われている最高級のものを用意した。

ここから東へ向った所に生息している、スワロウの繭から作り上げられた生地。

肌触りがとても滑らかで、この生地を使った服を着ているのはあの種のステータスになる。

ライアン・フランシス様は王子なのだから、身につける物も上等なはず。

きっと金具はメチル産の物だとか、この襟の所にはカリドルの骨が使われているだろうとか、考える時間はとても有意義だった。

「エルザ……お前に話というのは、だな」

お父様はとも言いにくそうに言葉を濁し、それから、チラリと横に立つお母様に視線をおくる。

「あなたはこのクリンプトン家の家長でございましょう？ しっかり仰ってください」

ニッコリ微笑むお母様の声はドスがきいている。

「そ、そうだな」

お父様はお母様には逆らえない。惚れた弱みというヤツだろうか。しっかり尻に敷かれてしまつて……そう嘆いていたのは、去年この世を去つたお父様のお母様。

つまりわたしのお婆様だ。

「エルザ、お前は明日から王都に向いなさい」

「……王都？」

お父様の言葉にわたしは首を傾げる。

「王都の神殿で聖女として数年間、神にお仕えするのだ。王都はいぞー。こことは違って華やかだし」

「あなた！」

話しを脱線させかけたお父様にお母様のカツが飛ぶ。

それにお父様は咳払いをして、話を続けた。

「何と言つても、お前の母も聖女だったんだからな」

「そうよ、エルザ」

お母様はこの村のパン屋の娘だった。

しかし貴族であるお父様と恋に落ち、その想いを遂げるために聖女となつたのだ。

聖女とはこの国で女性が唯一、身分とは関わりなくなる職業で、その判断基準は聖力だ。

聖力がある一定以上の基準値を超えていれば、女性なら誰でも聖女に志願することができる。

そして晴れて聖女に選ばれば、与えられるのは「神の乙女」と言う地位。

——その地位、何ものにも侵されることなかれ。

例え元一般人でも、一国の王と婚姻を許される立場になれる。

その男性バージョンが聖騎士で、女性であれば聖女に、男性であれば聖騎士に。

幼い頃、誰もが憧れを持つ職業だ。

それはわたしも例外ではなく、憧れた。

でもそれは……でもそれは……けして聖女に、ではない。

わたしは聖女になんてなりたくない！

わたしがなりたいのは「聖騎士」なんだから！！

ナサニエル・レインの誕生 — 2 —

わたしがあの方に初めて出会ったのは、忘れもしない。11歳の夏。

メイドのマーサが読みかけていた本を拾ったのが始まり。

エンジ色のハードカバーに繊細な金の文字で書かれた『聖なる騎士物語』という文字。

わたしは本を開いた瞬間にもうその虜になっていたのだ。

……ああ、わたしの愛しのライアン・フランシス様。

彼はこの『聖なる騎士物語』の主人公。

美しい顔立ちに黄金の髪をもち、そのブルーの瞳は神に与えられた力を使う際に血のような赤色に染まる。

わたしと同じ「奇跡の色」の持ち主。

ライアン・フランシス様のおかげで、わたしは両親とは違うこの髪を少し好きになることが出来た。

類稀なる力を持った彼は味方から「黄金の騎士」と称され、敵である魔族からは「金色こんじきの悪魔」と恐れられている。

その凛々しいお姿と言ったら、わたしの想像力を以ってしても、神々しいばかり。

ひと度、ライアン・フランシス様に出会ってしまったわたしは、それから全力で彼に近づく努力をはじめた。

まずは形から。わたしは挿絵にあったライアン・フランシス様の髪形をマネしてみることにした。

腰まであった長い髪にハサミを入れる。抵抗はなかった。

何しろ特に思い入れのない自分の髪だ。

けれど半分に切った所でメイドの1人に見つかって、後でお父様とお母様こっぴどく叱られた。

髪型がダメならば、次は恰好だ！

『聖なる騎士物語』にハマる前は「お姫様」に憧れていたわたしのクローゼットはヒラヒラのドレスばかりだったのだ。

わたしはヒラヒラのスカートではなく、ズボンを履くようにした。けれども、それも却下。

淑女たるもの、それなりの身だしなみをしなければなりません、と怒られた。

ならば次は、瞳を赤くしてみよう。

子供だったわたしは、お父様の書齋に忍び込み、赤いインクを自分の目に垂らしてみた。

だって知らなかったのだ。インクがあんなに痛いものだなんて。

気付いた子守りのターニヤが、すぐにインクを洗い流してくれなかったら、どうなっていたことか。

その事があってから、わたしは外見にこだわるのをやめた。

そう、外見よりも肝心なこと。聖騎士になろう！

そうと決めたわたしは特訓を開始した。

聖騎士の仕事は主に魔に属するモノを倒すこと。魔物、魔獣、魔族。

そもそもわたしたちの身に備わっている聖力は神話の時代に突如

として現れた魔の集団に立ち向かう為の力だ。
広い世界、その魔族の親玉、魔王を神として信仰している国がある。

そこから定期的に世界に放たれる魔のモノたちを排除するのが彼らの勤め。

神のおわす国として、崇められる聖トリエスタ王国では聖女や聖騎士はお飾りでなく、実際にその力を駆使している。

聖女の役目は人々に神の言葉を伝えること。

聖騎士は魔の手から神の子である人々を守ることを使命としている。

聖女はある程度、聖力があればなれるが、聖騎士はそうではない。実際に戦うのだから、それは仕方のないことだけど。

聖騎士なるために、わたしはまず剣術を習うことにした。
けれど3日で断念。よくもった方だと思う。

……剣って想像以上に重いんですもの。

代わりにナイフ投げを習うことにした。執事のバツスの得意技だ。

これなら剣を習うより授業料も浮くし、一石二鳥。わたしは頑張った。

それから忘れてはいけなのが聖術。読んで字のごとく聖なる力を使う術^{すべ}。

聖術には主に3種類ある。怪我や病気を治したりする治療術と、攻撃から身を守ったり、自分の身体能力を高めてくれる補助術。後は魔のモノたちにダメージを与える浄化術だ。

聖騎士になる為の試験には聖力の大きさと、どの程度 武器が扱えるか、それから聖術の基礎はちゃんと出来ているかが見られるの

だと、『聖騎士になるための1・2・3』というハウツー本に書いてあった。

聖術を学びたいと言ったわたしにお父様は反対した。

淑女たるもの、慎ましく淑やかであれ。剣術は習わせてくれたのに、絶対オカシイ！

わたしはこっそりお父様の書齋にあった聖術の本をかすめ取り、一応の基礎は頭に叩き込んだ。

叩きこんだのだけど……実際のところ試したことはない。
試す前に気付いてしまったのだ。

わたしがどんなに努力しても聖騎士には慣れないんだってこと。

……だって、わたし、女だったんですもの！！

当時のわたしはすっかり失念してしまっていたのだ。

聖騎士が男の職業だと言うことを……。

打ちひしがれたわたしは、物欲に走った。

刊行されている『聖なる騎士物語』を保存用、読書用、観賞用、外出用に揃え、その頃に創刊された『月刊 聖騎士☆通信』の定期購読者になる。

ライアン・フランス様の特大姿絵も手に入れたし、ブロマイドも。

それから、ライアン・フランス様を称える会「聖なる騎士同盟」にも加入。

そして手に入れた会員証。ライアン・フランシス様の姿絵の入ったロケット型のペンダントは、今も肌身離さず身につけている。

後は肖像画も描いて貰った。

わたしが毎日、キスしているのがそれだ。

今日は頼んでいた服も完成したし。

すっかり浮かれ気分だったのに、いきなり王都へ行って、聖女になれ！だなんて。

「エルザ……わたしは悲しいよ。幼い頃から今まで、どんなにお前を大切に育ててきたか。それこそ真綿で包む様に。周りの者から散々、親バカだ、何だと罵られようとも、お前が望むことは何だって叶えてきたつもりだ。お前の為ならこのクリンプトン家がどれほど傾こうとも、落ちぶれようとも厭わない。そう思っていたのに……お前はもう肖像画の男に身も心も捧げたと言うではないか……」

「……お父様」

浮かんだ涙で視界が霞む。

お父様がわたしのことをそんなに愛して下さっていたなんて……。

わたし、まったく知りませんでした。

でも、ごめんなさい。お父様。わたしの愛は変えられないの。

「わたしはバツスンに命令を下した。嫁入り前のお前を傷モノにした男を探して連れてこいとな」

「まあ」

お父様の言葉にわたしは目を丸くする。

「エルザ」

「なんでございましょう？」

呼ばれてわたしは首を傾げる。

「……あの肖像画の人物が、物語の中の主人公と言うのは本当か？」
感動しているのかしら？

机の上の拳を握りしめワナワナと肩を震わせているお父様にわたしは答えた。

「おっしゃる通り『聖なる騎士物語』の主人公、ライアン・フランシス様です。わたしがこの身を一生 捧げることが誓った相手」
ポツと頬を赤らめたわたしにお父様は言った。

「架空の人物に一生を捧げるヤツがあるか！？」

「お父様！？」

「あなた！落ちついて！！」

顔を真っ赤にして叫んだお父様にわたしもお母様も、一様に驚く。
その声に目を覚ました弟が、おんぎゃあ、と力の限りに泣きだした。

「あら、よちよち。ごめんなさいね。お父様がいきなり大きな声を出すからビックリしちゃったわよねえ」

お母様が弟の背中をポンポンと叩いてあやす。

「……あ、う、その……すまん」

しゅるしゅると小さくなったお父様は、小さな咳払いをしてわたしに言った。

「エルザ、お前は金輪際、聖騎士と名のつくモノ。ライアン・フランシスとかいうモノには触れさせん！本も全部 捨ててしまえ！！」
「お、お父様？」

こんなに声を上げられたお父様は初めてだった。

わたし、エルザ・クリンプトンの短い人生の中で、一度も……こんなことはなかったのに。

「お前はとりあえず神殿で、その腐った思い込みを清めて もらっ

てくるんだ」

そんな、そんな、お父様。

「や、やっぱり……わたしはお父様とお母様の子ではなかったのね!？」

わたしは思わず叫んでいた。

「だからそんなヒドイことが言えるんだわ!わたしは、わたしは、ライアン・フランス様がいなければ生きていけないのにつ!!」
弟が生まれたから、跡取りが生まれたから、わたしのことが要らなくなっただ。

わたしは堪らずにお父様の書斎を飛び出した。

涙が、涙が溢れてきて止まらない。次から次へと頬を伝う。

好きだった。大好きだった。

お父様もお母様も、この家もこの村も。

わたしを取り巻くもの全て。

けれど、それと引き換えにライアン・フランス様へ捧げたこの愛を捨てる事なんて出来ない!

……出よう、この家を。

わたしは1人、あの方への愛を胸に生きていくのよ。

ナサニエル・レインの誕生 — 3 —

部屋へ戻ると とりあえず、わたしは大きな布袋に本を詰めた。

『聖なる騎士物語』の現在刊行されているモノで4冊。

新刊は来年あたりに出るんじゃないかって噂だ。

それから、初回から購読している『月刊 聖騎士☆通信』。

本当は全部持っていきたいのだけれど、これは かさ張るから、お気に入りの号だけ。

2年前から「聖なる騎士同盟」で、まことしやかに囁かれ始めた噂。

実はライアン・フランシス様にはモデルとなる方がいらっしやるとか。

それがこの国の第2王子であるケイン・フィード・トリエスタ様だ。

ケイン王子は聖トリエスタ聖騎士団、第3団の団長で、その就任式の様子が特集された記事が載っている号だけでも持っていこう。なんたってプレミアがついてるし。

実写版ライアン・フランシス様と噂されている王子の姿絵は、確かに小説の挿絵にソックリだった。

金髪に碧眼、整った顔立ち……でも、でも、ライアン・フランシス様の方が断然カッコイイに決まってる！

王族の姿絵なんて絶対、本物より数段マシに描かれているはずだもの。

それに性格だって、甘やかされて育った（であろう）王子とは比べものにならないくらい、過酷な人生を過ごされて来たんですからね。ライアン様は……！！

大切な友の死、仲間の裏切り、貴族たちの派閥に、その出生の秘密。

美しい顔に影を落とすのはその暗い過去たち……。

けれど、ライアン様はくじけたりしない。

ずっと、前だけを見つめて……魔のモノたちからこの世を救うために、ただ1人、真剣に戦い続けている。

——いけない、いけない。荷作りの途中だった。

早くしないと、誰かがやってくるかもしれない。

わたしはクローゼットの奥深くに眠っていた服を取り出した。

何かの時の為に用意していた、男ものの服。

生地はちよつと上等過ぎるから村では浮くかもしれないけれど、町まで出れば裕福な家の坊ちゃん程度に見える代物だ。

わたしはそれを着こんで、しまった　と思う。

これじゃあダメだ。女の男装にしか見えない。

14歳になった時から　ぷっくりと膨らみだした胸は未だ成長期。

わたしは布を使ってなんとかそれを平らにし、今度はどうだと、鏡を見る。

それでも、やっぱりダメだった。

大きすぎる目が邪魔だ。それに薄桃色の唇。

照れるとすぐに赤くなる頬も肌の白さを際立てて、女の子に見えるてしまう。

そう、1番いけないのは髪。

この世の中、髪の長い男性は大勢いるけど、それは男の体つきをしているから、そう見えるのであって。

いくら男だと言い張っても、体を見れば一目了然なわたしには邪

魔なものだ。

……そうだ。髪を切ろう。

わたしくらいの年齢で髪の短い女性なんて、そうそういないもの。

机の引き出しからハサミを取り出し、バチバチと髪を切る。

一本では銀色に見えてしまう わたしの桃色の髪が、細かい模様の絨毯の上に束になって落ちた。

わたしはなんとか髪形を整えると、よし、と頷く。

我ながら、なかなかの出来だ。

どこからどうみても、ちょっと年はのいかない男の子って感じ。
声が高いのは、まだ声変わりをしていないから。
そんな感じで頭の中で設定を思い浮かべる。

……うーん、名前はなんにしよう？

意味があつて、とっても素敵な名前がいいなあ。そう、ライアン・フランシス様みたいな！

彼の名前を使うのはちょっと おこがましい気がするし、そうだ！
あれにしよう。

『聖なる騎士物語』の冒頭で、ライアン・フランシス様を守って亡くなった騎士の名前。

——ナサニエル・レイン。

彼はライアン様の親友だった。

友の死に苦悩するライアン様……そう、この名前がいい。

わたしの名前はエルザ・クリンプトンではなく、ナサニエル。ナサニエル・レイン。

平民だった彼は聖騎士を目指し、そしてライアン・フランシス様のパートナーとなった。

ライアン様が唯一、その心を許した相手。

わたしはこれからナサニエル・レインとして生きる！

そして、そこで思い出した。

「出来あがった服を取りにいかなくちゃ」
代金は前払いしてあった。

せっかくだから、家を出るついでに服を取りに行こう。

時刻はまだお昼前、今から出れば隣町にはお昼過ぎには着けるはず。

馬車ではいけないから徒歩になるけれど、ミネリ村からそう遠くない所にある。

山道を下って2時間弱の道のり。

「よいしょっと」

わたしは手持ちのナイフと本、それから今まで貯めてきた金貨を袋に詰めて立ち上がった。

「ふん」

気合を入れて、それを右肩にからう。

分厚い本が入っているだけに、結構 重たい。

どうしよう、もう少し持っていくものを減らすべきだろうか？

悩んでいると扉を叩く音がした。

「エルザ、エルザ！部屋にいるのか！？」

お父様の声に咄嗟にベッドの下に隠れる。

返事のないわたしの部屋に飛び込んできたお父様とお母様は、部屋の中を見渡して、あるものに気付いて声をあげた。

「ああ……エルザ……」

そう言っていると、お母様はその場でふっと意識を失ってしまう。

「奥様！」

お母様が床に倒れる寸前に執事のバッスンが、その体を支えた。

「エルザ……わたしが腑がないばかりに……」

鏡台の下に散らばったわたしの髪をお父様がすくいあげる。

……しまった。片づけるのを忘れてた！

「バッスン。エルザを探してくれ。まだそう遠くへは行っていないはずだ！」

お父様が言う。

「かしこまりました。旦那様」

そう言って、バッスンはお母様を立たせ、部屋を出ていこうとする。

けれど、彼のその足をお母様が引きとめた。

「バッスン……もう、いいのよ。遅かれ早かれ、こうなっていたのかも知れないわ。わたし達の本当の子でないと、あの子に知られていたなんて……」

え、え、ええええええ！？

ちよ、ちよっと待って。お母様。

「いずれこうなる運命だったのよ。あの子をずっと大事に育ててきたけれど。もう少しこの手に抱いて居たかったけれど……こうして、自ら旅立ってしまった」

お母様が泣いている。

「今はただ……あの子の旅立ちをそっと見送ってあげましょう」

お父様が泣いているお母様の手をとって、

「ああ、そうだな。お前の言うとおりで。わたしたちは少し子離れないと いけないのかもしれない」

そ、そんな、お父様。

「お前は少し休みなさい。体に触る」

「……ええ」

お父様はお母様を連れだって部屋から出ていく。その後にはバスンが続く。

そうして、バスンは部屋の扉を閉める前に、部屋の中を見回すと、すんつと鼻を鳴らした。

——パタン。

扉がそつと閉められて、部屋には静けさが戻る。

わたしは呆然としたままベットの下からはい出した。

……どうしよう。どうしたらいいの？この状況。

つい、衝動でこんな行動をとってしまったけれど。

わたしは出来あがった服を町にとりに行ったら、また普通にこの家に帰ってくるつもりだったのに。

髪を切ったのだって、こんな短い髪の毛じゃ恥ずかしくて外には出してもらえないだろう。

いくら田舎の貴族でも、流石に娘にこんな髪させてたんじゃ、王都になんか連れて行けないよね。

聖女になれ、だなんて言えなくなるんじゃないかなあ、という計算の元だったのに。

あげくに、わたしがお父様とお母様の本当の子供じゃないだなんて！？冗談じゃない！

わたしが言ったのは言葉の綾だ。

もちろん、小さい頃に両親と髪の色が違うことで村の子にイジメられたこともあった。

お前はもらわれっ子だーってね。

でも、髪の色が違うのは聖力の所為で、瞳の色はお父様とお母様と同じだったから、わたしは全然 信じてなかったのに。

もし、本当に　よその子だなんて知ってたら、あんな風に叫んだりしない。

ちよつとはオカシイかなあって思ってたけれど……だってわたしはお父様にもお母様にも似てなかったから。

何度も言うようだけど……本当に、どうしよう。

ひよつとして、いや、ひよつとしなくても、わたしって見捨てられた!?

真実を知ってしまったら、なんとなく出て行き辛いし。知らない振りをするってのもありかも?

「——とりあえず、洋服だけでもとりに行こう」

わたしはトボトボと、いつも使っている秘密の抜け道から屋敷の外に出た。

2時間弱だなんて、わたしは山道を甘く見てた。

一応、綺麗に整備されてはいるものの、鬱蒼とした木々に囲まれた山道を下ること3時間。

その間、誰にも遇わないんだから、ミネリ村って つくづく田舎なんだって思い知らされた。

まあ、時間帯がちょうど人通りの少ない時だったんだろうけれど。

それから、麓に辿り着いて、町に入ってから、わたしが注文した仕立て屋に辿り着くまで、プラス1時間半かった。

いつもはバスンを騙して、家の馬車を使ってたから1時間ちょっとで行けた道のりも、わたしの足では無駄に時間がかかった。

町に着いてからも道に迷うし。絶対、こっちだって思っていたのとは反対の方に目的の店はあった。

——「クレメリーの仕立て屋」

その看板の店に入って、引き換え券を渡すと、商品を受け取る。

店員さんはわたしの髪をチラッと見たけれど、何も言わずに出来あがった服を見せてきた。

「ご注文の品はコチラでお間違えないでしょうか？」

……ああ、なんて素敵なんだろう。

この国の聖騎士の服とそっくりなソレ。もちろん実物なんて見たことないけれど。

絵なら『月刊 聖騎士☆通信』で何度も見ている。

それに『聖なる騎士物語』の挿絵も、実物を忠実に再現しているって噂だし。

「ええ、間違いありません」

わたしは嬉々として、その服を受け取った。

ああ、やっぱり取りに来てよかった。

これまでの憂鬱な気分がウソのように足取りが軽い。疲れも吹っ飛んだみたい。

わたしは店の外に出ると、早速その服を身につけたくてウズウズしていた。

ちよつと羽織って見るだけ。

……どこか、人目につかない場所はないかしら？

どうせなら自分の姿を見れる所がいい。建物と建物の間の細い道なんてのはどうだろう。

しばらくブラブラして、ちょうどいい場所を見つけた。

ちよつと暗くて陰気な通り。

普段ならそんな所に立ち寄ったりはしないんだけど……。

ちょうど店先のショーウィンドウが鏡の役割を果たしてくれそうだし。

そちらに近づくと、ふと目に止まる物があつた。

「——なんでも願いが叶う指輪？」

ショーウィンドウの隅っこに飾られてある指輪は、銀色で真ん中には黒い石。

その周りをとり囲むように繊細な蔦の模様が彫り込まれている、なかなかの物だった。

わたしはその店の看板を見る。

——「フラメンス聖具店」

「ここって聖具屋さんなんだ……」

わたしは感嘆のため息と共に、思い切って店の中に足を踏み込んだ。

落ちついた色調で統一された店内。

店には聖力がなければ使えないアイテムが、数多く並べてある。でも、どれも見た目は普通のアクセサリとは変わらないような凝った造りで、通りのイメージから、ちょっと不気味な想像をしていたんだけど、予想外の展開だ。

「いらっしやいませ」

声をかけてきたのはダンディーなおじ様。

オールバックの灰色の髪は、クリンプトン家の執事、バツスを思い出す。

「あ、あの。ショーウィンドウにある指輪なんですが……」

「はい」

「なんでも願いが叶うって本当ですか？」

わたしは自分の肩の荷物が商品に当たらない様に手に持ちかえながら言った。

「ええ。その様に伝えられています」

そう言っておじ様が温和な笑みを浮かべる。

「本当!？」

わたしは興奮して尋ねた。そんな指輪が普通に売られてて、いいの？

だって本当に願いが叶うなら、誰だって欲しいはずよね!

「実はあの指輪は聖具ではなく、神具なのですよ」

「……神具!？」

聖具が人の手によって作られた物とするならば、神具は神によってもたらされた物だ。

「神具は神の道具ですので、人には効果が無いと言われています。ですからお守りとして身につける方が多いですね」

「他にもあるんですか？」

「当店で取り扱いの神具はあれだけです。そうあるものではありませんので。大変、貴重ですよ」

神具……神具といえば！確か、ライアン・フランシス様も身につけていらっしやったはず。

『聖なる騎士物語』第2巻の途中にそう言う記述があったもの。ライアン様の神具は指輪ではなく、ピアスだったけれど……。確かお母様の形見とかなんとか。

「おいくらですか!？」

……ああ、今日はなんて素敵な日なのかしら。

わたしは鼻歌を歌いながら、先ほどの聖具店のすぐ脇の路地に入りこむ。

積まれてある木箱にそつと腰を下ろして、手に入れたばかりの指輪を自分の右手薬指にはめてみた。

「ああ、素敵!」

指輪の値段は神具という割に、そこまで高くなかった。——金貨30枚。

普通の聖具が銀貨5枚とかで買えちゃうんだから、なんの効力もない割には高いのかもしれない。

けれど、これでまた一步、ライアン・フランシス様に近づけた気がする。

全財産を使いきってしまったけれど……。

そろそろ家に帰らなきゃ。

来る時に思ったより時間が かかったから、村に着く頃には夜になっっているかもしれない。

でも、わたし、他に行くところなんてないし……。

これから家に戻っても、お父様とお母様はわたしを受け入れてくれるかしら。

わたしがお父様とお母様の子ではないなんて、きっと何かの間違

えに決まってる。

だって、だって……。

「……はあ」

わたしは　ため息をついて、手元の紙袋を見た。白い聖騎士の服。滑らかな手触りのその服を　座っていた木箱から下りて、羽織ってみる。

想像するライアン様の体型に合わせて作ったから、少し、いや、かなり　ぶかぶかだけど。

「ああ、なんだかコレって……」

まるでライアン様の服を借りちゃいました、みたいな感じだ。

わたしはこの服を使って、ライアン・フランシス様の等身大　人形を作ろうとしていた。

まだその材料なんかを探している途中だったんだけど。

「それも、今日まで、かな」

わたしが男だったら、このまま聖騎士を目指して、王都まで行くのに……。

再びため息をついて、わたしは右手に光る指輪に願い事をしてみた。

「わたしを聖騎士にしてください。その為だったら、どんな困難にだって打ち勝って見せます」

なんてね。そんなの叶うはず無い。

それよりも……。

「ライアン・フランシス様に会えますように」

と、こちらも叶うはずない夢なんだけど、でもせっかく大枚はたいたんですもの。

これくらいの夢を見たっていいわよね。

「おい、お前」

突然、右手から かかった声にわたしは思わず飛び上がる。

「ひゃい！」

変な声が出てしまった。

恐る恐る声のした方を振り向くと、そこにはライアン・フランシス様がいた。

「ああ、神様……」

わたしの願いを聞き届けて、この世にライアン様を降臨させて下さったんですね。

でも、わたしのライアン様はけして人様に「お前」なんて言葉使ったりしませんよ。

ここはやっぱり「その君」とか「あなたは……」みたいな台詞がピッタリだと思います。

わたしはそんなことを考えながら、意識が遠のいていくのを感じた。

……ああ、耳元で声がする。

その見た目よりも ほんの少し低い声がス・テ・キ。

ナサニエル・レインの誕生 — 5 — (前書き)

※ 下ネタ注意。

目が覚めると暗い室内に居た。

何故かは分からないけれど、後ろ手にされて手足を縛られてるみたいだ。

……これは誘拐？

わたしをクリンプトン家の娘と知っての仕業だろうか？

でも、そうだった。わたしは今、男装しているんだった。

じゃあ、何故だろう？それなりの身なりだったから、どこかの子息と間違えられた！？

それとも、髪の色在所為……？えーい、忌々しい。

でも、この髪色。確かに稀ではあるけれど、100人に1人くらいの割合だから、そこまで珍しくもない。

考えられる可能性としては子息の誘拐が濃厚かしら？

でも身代金をとるにしても、身元がハッキリとしてないと無駄よね。

——タダの人買いだろうか。

子供の頃、よく屋敷を抜け出していたわたしに子守りのターニャが言っていたのだ。

「1人で外を歩き回っていると、人買いに攫われてしまいますよ」って。

わたしは全くそんなこと信じてなかった……だって、攫われたことなんて1度もなかったから。

わたしを怖がらせる為のウソだと思ってたんだけど……本当に居たんだ。

きつと村にはいなかったけど、町にはいたのね。

……どうしよう。

きつと、どこかへ売られちゃうんだ。

聖なる神の国と称される聖トリエスタ王国には奴隷制度はないけれど、ひとまず外に出てしまったら、わからない。

色んな国が存在しているから。

でも、大抵の国が同じ神、ファームリアムを崇めている。

そんなに酷い扱いはされないとと思うけれど……。

「おい、お前」

室内に突然、声が響いた。

……ああ、なんだか聞き覚えがある声だ。

そう、見た目よりちよつと低めの……はっ！！

「ライアン・フランシス様!？」

わたしが上げた声に、視界の隅の暗がりで何かが動いた。

ひいえええ。オバケはちよつと勘弁してほしい。

誰か！誰か！！明かりをつけてちょーだいっ！

心の中で、そう必死に叫んでいると、パツと明かりが灯った。

と言うか、声の主が部屋のランプに火を点けたみたいだ。

……なーんだ。影の正体はライアン様だったのか。

恥ずかしい。オバケなんかと勘違いするなんて……わたしの愛もまだまだと言うことね。

「――目が覚めたのか」

ライアン様は気だるそうな様子で、コチラを向く。

ああ、何て言うか……その肉体美。

わたし……男の人の裸なんて、初めて見たわ。上半身だけだけど。

部屋に灯る小さな明かりが、彼の体を下から照らし出していて、なんとも欲情的……。

続いてコチラに近づいて来る彼の顔を、窓から差し込む月明かりが青白く照らしていた。

「ああ……神様」

う、美しい……う、ライアン・フランシス様!!

ハア、ハアと思わず鼻息が荒くなる。

そして、何故か下半身がムズムズとして、熱い。

ああ、なんなのこの感覚!

初めて感じるような……でも、でも、堪らない!!

「……お、お前、大丈夫か？」

わたしのすぐ傍までやってきたライアン様は、明かりに照らされたコチラを見るなり言った。

「ええ、すこぶる元気です! 興奮しています!!」

縄で縛られて、床に転がっている状態でわたしは答えた。
すると近くまで来ていたライアン様が、一步、後ずさる。

……あーん、後もう少し近づいてくてもいいのにい。

そんなことを思いながら、わたしは疼く自分の下半身を見た。

はて? わたし下半身に詰め物でもしてたかしら?

この盛り上がっているモノは、なあに?

そう言えば、先ほどから胸元がスースーする気がする。

無駄に成長していた胸を潰す為に締め付けていたから、そんなハズないのに……。

これじゃあ、まるで男の人の体だわ。

「つて、男おお!?」

突然、叫んだわたしに、ライアン様が剣を突き刺す。
それも、わたしの目と鼻の先の床に。

「……ラ、ライアン様？」

自分の身に起こったであろう珍事よりも、愛しのライアン様に剣を突き付けられているコトの方が衝撃だった。

「ラ、ライアン様……どうされたのですか？何か気に障るコトでも？」

わたしは震える声で、そう尋ねた。

だって、嫌だ。ライアン様に嫌われたくない。

「ライアンって言うのは俺のことか？」

わたしの声に剣を突き刺したまま、ランプを近くのテーブルに置いたライアン様が言った。

ああ、なんて冷たい眼差し。まさに金色こんじきの悪魔ね。

昼間なら明るいブルーの瞳が、今は黄色い明かりに照らされて、複雑な色を作り出している。

「ああ、ライアン様……あなたはライアン様でしょう？」

わたしの目はきつと今、うるうると潤んでいるに違いない。

夢にまで見たライアン・フランシス様にこうやって会うことが出来たんですもの。

架空の人物だったはずなのに、こうして今、わたしの目の前に……。

しかも、わたしは今、男の人みたい。

だって、体がオカシイし。これなら聖騎士にだって、なれるんじゃないだろうか。

それもこれも全て、きつと多分、指輪のおかげだ。

金貨30枚の指輪が、わたしの望みを叶えてくれたんだ。

「俺はライアンなんて名前じゃない」

感極まったわたしの頭上に冷たい声が降りかかった。

「またまたあ」

ご冗談を。そんなに見た目がソックリなのに、別人だなんて言わ

ないで欲しい。

ひょっとして、わたしのこと焦らしてるの？

それとも……謙遜なのだろうか？

確かにちよっと、性格は違うような気がするけれど……だって、ライアン様は自分のことを「俺」なんて言わない。

「わたし」とか「僕」だもの。

なんたって、王子様だからね。育ちがよろしいの。

どんな苦難な道を超えられても、その お優しい性格は変わらなかったのよ。

だから、友の死や仲間の死に随分と苦しんだのだけど……。

ライアン様は本来、虫も殺せぬような優しい方なんだから。

「お前が誰と勘違いしているかは知らないが、俺には別の名前がある」

……偽名ってことかしら？

それなら納得だ。ライアン様は一人歩きする名前の為に度々偽名を使う。

時にはブライアン、時にはキース、時には……と、まあ様々な、

その場 限りの名前だ。

「あ、あの……今のお名前は？」

「今の？ 今のも何も……俺の名前はケイン。それだけだ」
ケイン、ケインとおっしゃっているのね。

「わかりました。ケイン様と呼ばせて頂きますね」

「いや、呼ばなくていい」

そ、そんなあ……。

「それよりも、お前の名前は？ 仲間はどこだ？」
名前……に、仲間？

「わ、わたしの名前はナサニエル・レインと申します！」

咄嗟にそう答えて、わたしは慌ててしまう。

「あ、すみません。その……あなたの大切な友と同じ名前だなんて、おこがましいにも程がありますよね。でもこの名前しか思いつかな

くて……ですから、出来たらこの名前で呼んで頂きたいと……」

「何を言ってるんだ？」

訝しげな顔をして、ライアン様（……じゃなくって今はケイン様よね）が言う。

「あ、あの。はい。ですから、あなたの友の」

「さっきも言ったが誰かと勘違いしている。俺にナサニエル何て言う知り合いはいない」

「え……でも」

「でも、じゃない。さっさと質問に答えろ。答えないなら斬る」

そんな。ライアン様、じゃなくてケイン様は記憶喪失なのだろうか？

それとも……ショックでその名前を思い出したくないとか。

「す、すみません……ライアン様の気持ちにも気付かずに」

「だから、ライアンじゃないって、さっきから」

苛立たしげに髪を掻き耨るラ……いや、ケイン様。

「ああ、ケイン様でしたよね。すみません、慣れないもので」

「慣れる必要はないが……それよりも、お前の仲間はどこだ？」

はて？ケイン様は何をおっしゃっているのか。

「仲間、とは？」

「仲間って言ったらアレだろ？お前の仲間だ」

「……………」

「……………」

首を傾げるわたしに、つられてライアン様が眉を潜める。

あ、しまった。ライアン様じゃなくて、ケイン様。つつい長年の習慣で。

「——お前……盗賊団「白い風」って知ってるか？」

「はあ……知ってるような、知らないような？」

聞いたことがあるような、ないような。

何かの本で読んだんだろうか？

「いや……お前。それ、本気で言ってるんだろうな？正直に答えないと、例えば子供でも容赦しないぞ」

子供って、わたしのことだろうか？

ケイン様にはわたしって、一体 いくつに見えてるのだろう……。本当は16歳だけど、わたしの脳内設定では14歳くらい。

まあ、子供と言えど、子供よね。

「あの……ケイン様。わたしは何とお答えすればいいのか、さっぱりわかりません」

わたしは正直にそう言う。

だって、話の内容がまったく掴めてないんだもの。

「いや、あのな……ったく、俺の説明が悪いのか？」

ケイン様は呟いて、再び頭を掻き耷る。

ああ、その仕草……素敵だけれど、ちよつとイメージと違う。

でもライアン様は、今、ケイン様だから、仕方がないことなのよね。

今は王子様っていうより、どちらかと言うと、そこら辺の傭兵って感じだもの。

あ、そこら辺の傭兵なんかと一緒にしちゃダメよね。

彼らは大体が聖騎士になり損ねた人たちだ。

剣の腕は立つけど、聖力が足りなかった人たち。

それでも魔物くらいはやつつけられるから、お金がない平民や商家に重宝されている。

聖騎士に護衛についてもらうと、表向きには無償なんだけど、裏ではお金を渡さないといけないらしい。

寄付って名目のお金を。

この知識は『聖騎士の裏と表 一社会での役割一』という本から学んだ。

発売してすぐに、神殿側の圧力により絶版になったものだけど。

「あの……ライアン様？」

わたしは今、そんなことよりも考えなくてはいけないことがあった。

「……………」

無反応なライアン様って……あ、ケイン様だった。

「ケイン様？」

「なんだ」

「わたし、トイレに行きたいんですけど……」

「トイレならこの部屋を出て左に曲がった角にある」

「あの……これじゃ、歩けません」

わたし、足を縛られてる。

「ああ」

ケイン様は頷いて、足の縄を解いてくれた。

あ、今、ちよつとわたしの足にケイン様の指の感覚が！

ああ……なんて、なんて、興奮するのー！！

落ち着け、わたし。落ち着けー。今、興奮したら、取り返しのつかないことになる。

「あ、あの手の方もお願います」

「——お前、逃げる気じゃないだろうな」

「逃げるなんて！わたし、そんなことしません！」

ライ……ケイン様のお傍を離れるなんて、今は考えられない。

トイレにだって一緒に行きたいくらいなのに。

ケイン様は後ろ手で縛っていた縄を解いて、今度は前にして縛った。

「念のため、俺もついて行く。縛っていても、それなら用くらい足せるだろ」

きゃー、ケイン様もわたしと離れたくないのね！

……トイレにも一緒に行きたいくらいに。

「はい！行きましようー！！」

わたしが元気よく答えると、ケイン様は少し嫌そうな顔をした。
……照れていらっしゃるのかしら？

噂の義賊「白い風」 — 1 — (前書き)

※下ネタ注意。

噂の義賊「白い風」 — 1 —

トイレに着いて、わたしがまず思ったことは……何、これ？ だった。

だって、だって、壁一面に変わった形の陶器の器が等間隔に並んでいるのよ。

こ、これで、どうやって用を足せっていうんだろう。

途方に暮れるわたしにケイン様は言った。

「何だ？ 小便したいんじゃないのか？」

しょ、しょうべんですってえええ！！

止めてください。そんな美しいお顔で小便だなんて。

せ、せめてオシッコって……いや、それも色々と間違ってる気がする。

やっぱり小便でいいのかしら？ 何かもっと相応しい言葉が……黄色い水とか？

それはそれで嫌な気がするけれど。

「あ、あの……どうすればいいんでしょう？」

わたしは取り合えず聞いてみた。

イメージとか云々よりも、この歳でお漏らしなんて経験したくない。

「はあ？ 普通に立ってすればいいだろう……って、お前、男のくせに立ちションしたことないとか言うなよ」

立ちション——それは立ったまま用を足すこと。

そんな高等技術、ほんの少し前まで女だったわたしは経験したことがない。

「ないです」

「は？」

「ないんです！ 立ちションなんて！！」

「お、お前……どこの王族だよ」

王族？王族って立ちションしないモノなのだろうか？

そんなことよりも、奥の方に個室があるみたいだから、そこで何とか用を足そう。

わたしがそちらに行こうとすると、ケイン様に引きとめられた。

「ちよつと待て。教えてやるよ、立ちションの仕方」

……え、えつと？

そう言っケイン様は徐に1つの器の前に立つ。

「まず、ズボンを下ろすだろ？それから自分のモノを持つ。そして、あの少し窪んだ所を目がけて出す。わかったか？」

いや、わかったかって言われましても。

「わたし、個室でやります」

いくら お相手がケイン様でも、そんな自分を晒すような真似は出来ません。

モノには順序つてものがありますし。

わたしがずっとお慕いしていたことには変わらないけれど、やっぱりねえ。

個室だったら女性のトイレと同じ作りだと聞いたことがあるし、

屋敷のトイレは みんな そうだった。

突然、体が変わってしまっても、多分、やり方にそう違いはないと思う。

取り合えずズボンを下ろして、座ってすればいいのよ。

だから、こんな往来の目の前でお尻を見せて、立ってするなんて、考えられない。

ドアは閉まってもカギがないんじゃない、いつ、誰が入ってくるか、わからないじゃない！

「お前なあ。恥ずかしがってる場合じゃないだろ？男だったら、こっちでするもんだぜ。それとも何か？用があるのは大便の方だった

のか」

「ち、違います!!」

だ、大便とか、言わないで欲しい。

わたしの中のライアン・フランシス様のイメージをこれ以上、壊さないで!!

「や、やればいいんでしょう……やれば!!」

う、うう……どうして、こんなことに。

「あ、あのー。むこう向いてて下さいね」

「その間に逃げようってか？」

そう言って目を細めるケイン様。

うう……そんな目で見ないでほしい。

「……わかりました」

わたしは小さな声で答えた。

そうね、きっとコレは試練なんだ!

願いを叶えてくれた神様がわたしに与えて下さった試練。

聖騎士になれたら、どんな困難にだって立ち向かって見せるって誓ったんだもの。

……まだ、なれてないけれど。この体になったことで、道は開けたってコトよね。

うんうん。

わたしは頷くと、壁際の器の前に立った。

なんとなく、隅っこの方が落ち着く気がしたのだ。

意を決してズボンを下ろそうとするけれど、手が縛られてて上手くいかない。

「うーん、もう!」

四苦八苦してると、後ろから声がかかった。

「ったく、しょーがねーな。ズボンくらい1人で下ろせねーのかよ」
金色の髪をポリポリ掻きながら、ケイン様が近寄ってくる。

え、ちょっと……何をなさるおつもりで？

「さっさとしねーと、洩らしちゃうぞ」

言ってわたしのズボンを下着ごと引きずり下ろした。

「あれ、お前。なんだって女物の下着なんか履いてるんだ？」

だって、だって、それは……。

「いぎやあああああ！」

わたしの羞恥の叫びに駆けつけて来てくれた人は、どうやらケイン様のお知り合いだったみたいだ。

どうしてわたしの前に神様が降臨させて下さった ライアン・フランシス様ことケイン様にお知り合いがいるの？ だとか。

その他、色んな疑問がわたしの頭の中に渦巻いたけれど。

「——ケイン。部屋にいないと思ったら、こんな所で、いたいけな少年に何て事を……」

「い、いや。ジェフリー、これには深い訳が」

「これのどこに深い訳があるって言うんですか？ あなたはこの少年を無理やり」

「いや、誤解だ。ジェフリー」

「情けないです。僕はそんな方の元で汗水たらして働いていたなんて」

「お前が汗水たらして働いてたことなんて、1度も見たことないが……」

トイレに入ってきた黒髪の男の人、ジェフリーさん(?)とケイン様は仲よさそうに会話している。

……う、羨ましい。

できる事なら、わたしも仲間に加わりたい。

でも、でもね——わたしは堪え切れずに泣いていた。

ズボンを下ろされた衝撃で、出るモノも引っ込んじゃったけれど。
見られた！見られた！！

今は女じゃなくて、男だけど、そういう問題じゃないわよね！

ああ、もうお嫁にいけない。この場合はお婿なのかしら？

憧れのライアン様ならまだしも、見知らぬ男性にまで下半身を露出した姿を！

っていうか男同士なら、ありなの？平気なものなの？この状況。

どうでもいいけど、笑ってないで、ズボン上げてよ！

こんな風に縛られてちゃ、届かないんだからー！！

泣きだしたわたしをなんとか宥めすかしたケイン様とジェフリーさんは、一先ずわたしを先ほどの部屋へと連れて行った。

どうやらここは宿屋のようで、ジェフリーさんが下の食堂で適当にご飯を見つくりつけてくれる。

気のすむまで泣いたわたしは、両手を縛りあげていた縄を解いてもらって、それから、ちょうど お腹が減っていたので、それを黙々と食べた。

「あ、ちよっと……聞きたい事が……」

あるんだけど、とケイン様に言われても、食べる！

ああ、何てことだろう。

これが、聖騎士になる為の試練なのだろうか？

そうよね……聖騎士になったら、周りは男の人ばかり。

これしきの事でダメージを受けてちゃダメよね。

笑って流せるようになってくちや。

だって、わたしはエルザ・クリンプトンではなく、ナサニエル・レイン。

れっきとした男の子なんだから。

でも、どうしよう……このまま家に帰ってはダメかしら。

ダメよね……。

血のつながらない男児なんて、邪魔なだけだ。弟が生まれたなら尚更。

やっぱり、わたしには王都に向かって聖騎士になるしか道はない、わよね？

「あ、えっと……ナサニエル、だっけ……もう、落ち着いたか？」

あれからライアン様、もとい ケイン様は微妙に罪悪感を感じたのか、ほんの少しだけ、わたしに優しく接してくれる。

それは嬉しい、嬉しいんだけど……わたしが求めていたことと大きく差がある気がするの。

「……………」

わたしはケイン様を無言で見つめる。

ああ、思い出すだけで涙が……。

そんなわたしを見て、ケイン様が、うっと言葉を詰まらせた。

「申し訳ありません。怖い思いをされたでしょう？まさか僕もケインがあんなことをするなんて、思っても見ませんでした。いくら女性が苦手だからと言って……こんな少年に手を出すなんて」

そんな時、ジェフリーさんがわたしを見て言った。

さっきは気が動転していてわからなかったけれど。

この人、どこかで見たことあるような気がする。

綺麗に整えられたブルネットの髪。

それからグリーンの瞳は、まるでお父様とお母様みたいな色合いをしている。

横わけにした髪に乱れはなく、そして、優しい笑みを湛えている。

「ジェフリー！それはさっきも説明しただろう！？」

彼の言動にカツと頬を赤く染めたケイン様は、何と言うか、可愛いらしい。

ライアン様とは少しイメージが違うけれど、これはこれでいいんじゃないだろうか？

もしかしたら、物語が進んでいくにつれて、こういう場面も見られるのかしら。

「冗談はさておき、ナサニエルさんとおっしゃいましたか」

そう言って、頭を上げるジェフリーさん。

「冗談かよ」

なんてケイン様がその横で悪態をついている。

……う、やっぱりイメージじゃない。顔はソックリなのに。

わたしは気を取り直して頷いた。

「はい。わたしはナサニエル・レインと言います。失礼ですが、ジェフリーさんはライアン様の何ですか？」

「ライアン、様？」

「ええ、ライアン・フランシス様です」

訝しげな表情のジェフリーさんに、わたしは頷く。

「ライアン様と言うか、今はケイン様と名乗っているようですが……」

「ケイン……」

ジェフリーさんはわたしから視線をケイン様にうつす。

「言ったろ？こいつ俺の事、ライアン様とか何とか言って聞かないんだ」

おかしな奴だろ？って、ケイン様ったら、酷い。

わたしは おかしな奴でもなんでもなくて、ナサニエル・レインだって ちゃんと名乗ったのに。

それとも本名の方がいいのかしら？

「ナサニエルさん……ひょっとして、ライアン・フランシス様と言うのは……今、巷で人気の『聖なる騎士物語』の主人公、ライアン・フランシスのことですか？」

「ええ！ジェフリーさんも御存じですか！？」

「はい。愛読させて頂いてますが……」

ああ、こんな所で同志と出会えるなんて。

「ナサニエルさん、非常に言いにくいことなのですが。ここにいてケインは見てくれこそ物語の主人公にそっくりですが、本当に見てくれだけ、なんですよ」

「そんな、違います！ジェフリーさん。わたしちゃんとお願ひしたんです。神様に。そしたらライアン様が現れて」

「彼はライアン様ではありませんよ。あなたも聞いたことくらいあるでしょう。この人はこう見えてもこの国の王子です。今は任務中でこんな恰好ですが……彼の名前はケイン・フィード・トリエスタ。ライアンと言う架空の人物ではなく、実在する人ですよ」

「……そ、そんな」

願いが叶ったと思っていたのに。

わたしはジェフリーさんの言葉に愕然とする。

「本当に、ライアン様じゃないんですか？」

本当の本当に？わたしはケイン様とジェフリーさんを見た。

「おい、ジェフリー。こんな得体のしれないヤツに正体ばらしていのか？この任務は一応、極秘にすることだっただろう？」

「彼は大丈夫だと思いますよ。盗賊団「白い風」の一味ではない筈です」

「筈って、お前なあ」

2人の会話がまったく耳に入って来ない。

ケイン様がライアン様じゃない？

じゃあ、ライアン様はどこに……って初めからいないのか。

「……ライアン様っ」

どうもわたしの今日の涙腺はすこぶる緩くなっているらしい。

次から次に流れてくる涙に、ケイン様とジェフリーさんは困ったようにため息をついた。

「ジェフリー、こいつどうする？」

「あなたがここに連れて来たんでしょう？ケインが最後まで面倒みて下さい」

「お、俺があ？」

ひつく、ひつくとしゃっくりをあげるわたしに、ケイン様が顔を引き攣らせる。

「俺、無理。ガキは嫌いだ」

「あなたはそれだけじゃなくて、人が嫌いなんでしょう？」

ジェフリーさんの言葉にケイン様は顔を顰める。

「ウルサイな。ほっとけよ」

「昔はあんなに可愛らしかったのに」

「小さい頃の話はするな！」

「あの時は無邪気でしたよね。疑うことも知らずに、姉君たちに

いいように遊ばれて……」

「ウルサイ！」

……あ、なんか。わたしって忘れられてる？

もう、どうでもいいや。なんだか泣いたら疲れちゃったし。

わたしってば、今日、かなりの距離を歩いたものね。

お腹はまだ空いてる気がするけれど、それよりも、今は眠い……。

わたしは言い合っている2人を無視して、近くのベッドに潜り込む。

あ、このシーツの匂い。ケイン様の匂いだ。

彼がライアン・フランス様じゃなかったのは残念だけど……モデルと噂される人物だけのことはある。

見た目は本当にそっくりだ。

あの雑誌の挿絵、まんざら嘘でもなかったのか。

何割か美化されていると思ったのに。

見た目だけなら……それでも十分な気がする。

わたしのライアン様に、そう呼ぶに相応しい人柄になってくれさえすれば……。

「おい、お前！そこは俺のベットだぞ！！」

ほら、この言葉づかい。これをまずは正して。

「おい、出ろって！寝るな！！」

仮にも一国の王子がこんな、だなんて。

まあ、わたしも人のコト言えないけれど……。

「おい、お前。ナサニエル・レイン！」

そう、お前じゃなくて、ナサニエル・レインよ……。

わたしはそれから程なくして、夢の世界へと旅立った。

噂の義賊「白い風」 — 2 —

目覚めると、わたしの隣には美しい金の髪をした男の人が眠っていた。

ああ、ライアン・フランシス様。

わたしはその薄い唇にそっと口づけを落とす。

うーん。いつもと違って無味無臭。

だっていつもは肖像画でしょう？ 乾いてはいても、油絵独特の臭いが鼻につく。

でも、今日の愛の接吻は、何て言うか……柔らかい。

そうね、もう一回くらい。

「んー」

目を閉じて顔を近づけていくと、大きな手に頭を押さえられた。

「あれ？」

「あれ？ じゃない！ お前は今、何をしようとした？」

「何って、口づけのコトですか？」

パチクリと瞬きすると、開いている方の手で寝癖のついた頭をバリバリと掻き毟るケイン様がいた。

「ケイン様、そんな風に頭を掻かないでください。ライアン様はそんなコトなさいません！」

「いや、お前な」

「人のコトをお前って呼ぶのもナシです」

「だから、俺は」

「俺ではなく、わたし。もしくは、わたくし。それが嫌なら僕でも構いません。取り合えず、俺って言うのは止めてください」

「いや、そんなコトより。お前、俺にキスしようとしただろ？」

「お前でなく、ナサニエルです」

「だから……」

「ナサニエル！」

「……な、ナサニエル」

「そう、よろしい」

わたしがそう言った所に、背後から拍手する音が聞こえる。

「いやー、お見事です。ナサニエルさん。ケイン様に言うことを聞かせるとは。この我儘王子には僕たち第3聖騎士団員も手を焼いておりました」

振り返ると、隣のベットではなく、部屋の入り口付近に立っているジェフリーさんの姿があった。

ジェフリーさんはいつの間に着替えたのか、白いシャツに少し値段の張りそうな紺色のジャケット。

それから同色のズボンを着こんでいる。

胸元には赤いスカーフが巻かれていて、ちよつと何処かのお坊ちゃんみたいだ。

昨日はケイン様と似たような、その辺のゴロツキ風な恰好だったのに。

と、言うか、それよりも……。

「ジェフリーさんって、聖騎士なんですか!？」

思わず身を乗り出してしまったので、わたしは勢い余ってベットから転がり落ちてしまった。

そんなわたしに手をかしながら、ジェフリーさんが頷く。

「お恥ずかしながら、これでも第3団の副団長を務めさせて頂いてます」

「――副団長……」

おお、こんな所に聖騎士になる為の近道が……。

考えてみれば、ケイン様も聖騎士団の団長なのよね？

この2人に上手くとり入れれば、ひょっとしてわたしも憧れの聖騎士団の一員になれるかも！？

「あ、あの！わたし」

ジェフリーさんに思いの丈を告げようと、口を開くと、背後から不機嫌な声がした。

「おい、お前」

「――？」

お前って誰のコトだろう？

「お前だ、お前。首を傾げるな」

まったく学習能力のない。わたしはナサニエルだって言ったのに。わたしはため息をついて、ジェフリーさんを見た。

「ご苦労お察し致します」

そう言って、ジェフリーさんの肩に手を置くと、不思議そうな顔をされた。

おお、何て団長 思いの方だろう。

不甲斐ない上司の無能さに目をつぶり、その広い心で、ケイン様の成長を見守っているのね。

「おい！人の話を聞け！！」

まったく、ライアン・フランス様のモデルが聞いて呆れるわ。

ライアン様がケイン様だと思ってたから、様づけで呼んでいたけれど。

このような半人前は呼び捨てで結構ね！

――でも、仮にも一国の王子だもの。

それ相応の敬意は必要……ケイン王子って所が妥当かしら。

「話を聞いて欲しいなら、まず人のコトをお前だなんて呼ばないで

ください」

わたしの言葉にケイン王子は悔しそうに顔を顰める。

「……ナ、ナサニエル」

「はい。なんでございましょう？」

「目が覚めたらお前の顔が近くにあった」

それはそうだろう。

どうやら同じベットで寝ていたらしいから。

「そうですね。わたしが寝た時は1人だった筈ですが。何故、あなたがわたしのベットに？」

「お前のベットじゃない！俺のだ」

「はあ。でも後から入って来たのはケイン王子ですよ？」

「それは、そうだが……」

まったく、乙女の寝ているベットに忍び込むなんて。

いや、わたしは今、男だけれど……。

「一緒にベットに寝れば、相手の顔が近くにあったって仕方ありません」

わたしは至極当然のことを言ってみせた。

「それはそうですよね」

わたしの隣でジェフリーさんが頷く。

「それはその通りだが、いくらなんでも近すぎるだろう！？」

はて？彼は何のコトを言っているのだろう。

しばらく考えて、ああ、と思いつく。

「もしかして、先ほどのコトですか？」

わたしの日課のアレ。

「そうだ！お前、俺に何かしたか！？」

ベットの上に起き上ったままの体勢で、ケイン王子はわたしを見つめる。

その瞳には些か脅えの色が見えた。

「何って……ただのキスですよ？」

わたしの答えに、ケイン王子が喉の奥で悲鳴を上げる。

「お、お前……俺は男だぞ？」

「それが何か？」

「な、なんで、男が男にキスなんてするんだ！」

うーん、わたしはただ、ここにはライアン・フランシス様の肖像画がないから、その代用として彼を使ったただけなのに。

まあ、普通に乙女心としては、キスってどんな感じかなあー、なんて興味はあったけれど。

ケイン王子に対して、別に特別な意味があったわけじゃない。なんたってわたしの心はライアン・フランシス様のモノ！間違っても、見た目だけの偽物には与えられない代物だ。

……とか、色々言ってみたけれど、はっきり言って、寝ぼけてたのよねえ。

つつい、いつもの調子でやっちゃったけれど……。

わたし、心の中では動揺していると思う。

だって仕方がないじゃない？

昨日は色々ありすぎたんだから。

混乱しないって方が人としてオカシイわよね。うん。

だから目が覚めて、目の前にライアン・フランシス様みたいな顔があったから、条件反射でキスしちゃった。

うーん、日頃の日課だったから、無意識に出ちゃったんだろうな。習慣って恐ろしい。

「ケイン……あなたはとうとう僕の知りえない領域にまで達していませんか。すみません……僕、気付けなくて」

わたしとケイン王子のやり取りを聞いていたジェフリーさんが、呆然と呟く。

「ジェ、ジェフリー？誤解だからな。勘違いするなよ！」

神妙な面持ちのジェフリーさんに、先ほどまでわたしに突っ掛かっていた王子は、慌てて弁解し始める。

「いや、誤魔化さなくてもいいんですよ。王子。大丈夫です……す、少し時間はかかるかも知れませんが……僕は理解できると思います」
「違うんだ！ジェフリー。変な所で物分かりの良さを発揮させるな！」

すごく必死なケイン王子。

王子が一生懸命否定すれば、するほどジェフリーさんの表情が青ざめていってる気がするわ。

それって逆効果ってことなんじゃないかしら。

今のは冗談だぜって笑い飛ばした方が……。

「おい！お前も突っ立ってないで誤解を解け！元と言えばお前の所為で……！」

ああ、またお前って言った！

……ふん、知るもんか。

ケイン王子なんて、誤解されてしまえー！！

あ、でも、ライアン・フランシス様のモデルなんて噂されちゃってるケイン様にホモ説が浮上したら、ライアン様が穢される？

いやいや、ケイン王子とライアン様は全くの別物だもの。

そんな噂が流れたら、あつという間に「彼がライアン様のモデルよ」 「きゃあ、素敵」なんて乙女はいなくなるに違いない。

逆に喜ぶ人もいるかも知れないけれど……。

この間、読んだお話しは刺激的だった。

ライアン・フランシス様を称える為の会「聖なる騎士同盟」が毎月発行している会報には、ファンのみんなが書いた少し短い物語も載っているのだ。

そして、その中の1つのお話に、こういうのがあった。

ライアン様と彼に想いをよせる聖騎士の物語。

もちろん、聖騎士は男の人しかなれないんだから……。

結末はハッピーエンドでは無かったけれど。

憧れがいつの間にか愛情に変わってたっていう切ないお話だった。

でも世の中には同じ性別同士で愛し合う人々がいるっていうことを、わたしは知っている。

その知識の大半は本を読んで得たものだけど。

みんな純粹にお互いを愛しているのよね。

間違っても、わたしだけは偏見の目で見たりしない。そう、心に決めてるの。

……愛って奥が深い。

「無視するな！頼む！ナサニエル・レイン！！」

頼む、頼むですって？

そ、そんなこと言われても……ああ、その顔。

やっぱりライアン・フランシス様にそっくりだ。

しょうがないなあ……今回はその顔に免じて、助けてあげよう。

ちゃんと名前も読んでくれたし、ね。

元はと言えば寝ぼけたわたしの所為でもあるワケだし。

「やだなー。ジェフリーさん。冗談も通じないんですか？」

あははっとわたしは笑ってみせた。

「……冗談、ですか？」

「ええ。今までの流れは全部、ジェフリーさんをからかう為のほんの軽い冗談だったんですよ」

「本当ですか？」

わたしの言葉にジェフリーさんがケイン王子を見る。

「あ、ああ。こいつ……いや、全てナサニエルの言う通りだ」

うんうん、と、必要以上に頷く王子。

「いつもジェフリーさんにからかわれるから、少し見返してやりた
いって、頼まれたんです。わたし」

「そうそう、ジェフリーを見返す為に……って、おい！」

そこで、おい！なんて言ったらダメじゃないですか。ケイン王子。
もしライアン・フランシス様だったら、ここで機転をきかせて、
あることないこと つけたして、色んな事を有耶無耶にしていま
いますよ！

自分の身を守る時には嘘だって必要なんです。

そう、今のわたし みたいに！

と言うか、身元とかさっぱり聞かれてないから、ウソなんてつい
てないんだけどね。

いや、名前は嘘か。そもそも性別も違うし。

でも、そう言えば……わたしって、なんでここにいるんだろう？
確か洋服を受け取って、指輪を買って、路地の隅っこで試着した
までは覚えている。

そして、ライアン様ではなく、ケイン王子に声をかけられて、そ
れから……。

—— え、なんで！？

家に帰れないから、助かったのは助かったんだけど……。
そもそも、一番最初は縛られてたんじゃなかったんだっけ？

あれ、人買いは？

どうして、聖騎士の人がこんな田舎にいらんだろう……。

しかも制服も着てないし。

出来たら制服姿が見たい！っていうか、それ以前に、ここはどこ

？わたしは だあれ？

わたしは、わたしは……ナサニエル・レイン。なんちゃって。

「あのー。すみません」

わたしは今更ながらの質問を試してみた。

「あなた達は一体、誰で、わたしはどういった経緯でここにいますでしょうか？」

彼らの正体というか、名前とか肩書を疑っているワケじゃない。

俄かに信じがたいけれど、ケイン王子は確かに王子だと思うし。

口調がちよっとアレだけど。

ジェフリーさんだって、どことなく聖騎士って感じだし。こちらの勝手なイメージで、だけれども。

ただ、わたしは自分の置かれているこの状況に、やっと目を向けるコトが出来たのだ。

最初はライアン・フランシス様のコトで頭が一杯だったからね。

……愛って恐ろしい。

全てにおいて盲目になってしまっていた。

わたしの本当に今更な質問に、ケイン王子もジェフリーさんも脱力してしまったみたいだ。

いや、本当にごめんなさい。

あれから、わたしたち3人は宿の一室から、その1階にある食堂へと場所を移した。

ちよつと遅めの朝食を食べながら、ケイン王子とジェフリーさんから、こうなったことの経緯を説明してもらうのだ。

もちろん、わたしはお金を1銭も持ち合わせていないので、ここは2人の奢りで。

「まずは謝罪いたします。すみません、手荒な真似をしてしまいました」

そう言つて、ジェフリーさんは頭を下げた。

わたしたちは取り合えず、食堂の一番隅のテーブルにつき、やつて来た女の子に朝食セットを頼んだ。

その後、すぐにジェフリーさんが話を切り出したのだ。

「ジェフリーさん、頭を上げてください。そもそも、わたしを捕まえたのつてケイン王子ですよね」

わたしは目の前で つまらなそうに腰掛けている王子に目を向けた。

「ふん。お前が紛らわしい恰好をしていたのが悪い」

ええ？ 誰、が、悪いですつてえ？

「ケイン、悪いのは貴方ですよ。何も聞かずに気を失わせて連れてくるなんて……乱暴にも程があります」

本当、本当。

ケイン王子はジェフリーさんの爪の垢でも煎じて飲めばいいんだわ。

そして気持悪くなって、ゲエゲエ言つて吐いちゃえばいいのよ。

「すみません……ナサニエルさん。えっと、それからですね。昨日

も言ったと思いますが僕たちはとある任務で此方に潜伏して居ります。出来たらケインの呼び名の後に王子、という単語は控えて頂きたいのですが」

大変恐縮そうなジェフリーさんである。

「あ、わかりました。では、ケインさんとお呼びします」

わたしがそう言うのと、ケイン王子が言った。

「ケインでいい」

「いや、ここは敢えて、さん付けで」

「いって言うてるだろうが」

「嫌です」

「……っ、お前！」

忌々しそうにわたしを見る王子。

「ケインと呼べ！命令だ」

命令ですって、何と横暴な。

そもそも、わたしはケイン王子の部下でも何でもないんだから、

命令なんて聞く必要ないわ。

彼はライアン・フランシス様でもないのに。

それに王子にどれだけ無礼を働こうとも、今のわたしは架空の人物。

不敬罪なんて、怖くない。

処罰されそうになったら、ささーっと逃げちゃえばいいんだもの。女の子の恰好してれば、バレないでしょう？たぶん、だけれど。

「ケインさんがわたしのコトをお前じゃなくて、名前で読んで下さるなら考えてもいいですよ？」

言ったわたしに、王子は言った。

「お前、何様のつもりだ！」

何様って、それはもちろん奴隷様☆

ライアン・フランシス様の愛の奴隷です。

なんて言えないので、黙っていると、食堂の女の子が2人して、

テーブルに料理を運んできてくれた。

お皿に乗った白いご飯と目玉焼き。

それから何の肉で作ったかわからないハンバーグ（緑色をしている）と、湯気の出るコンソメスープ。

付け合わせにサラダなんかも付いたお得感たっぷりのメニューだと思う。

いつも家で食べる時は朝食にパンとサラダとかしか食べてなかったから。

一般的な食事なんて、わからない。

ただ朝からボリューム満点だなあ、って思うだけ。

わたしたちは気を取り直して、朝食に舌鼓をうちながら、本題に入った。

「実は僕たち、ある盗賊団を追ってまして……」

ジェフリーさんが言うには、巷を賑わす盗賊団「白い風」は義賊として非常に有名ならしい。

わたしは初めて聞いたんだけど、この地方以外では数々の武勇伝を残しているとか。

悪い貴族に攫われた娘さんを助けたり、あくどい商売をしている豪商をこらしめたり。

そのついでに、ほんの少し盗みを働くといった感じの盗賊団。まさに義賊。

平民の皆様の間では密かにその盗賊団「白い風」のことを「裏の聖騎士」なんて呼んでいたらしい。

と言うのも、その義賊の服装が聖騎士団のそれと全く同じだと言うんだから、驚きだ。

そこまで聞いて、おバカなわたしでも納得した。

つまり、ケイン王子は聖騎士団の恰好をしたわたしをあの路地で発見して、その「白い風」の一味だと勘違いしたのだ。

でも……と、わたしは思う。

「あの、本物の聖騎士団とその盗賊団の人と、どうやって区別をつけるんでしょう？」

同じ服装なら、見分けがつかない筈だ。

わたしがもし本当の聖騎士だったとしたら？

「実は……これはあまり公にはなっていないんですが、聖騎士の服というのは特殊な手法で作られているんですよ」

「特殊な手法？」

ジェフリーさんが親切に答えてくれる。

「はい。聖騎士の制服はそれだけで、聖器みたいな物なんです」

わあ、そんなこと、初耳だ。

『月刊 聖騎士☆通信』にも、そんな情報は載ってなかったもの。「ですから、どんなにそっくりに作っても、見る人が見れば本物か偽物か一目瞭然なんです」

そうかあ、だからわたしは捕まったのね。

ジェフリーさんの説明にわたしは頷く。

……でもそんなこと、わたしに話しちゃってもいいのかしら？

見た目と違って口の軽いジェフリーさんの今後が少し心配になる。だって、身元もハッキリしない部外者のわたしに、自分たちの身分や目的をこんなに簡単に明かしちゃうなんて。

そんな時、わたしの心の声が聞こえたのか、ジェフリーさんが申

し訳なさそうに、頭を下げた。

「ナサニエルさん。誠に勝手ながら、僕はあなたの荷物を検めさせて頂きました」

「はあ、そうですか」

わたしは付け合わせのサラダをムシヤムシヤと食べながらジェフリーさんに相槌をうつ。

ケイン王子はさっきから一言も喋らずに黙々と目の前のご飯を食べていた。

「そこで、こんなものを発見しまして……」

こんなもの？

ジェフリーさんが懷から取り出したのは一枚の伝票。

わたしがこの町の服屋「クレメリーの仕立て屋」さんで注文したライアン・フランス様の為の聖騎士の服の引き換え券だ。

そこにはきちんと注文者の名前の欄に「エルザ・クリンプトン」という名前が記されている。

「実はこの町の隣村であるミネリの領主は僕の家の子の遠い親せき筋にあたるんですよ。コンバート家と言うんですがご存じありませんか？」

コンバート家……聞いたことがあるような気がするけれど……。

ひょっとして、わたしの正体がバレちゃったのかしら。

と、言っても今は男の人の体だし、どう説明すればいいの？

それ以前にわたしって、ずっと男のまま？　と言うか、なんで男？　聖騎士になりたいってお願いしたから？　仮にそうだとしても、本当になれるのだろうか。

……まあ、努力はするけども……小さい頃からの夢だったんだし……。

「この伝票を見て、すぐにクリンプトン家に連絡をとりました」
ええ、連絡とっちゃったの？

「するとピンクの髪をした男の子ならば確かにウチの従者に居りましたと言う返答を頂きましたね」

え？ え？ えええ？

「確かあそこの娘さんも「奇跡の色」の持ち主でしたよね。あなたと同じ」

「はあ」

話の展開について行けずに気の抜けた返事をしてしまう。

「あの家の執事さんが言っておられました。その少年は聖騎士を目指して従者の仕事を辞めて王都に向かう途中だと」

バッスン。バッスンが話を合わせてくれたの？

彼ならわたしがどれくらい聖騎士になりたがっていたのか、知っている。

でも……どうして？ 少年ってコトにしてくれているの？

あ、わたしが髪を切って行ったからか……。クローゼットの男装セツトもないことだしね。

優秀なバッスンなら、それくらい察知するのもお手の物かしら。

「男性で、髪がピンク色の人は大変、貴重です」

「……え、そうなんですか？」

えっと、これも初耳です。

「髪の色が変わるのは常に聖力を放出し続けているからだと言われているんですが、この現象が男性に起こる事は数少ない症例なんですよ」

原因はわかりませんが、と ジェフリーさんは言った。

「聖騎士団としても力の強い団員は歓迎です。あなたみたいな方に入って頂けると非常に助かる。普通の警備なら大丈夫ですが、魔のモノを相手にするととなると、聖術が欠かせませんからね。ちょうど、

僕たち第3団には聖術師が欠けているんです」

聖術師が欠けている、ジェフリーさんの言葉にケイン王子があからさまな反応を見せたけれど、それは見なかったコトにした。

何か事情があるんだろうけど、今のわたしには全く関係ない。

それよりも、これってチャンス？ 聖騎士になれるチャンス？

でも、わたし……聖騎士になる特訓を途中で放棄しちゃったのよね。

聖術の基礎は勉強したけれど、それは必要な知識を頭に詰め込んだだけで、実際には聖術なんて一度も使ったことがない。

それは使う場面に遭遇したことがないってコトもあるんだけど……。

けれど、ここは嘘も方便ですよー！

と言うか、勝手にわたしの髪の色を見て、聖力が強いイコール聖術師って判断しちゃった人が悪いんだ。

つまりジェフリーさんが悪いってコトで。

わたしは黙るコトで事実を隠ぺいした。

聖騎士団に入ってしまったえば、こっちのものよ！

「ですが、残念な事に今年の聖騎士入団テストは既に終わっているんですよ。そこで相談なんです、ナサニエルさん。僕たちと一緒に今回の事件の解決に尽力して頂けないでしょうか？ その中であなたの力を判断させて頂いて、よければ入団。ダメでも来年の春には試験がありますから、事件解決の暁には王都までお送りしますよ」

おお、踏んだり蹴ったりじゃなくって、至れりつくせりなお話じゃない。

上手い話には裏がある、だなんて言ったのは誰？
例えば裏があったって、乗って見るのが女ってモノよねえ。

「その話、受けて立ちましょう！」

「いや、その……本当に立たなくてもいいんですけどね」

と、その場で立ち上がったわたしにジェフリーさんは言った。

「ところで、ジェフリーさんたちが関わっている事件って何なんですか？」

同じテーブルにいても、一言も発しないケイン王子は最早、空気と化していた。

ここはもう、わたしとジェフリーさんの世界。ケイン王子は蚊帳の外だ。

ちょっと寂しげな王子は食後のデザートにプリンを頼んだ。

ついでにわたしも同じものを頼む。後、水のおかわりを要求した。

「実は先月、王宮に手紙が届きまして」

「手紙？」

「はい。差出人は「白い風」で、ケインの別腹の妹君、テレサ・フエイス・トリエスタを誘拐した、と」

「ええええええ！！」

わたしは思わず叫んでいた。それはもう大声で。

少ないけれど食堂中の客の視線がコチラに集まる。

「あ、ナサニエルさん。お気持ちわかりますが、お静かにお願いします」

以外に冷静なジェフリーさんの言葉に、最初に忠告しろよ！とツツコミを入れたくなりました。

わたしは何とか気を取り直して、ジェフリーさんに質問をする。

「あの、お姫様って本当に誘拐されたんですか？」

何て言うか、それって一大事だね？

国を上げて大々的に捜索とかってしないのかしら。

「はあ、一応は姿が見えないんですけど……テレサ様には前科がありました……以前にも似たような事件を起こしているんです」

「はい？」

わたしは思わず聞き返してしまった。

「テレサ様は以前、今回と似たような脅迫文を自分の父親、つまり国王様に送りつけて、右往左往している姿を陰から楽しむという事をされたのですよ。その時は国一丸となって騎士を集めたりしましたから、今回もまた同じような事であつたら示しがつかない。それで国王様から早々に解決するように、と、たまたま国内勤務中だった第3聖騎士団にお鉢が回って来たんです」

「な、何て言うか……はた迷惑なお姫様なんですね。そのテレサ様って人」

わたしの率直な意見にジェフリーが苦笑を浮かべる。

「実はその他にもいくつか気になる点がありまして、それは追々お話していきましょう。今は早急に情報を集めなくてはなりませんので」

噂の義賊「白い風」 — 3 — (後書き)

誤字修正しました。

食後のデザートもたいらげた わたしたちは早速、町へと繰り出せるワケもなく……。

取り合えずは宿屋の部屋に戻ったんだけど。

「あ、お2人とも、ちょっと、こちらの服に着替えて下さいね」

部屋に戻ったわたしたちに、そう言ってジェフリーさんが差し出したのは、ジェフリーさんの今日の服装と同じく、ちょっと高級感漂う洋服。

「はいよ」

ケイン王子はそれを受け取って、部屋の隅で着替え始めた。

昨日と変わらないチンピラ風の恰好から、ちよつと両家の坊ちゃん風な恰好に。

上半身裸の所は見たけれど、下はまだだった。

だからケイン王子の着替えをつぶさに観察したかったけれど、それはジェフリーさんによって阻止されてしまう。

「さあ、ナサニエルさんも」

わたしは差し出された服を受け取りながらも、ケイン王子から視線は外さなかった。

あ、シャツを脱いだわ！——次はズボンの紐を外して……。

「おい、ナサニエル！」

着替える手を止めて、ケイン王子がこちらを見た。

「はい。なんでしょう？」

「お前、こっち見んな」

「はあ……それは、またどうして？」

ケイン王子はライアン・フランシス様では ないけれど、外見だけはイメージとピッタリだ。

だからケイン王子の言葉を勝手に脳内変換すれば、それはもう、

わたしの中でライアン・フランシス様と言っても過言ではない。

ケイン王子の見てくれだけを脳内にインプットすれば、夢の中で出会うライアン様に具体的な肉付けが出来るような気がする。

実際に絵とか挿絵だけでは想像できない部分を妄想して作り上げた、わたしの中のライアン・フランシス様。

ケイン王子と出会ったおかげで、そのイメージに声加わった。見た目より少し低めの声。

わたしが想像していたのとは少し違ったけれど、昨日は本気でケイン王子がライアン様だと思っていたから。

もう、わたしの中のライアン様の声はケイン王子の声に塗り替えられてしまった。

ライアン・フランシス様に会いたい。

架空の人物だと分ってはいたけれど、願いは叶った、叶えられたと思い込んでしまった。

ただのぬか喜びだったのに……。

けれど、舞い上がったこの気持ちには、呆気なく撃沈。地面にめり込んだ。

しかーし。前向きで健気なわたしは思ったの。

これってチャンスなんじゃないのって！

ケイン王子は見てくれだけはライアン・フランシス様そのものだ。まあ、現実の人間だからキラキラ加減とかが、若干足りない気がするけれど……。

わたしのライアン様素敵フィルターが取れてしまったケイン王子は、金髪で碧眼な男の人。

でも見た目はライアン様に近いんだから、努力すれば何とかなるハズ！

そう、性格だって変えられるハズ！

わたしの理想的なライアン・フランシス様に！！

ここに来て、わたしの目標が1つ増えた。

聖騎士になることと、ライアン・フランシス様のモデルと言われているケイン王子を、ちゃんとその名に相応しい人物に仕立て上げる事。

そうですね！神様！！

これがわたしに与えられた試練……いいえ、使命ね。

だって、指輪に願ったからって、ほいほーいと願いが叶っちゃオカシイもの。

夢を叶える材料だけは用意したから、後は自分で煮るなり、焼くなり、好きにしちゃってーってことなのね！

わたし、頑張ります！！

願いを叶えるために努力します！

そこで、まずは確実に聖騎士になっておかないといけない。

目下の目標は、今回のお姫様誘拐事件を解決することからだ。

「……お前の視線が怖い」

ケイン王子は呟くようにそう言った。

あら、王子。そんな弱気ではとてもライアン様のモデルとは呼べません。

もう少し、しっかりして下さらないと。

そんなことを思いながら、わたしは視線をケイン王子から外すと、自分も着替えにとりかかった。

と、その前に。

「あの……時間があつたらお風呂を借りたいのですけれど……」
そう言えば、昨日からお風呂に入っていない。

あんなにたくさん歩いて、結構 汗も掻いたワケだから、若干臭う気がする。

「ああ、時間はまだ少しありますから、少しだけならいいですよ」

「あ、ありがとうございます」

許可をくれたジェフリーさんに感謝の言葉を述べる。

「この部屋にはお風呂はありませんから、宿の方に言って下にある公衆浴場の場所を聞くといいでしょう。出来たら早めにお問い合わせしますね」

「はい！すみません」

「いえ。綺麗好きな方には好感が持てます。聖騎士団は男所帯ですからね。みんなお風呂が嫌い……ケイン様も一緒に入ってきたら如何ですか？昨日、入ってないですよね？」

うえ！？ケイン王子はお風呂が嫌いなのです！？

「俺はいい……まだ、そんなに汚れてないし。それよりも、ナサニエル！さっさと行ってこい。俺は待たされるのが嫌いなんだ！」

な、なんてこと。

ここは色々と言いたいことがあるけれど、一先ずは自分の汚れを落としたかった。

昨日は疲れてそのまま寝てしまったけれど、そんなこと1度だったしたことなかったんですからね！

わたしは綺麗好き。きっとライアン・フランス様もそうに違いない。

物語の中にはお風呂の記述なんて、なかったけれど……。

とりあえず、ジェフリーさんに言われたとおり、宿の人に案内し

でもらって公衆浴場と言うものに初めて入った。

けれど、何て言うか……色んな意味でカルチャーショックを受けたわ。

まず、男の人の裸。だって裸の男の人が結構いたの。

それはそうよね。ここって男風呂だもの。

わたしはうっかり女風呂に入ろうとして、見張りに立っているオバさんに止められた。

——いけない、わたしって男だった。

と、再認識出来たのはよかったのよ。今後のためにも。

でも心は乙女ですもの。やっぱり抵抗が……。

と、そんなことは言っていられないわね！臭い方がもつと耐えられない！

意気込んでお風呂に向かったものの、湯気が一杯で視界が遮られている。

……なーんだ。そんなに気にすることなかったのね。

そう思った瞬間に過った男の人の影は、もう、わたしに色んなものを捨てさせてくれた。

乙女の恥じらいとか、色々。

「あれ？こんな所に女が混じってらー。嬢ちゃん、入る場所間違えたのか？」

筋肉質のオジさんが自分のモノを隠そうともせず、入口付近で固まっていたわたしに声をかけてきた。

そうね。後から考えてみれば、自分は確かに邪魔だった。

だから、ちょっと、からかってやろうって思われたのかもしれない。

だって自分はどこからどう見ても下町の子供って言うには、少し

肌が白すぎただろうし、髪だって自慢じゃないけどサラサラだ。いくら湯気で周りが見えなくても、すぐ近くの人は見えるしね。見るからに軟弱そうで、自分たちよりも育ちの良さそうな人間に難癖をつけたくなっても、それはそれで仕方のないことだと思うのよ。

「お、こいつは別嬪さんだな。いっちょ相手して貰おうか。背中流すついでに俺たちのココも処理してくれよ」

オジさんの連れだろうか？

こちらの男の人は筋肉質ではないが、それなりの体格に、なんとも頭の悪そうな顔をしたって言ったら失礼よね。

とにかく、そんな男の人が自分のアソコを指さして言った。

わたしは思わず見てしまった男の人のモノから、さっと目を離す。

……なんなの？この人たちの言っている意味がわからない。

ひよつとすると、目上の人の背中を流すのがこの公衆浴場のマネーなのかしら？

そんなことを思いながら、ひょいっと視線を戻すと、異様に近い場所にオジさんたちが居た。

わたしは驚いて、そんな時に突然、腕を掴まれたものだから、思わず……何も着ていないオジさんたちの股間を蹴りあげてしまったのだ。

足に残る微妙な感触に、わたしは声にならない悲鳴を上げる。

小さい頃、メイドのジェシカに教わった。

知らない男の人に突然、腕を掴まれたりしたら、こうやって股間を蹴りあげるのよ。

淑女の嗜みだと言うその技が、今、こんな所で、出てしまうなんて……。

オジさんたちは「くう」とか「うう」とか言いながら、その場に疼くまった。

わたしは慌てて謝ろうとしたけれど、そんなコトより、急いで部屋に戻らなくてはジェフリーさんに迷惑をかけてしまうと思ったの。彼への印象は良くしておかないと、今後に差支えがあるものね。だから、オジさんたちには悪いけれど、とりあえず自分の用事をすませて、それから背中を流すなりなんなりしてあげよう。

わたしは急いで体を洗って、もちろん、オジさんたちの股間に触れた足はそれは念入りに。

別に汚いってわけじゃないけれど……なんとなく、気持ち的に。

……ああ、わたし。とうとう汚れてしまったのね。

ふと、そんな思いが胸をよぎった。

見ず知らずの男性の下の部分に、たとえ足でも触れてしまうだなんて。

できる事なら、初めてはライアン様のモノがよかった。

けれど、それは不可能だから、かなり妥協してケイン王子のモノでも文句は言わなかったのに。

……人生って上手くいかないわね。

それから、しばらくして先ほどの場所に戻ると、オジさんたちの姿が消えていた。

……あれ？どうしたのかしら。

首を傾げながら、着替えを済ませて男風呂を出ると、見張りのオバさんがわたしに謝って来た。

「すまないね。アタシがここに立って居ながら、問題を起こす奴がいるだなんて」

「はあ」

「男たちはもう、追いだしたからね。ああ、アンタに何もなくてよかったよ」

「はあ？」

わたしは思わず首を傾げてしまう。

オバさんが言う男たちって、誰のことだろう……。

「その爺さんにお礼を言っときな。ピンク頭の坊ちゃんが下品な奴らに絡まれてるって教えてくれたのはその老人だよ」

「……えっと」

オバさんの指さす所には木の椅子に腰をかけた背の低いお爺さんが居た。

なんだかよくわかんないけれど、とりあえず、お礼を言えばいいのよね？

「あ、あの。ありがとうございました」

「いやいや、気にしなさんな。ただの年よりの老婆心じゃて」

「はあ、そうですか」

なんだか不思議な雰囲気の人だ。

白髪頭に長いまゆ毛と髭も長くて、その表情がまったく見えない。僅かに見える皮膚は皺くちやで、目だって開いているのか閉じているのかわからないし。

着ている服は白い生地にと金と金のふちどりとか文様があって、聖騎士の服に似ていないこともない。

ローブみたいだったから、全然別物だけど。

「あの、失礼します」

わたしはとりあえず、もう1度だけ頭を下げて、部屋に戻った。

「おかえりなさい」

ジェフリーさんは結構早かったですね、なんて言いながら、これからの作戦を詳しく説明してくれた。

ケイン王子は部屋に入って来たわたしを一瞥すると、フイツと視線を横に逸らす。

……あれ？なんだかご機嫌斜め？

「これから僕たちは商人として、この町の領主のお宅へ向かいます」
「商人ですか？」

ジェフリーさんの言葉にあたしがそう質問を返すと、彼は頷いた。
「表向きは、ですけどね」

なんでもこの町の領主サマは、少年を売り買いしている、という噂があるそうだ。

その事が今回の誘拐騒ぎにどう繋がるかと言うと……。

「実は……「白い風」からの脅迫文には、続きがありました。誘拐された姫を返してほしくば、ケイン・フィード・トリエスタをこの町に連れて来いと」

「そ、それで？」

なんでケイン王子が指名されたんだろう。

なんだってこの田舎の町に？

「それが、文章はそれだけしか書かれていませんでしたので、とりあえずはこの町で聞き込みを。それで、ここの領主の噂を聞いたのです」

「……噂」

「はい。なんでもこの町の領主様の家には年端もいかなない少年たちが大勢 いるとか、いないとか」

そこから少年の売り買いをしているって噂が流れたらしい。

「後はその少年たちが、みんな聖騎士の制服を着ているらしいんです」

何だそれー！絶対、その子たちが盗賊団の「白い風」で、決じやない。

怪しい、怪しすぎるでしょう。

「なんだか怪しすぎて、逆に怖い気が……」

「ナサニエルさんのおっしゃる通り、僕たち第3団もそう思いまして、慎重に事を進めようと、現在団員を1名。領主邸に送りこんでいるのですが……」

「ひょっとして、連絡が取れないんですか？」

言葉を濁したジェフリーさんに、わたしは詰め寄った。

「おっしゃる通りで、実は昨日、定期連絡を寄こす予定だったのですが。約束の場所に彼が現れずに……そんな矢先にケインが聖騎士姿のあなたを捕まえて来て……」

わたしったら、随分と紛らわしい事をしちゃっていたのね……。

「す、すみません！わたし……そうとは知らずに随分とご迷惑を……」

「まったくだ」

後ろから茶々が入るけれど、わたしはそれを無視した。

どんな理由があろうとも、ケイン王子のしたことは罪もない一般市民の拉致監禁なんですからね。

いくらライアン・フランシス様に似ていようが、そんなことは許されない。

本当にライアン様だったなら、いくらでも許してあげたのに……。

ケイン王子が中途半端にライアン様に似ているのがいけない。

どうせなら、中身までそっくりだったらしいのになあ。

……まったく、残念な男だ。^{ひと}

「なんだか。俺、こいつにすっごく馬鹿にされてる気がするんだが」

気の所為か？なんてジェフリーさんに聞いているケイン王子。

「ヤダなー、気のせいですよ。気のせい」

わたしったらダメね。ケイン王子はわたしが聖騎士になる為の大切な駒。

それに、いつかはきつとライアン・フランシス様のモデルと呼ぶに相応しい人になるんだから。

ここはゴマをすつとかないと。

「ケイン王子は本当にライアン・フランシス様に似てらっしゃるなーって思ってただけですよ」

見た目だけは。見た目だけは、ね。

わたしの最上級の褒め言葉に気をよくしたケイン王子は、

「ふざけんなよ！俺はライアンでもフランシスでもねえ！ケイン、だ！」

あら、お気に召さなかったようだ。

「まったく贅沢なんだから」

「何が贅沢なのか聞かせて貰おうか？」

「まあ、まあ。ケイン。落ちついて下さい」

額に浮かんだ青筋をピクピクさせながら、今にもこちらに剣を向けてきそうなケイン王子をジェフリーさんが宥める。

「ジェフリー、止めてくれるな」

「いや、もう遊んでる暇はありません。屋敷に向かう時間です」

冷静に言われて、少し落ち着いたのか、肩で大きく息をつき、ケイン王子がわたしを見る。

「今度、ライアン・フランシスとか言う名前を口にしてみろ！容赦なく切ってやる」

「まあ、野蛮人！ライアン・フランシス様はそんなコトいいません！」

「お前は言ってる傍からっ」

「何度でも言ってるやりますよ！ライアン・フランシス様、ライアン・フランシス様、ライアン・フランシス様！ほら、3回は言ってるや

ました」

「この野郎！」

「ライアン・フランシス様、ライアン・フランシス様、ライアン・フランシス様、ライアン・フランシス様、ライアン・フランシス様！ほら、8回！まだ言いますよっ」

わたしはそこで息を切って、

「——ライアン・フランシス様、ライアン・フランシス様！さて、何回言ったでしょう？」

わたしの質問にケイン王子は不敵に笑って、

「10回だろう？」

「ブー！答えは11回です。続けていう前に1回、ライアン様の名前を言いましたー。ぷぷぷ、間違えてやんのー」

「なんだとー！そんなものは数に入らないだろう！」

「いいえ、わたしの答えが正しいです！」

「いや、俺だ！」

「わたしです！」

「俺！」

「わたし！」

言い合いを続けていると、背後から恐ろしい気配を感じた。

「あなた方は、この任務をなんだと思っているんですか？」

ジェ、ジェフリーさん……なんだか怖いです。

温和なイメージだったジェフリーさんの背中に何か　どす黒いものが……あれが噂に聞く魔のモノたちが潜むと言われている闇だろうか？

か、体が動かない……。

「ジェ、ジェフリー。気を静めて欲しい。俺が悪かった」

「わたしも悪かったです」

慌てて謝るケイン王子。わたしもそれに素早く便乗した。

「——大人しく、静かについて来ていただけますか？ケンカせずに」

「ああ」

「はい」

わたしとケイン王子は一緒に答える。

「事は一刻を争うかもしれないんですよ？」

「反省してる」

「反省しています」

ああ、どうかジェフリーさんの怒りが静まりますように。

「そんな事より、さっさと行った方がよくないか？説教なんか止めにしな」

ケイン王子、あなたってなんて空気の読めない。

ジェフリーさんの頬がヒクヒクってなっていますよ！ヒクヒクって。

「……まあ、ケインの言うとおりですね。役割は領主邸へ行く道すがらお話しします」

なんとか気を落ち着けたジェフリーさんがそう言って、わたしたちはようやく宿の外に出た。

「——いいですか？商家の息子が僕で、ケインはその従者。ナサニエルさんは商品の少年役です」

どこで調達したのか、そこそこ立派な馬車を用意したジェフリーさんが言った。

ケイン王子は従者らしく、馬車を操っている。

「あー。聞いてもいいですか？」

馬車の座席に乗り込んで、わたしはジェフリーさんに尋ねた。

「はい」

「なんでケインさんが従者で、ジェフリーさんが商家の坊ちゃんなんですか？」

普通は逆なんじゃ……。

「ああ、ケインが商家の息子だと、彼があれこれ説明しなくてはいけなくなるでしょう？そんな芸当が彼に出来ると思いますか？」

「いいえ、思いません」

わたしは即答した。

なるほど、そういうコトか。従者ならば主人に付き従って、ぼーっと立っておくだけでいいもんね。

本当の従者だったら、それだけではダメだろうけど。

「ナサニエルさん、すみません。あなたに危険な役をさせてしまつて……」

「いいえ、気にしないでください。そもそもわたしがあんな所で聖騎士の恰好なんてしてたのがいけなかったんです」

そう、あのまま 我慢して、何も考えずに家まで帰っていたらこんなことには ならなかった。

そうすれば、今頃……今頃は……。

聖女になる為に王都に行かされてたかも知れない。

……。
だったら今の状況の方が、かえってよかったんじゃないかしら？
このままこの事件が解決したら、わたしは晴れて憧れの聖騎士に

「——ルさん、ナサニエルさん！」

「あ、はい」

しまった。ジェフリーさんが何か話しかけていたみたいだ。

「あの、お伺いしてもよろしいですか？なぜ、あなたのお嬢様は聖騎士の制服にそっくりな物をお作りになったのか……あなたに対するプレゼントにはサイズが大きすぎる気がして」

ああ、そうだった。そのところは全く説明してなかったのよね。
えっと、お嬢様っていうのはエルザ・クリンプトンのことでしょう？

それって、つまりわたしのことだ。

……うーん。どうしたものか。

ある程度、真実を話しておいた方が無難よね。

「えっと、エルザお嬢様はわたしと同じくライアン・フランシス様に憧れていて」

「ああ、あなたの荷物の中にもありましたね『聖なる騎士物語』の本が」

わたしの荷物は今、ケイン王子とジェフリーさんが滞在している

宿屋に置いてある。

「はい。とっても大切にしているんです。お嬢様からの贈り物なんですよ。えっと、それで、制服の話なんですけどエルザお嬢様はあの聖騎士の服を使って人形を作ろうとしていたんです」

「——人形、ですか？」

わたしの言葉にジェフリーさんは首を傾げた。

「はい。ライアン・フランシス様の等身大の人形です」

「そ、それはまた凄いですね……」

「ええ、素材を吟味して、色々と準備をしていたんですが……」

そこで言葉を濁したわたしが続きを話し出すのを、ジェフリーさんは真剣な表情で待っている。

どうしよう、続きを考えなくっちゃ。

エルザは死んじゃった事にしようかな。だって本人はここに居るんだし。

お父様とお母様はわたしの事、周りになんて言うつもりなんだろう。

下手に死んだ何て言って、後で確認されたら厄介だし。ここは曖昧に……。

「お嬢様はその作業を続けられなくなって……うっ……」

と、ここで泣きを入れてみる。

俯いたわたしを見て、ジェフリーさんは悪いコト聞いちゃったなあーって顔をしてくれた。

よっし！ 掴みはOKね！

「——ですから、わたしにこの服を餞別に、と、お渡し頂いたので。あの日、仕立て屋で出来あがった服を頂いて、わたしはいてもたっても立ってもいられずに、出来るだけ人目のつかない路地である制服をちよっと試着していた所で、ケインさんに……」

殴られたかどうかなんて覚えてないけれど。

「そうだったんですね。申し訳ありません。立ち言ったことをお聞きして」

そう言うジェフリーさんに、わたしは言った。

「いいえ。わたしはエルザお嬢様の為にも聖騎士になろうって、誓ったんです。お嬢様の憧れと一緒にわたしも……。ですから、本物の聖騎士さんに、しかもジェフリーさんのような方に出会えて光栄です！」

ゴマすりなんかじゃ、ないんだからね。

これは本当にわたしが心から思ってることで……。
けしてゴマすりなんかじゃ。

その時、ちょうど馬車の揺れが止まった。

「どうやら、着いたようです。ナサニエルさん、くれぐれも脅えたような素振りでお願ひします」

「はい！」

「……大丈夫ですか？」

「ええ、演技力には自信があります。任せてください」

ジェフリーさんは不安を隠しきれない様子でわたしを見た。

大丈夫ですよ、ジェフリーさん。

わたしが居れば百人力。大船に乗ったつもりでいて下さい！

「さあ、行きましょう！」

「いや。張り切らないでください。あなたは売られに来たんですから」

「……あ、そうでした」

ジェフリーさんがため息をつく。

しょうがない。心底落ち込んだ顔をしよう。

そう、辛い事を思い出せばいいの。辛いこと。辛いこと。

ああ、わたしって本当にお父様とお母様の子供じゃないのかしら……。

「あ、その表情いいですね！それでいきましょう」

「……………」

わたしはジェフリーさんに促がされて、馬車を降りた。

「俺はちよっくら馬車を返してくるから、ジェフリー。後は頼んだぞ」

え、ケイン王子も一緒に行くんじゃないの！？

わたしがビククリしている間にケイン王子は通りを馬車と共に走り去ってしまった。

「えっと、あの？」

「さて、行きましょうか。ナサニエルさん」

「あ……はい」

ケイン王子の従者役って、ただの馬車を動かすだけの従者だったのか……。

つ、つかえない男なのかしら。ケイン王子って。

薄ら寒い風が辺りに吹いている気がする。

まあ、気を取り直してって、取り直しちゃいけないんだった。

暗い気持ちで、屋敷を見上げてみる。

流石に町中だけあって、それほど大きくはないけれど、この町では一番大きな家じゃないだろうか。

わたしが住んでいた屋敷は田舎だけあって、無駄に大きかったけれど……。

ジェフリーさんは門を潜ると、その家の扉についているノッカー

を叩いた。

それから、

「すみません。わたくし、メルベリン商会の者ですが」

いつも僕って言ってるジェフリーさんが、畏まった様子で わたくしって言っている。

というか、メルベリン商会ってなんだろう？

架空の名前なのかしら。それとも実在するの？

まあ、よくわからないけれど。

細かいところは気にしない。わたしは取りあえず、与えられた任務をこなすだけだ。

わたしはの使命は、この家に上手い事 潜り込んで、先に潜入した第3聖騎士団の団員さんにジェフリーさんから預かった手紙を渡せばいいんだよね。

これが上手くいきさえすれば、わたしも念願の聖騎士かあ。

ちょっと感慨深いものがあるわあ。

「さ、行きますよ」

わたしは嫌がってる風な演技の為に、ちょっとした間、立ち止った。

「――さあ」

もう1度、促がされると、しぶしぶ といった感じで動き出す。

……どう？これがわたしの演技力よ！

ふふんって得意げに胸でも反らしたい所だけれど、今は無理なので我慢しておく。

辛いこと、辛いこと、っと。

せっかくライアン・フランシス様に出会えたのに偽物だった……。

まあ、元が架空の人物で、存在すらしてないのは百も承知だけれど。

……乙女の密やかな夢をよくも踏みにじってくれたわね、ケイン王子め。

おっと、ケイン王子にはなんの罪もないんだったわ。

この事を考え出すと、辛い思いっていうか、苦い思いっていうか、

憎しみ？に近い気がするので止め止め。

やっぱり、お父様やお母様のことを考えるのが一番。

……はあ。今頃、どうしていらっしゃるかしら。

この屋敷の執事らしき人（恰好が家の執事のバツスンと同じだった）が、扉を開ける。

わたしはそれから、ジェフリーさんに促がされて屋敷に1歩足を踏み入れた。

そこには目の前に広がる広々とした玄関ホールと、その中央から延びる2階へと続く階段。

その壁際にはこの領主の奥方様だろうか？の大きな肖像画。

後は、部屋の中は隅々まで手入れの行き届いた感じ。

所どころにさり気なく美術品が飾ってある。

……家の大きさはクリンプトン家を買ったけれど、家の中身はこちらの方が断然いい。

やっぱり町の領主だけあるなって、そう思ってしまった。

けれど、ここの領主はなんだって少年なんかを集めているのかしら？

その事を口にしたら、ケイン王子は「そういう趣味なんだよ」って言っていたけど、そういう趣味って？

なんだか色々疑問だらけだ。

でも、今、そんなことを口には出来ないし。

とりあえずは、執事さんに通されたこの部屋で、ソファアに腰掛けるジェフリーさんの隣に立っておく事しか出来ない。

なんと、わたし、今。再び縛られています。

今度は縄じゃなくって、手錠と言うには装飾過多な右と左の輪っかが繋がった腕輪みたいなモノ。

それを嵌められて、両手を前で組んでいるような形になっている。

この国である程度の貴族に人を売るときには、商品である人の身なりもそれなりに整えるものらしい。

でも、本当に人の売り買いがされていたなんて。わたし、初めて知ったわ。

しかも、それが貴族の人だなんて。

……まさか、お父様も？

いや、でもあのお屋敷には少年なんて1人もいなかったし。

わたしが物心ついた頃から、あの家で仕える人間が代わったことなんてなかった。

新しい人が増えるということも。

ああ、はやく領主の人が現れてくれないかしら……。

そんな事を考えて早20分くらいは経過したんじゃないだろうか。扉の奥から先ほど、この部屋に案内してくれた執事さんがやって来て、こう言った。

「旦那様は今日はお会いにならないと。また後日、こちらへ来て頂けますか？」

執事さんの言葉にジェフリーさんは徐に口を開いた。

「こちら商売で来ていますのでね。これだけ待たされて、それは無いんじゃないですか？」

「誠に申し訳ありません……また、後日」

執事さんは深々と頭を下げて、先ほどと同じ言葉を繰り返す。

「——時間と日程は？」

「それは、また後ほど」

あれ、なんだかこれは少しおかしいわよね。

あの後、ジェフリーさんは結構粘ってたけど、それはまた後日、

それはまた後ほど。

とかしかな言われなくて、結局は領主邸を後にした。

手錠を隠し、ある程度の所まで来て、それを外してもらおう。

馬車はもういないので人目を気にしながら徒歩で宿に戻ると、ケイン王子が部屋で寛いでいた。

あたしたちは部屋の中に入ると、扉を閉めて備え付けのソファ―に腰を下ろす。

そうしてから、やっとジェフリーさんが口を開いた。

「――おかしいですね」

「なんだ。ナサニエルはやっぱり気に入って貰えなかったのか」

それが当然とばかりにケイン王子がわたしを見る。

お、おのれえ……失礼な！

「ナサニエルさんがどうか言う問題ではありません。もしかしたら、僕たちが送りこんでいた者の正体がバレたのかもしれない」

「ジェフリー、そうなる……」

ケイン王子の表情が急に引きしまる。

まあ、その表情はちよつと素敵だわ。

……なんて、今はそれどころじゃなさそう。

「少し厄介なことになりそうですね」

「ああ」

呟いたジェフリーさんに頷くケイン王子。

一体、何が厄介なことなのか。わたしにはサッパリわかりません。

「今夜辺り潜り込んでみるか？」

「本来ならそれは避けたいのですが、已むを得ないですね」

そう言って頷き合うケイン王子とジェフリーさん。

なんだか2人を見ていると、少し羨ましい。

わたしも出来る事ならライアン・フランシス様と素敵なタッグを組みたいわ。

「ジェフリー、こいつはどうする？」

ケイン王子はわたしを親指で指す。

こいつ、とか、お前、とか。わたしには自分で付けた立派な名前があるのに。

「どうでしょう？ここへ置いていきますか？何の訓練も受けていない者は足手まといになるかと」

え、え、え？

もしわたしがこのままここに置いて行かれたとしたら、事件解決の手助けをしたことにならないんじゃない？

そうしたら、やったね！聖騎士になれちゃった。

という わたしの夢が少し遠のく気がする。

「あの……わたし、ついていきます！足手まといにはなりません」

何の根拠があって、というか何の根拠もないけれど。

……絶対、絶対！何が何でもついて行ってみせる！！

わたしの想いが通じたのか、ジェフリーさんが渋々といった感じで頷いた。

「まあ、いいでしょう。これもいい経験でしょうから」

それから夜遅くなるまで、しばらく宿の部屋で時間を潰した。

町の領主邸 — 2 —

夜の町は昼のそれとは少し違って見える。

わたしたちは宿の窓から、人々が寝静まった暗闇の中に降り立つこととなった。

泊まっているわたしたちの部屋は2階にあるから大した高さじゃないけれど、それでも飛び降りるとなると勇気がいる。

ケイン王子が聖術を使って、落下速度を緩和してくれるって言うけれど……。

今から数分前——。

「ここはナサニエルさんをお願いしましょう」

ジェフリーさんがそう言って、わたしは使えるかどうかもわからない聖術を使わされそうになった。

けど、ケイン王子が、

「簡単な術だし、俺がやるよ！俺にやらせてくれ」

その時、妙に積極的だった王子のおかげで、わたしは一先ずピンチを切り抜けたのだ。

ケイン王子、見なおしましたよ！

聖騎士は通常、聖器の扱いが得意な人、聖術が得意な人が2人1組になって、対をつくる。

ペアと呼ばれるものなんだけれど、確かケイン王子は聖器の扱いも聖術も両方とも得意だったハズだ。

これはもちろん『月刊 聖騎士☆通信』に載っていた情報。

そこには、現在ペアを組むことなく、実戦で戦っている人はケイン王子くらいだとも書いてあった。

その事からも、ケイン王子がライアン・フランシス様のモデルじゃないかって噂されているんだけど。

ライアン様もペアを組まずに、お1人で戦っておられるから……。

けれど『聖なる騎士物語』が発行されたのが、今から5年前。

ケイン王子が聖騎士団に入団したのが、今から約2年程 前だから、モデルって言うのにはちょっと無理があるのよね。

そう言えば、ジェフリーさんのペアの人って、どこに居るんだろう？

実はジェフリーさん。意外や意外、聖術が苦手らしい。だからわたしに聖術を使わせようとしたんだ。

見た目から言って、ちょっとインテリっぽい雰囲気きふきのジェフリーさんは見るからに文系。

だから、てっきり聖術が得意なんだとばかり思っていた。

人って見かけによらないものだ。

ひょっとして、領主邸に潜入したのってジェフリーさんのペアの人なんだろうか。

わたしがあれこれ考えていると、ケイン王子が早速、聖なる言葉を紡ぎ始めた。

『——重さのない鎖、大地に根を下ろす我らの枷を一時の間、緩めたまえ、進む時間を遅らせたたまえ』

聖言と呼ばれるそれは、神であるファーマリアムに捧げる祈り。

『ファーマリアム神の御名において、我は祈りを捧げる者、祝福はこの身をもって人々に与えられん』

聖力を持った者が、その力を込めて祈りを捧げると、その返礼として、祝福が与えられる。

それが聖術の原理とされている。

ケイン王子が唱えるこの術は、確か、スローの術だったと思う。補助術の1つだ。

効果は術をかけられた人の、動作と時間が一時的に穏やかになる、というもの。

反対にクイックファーストという術は、かけられた人の動作や時間が一時的にはやくなるのだと言う。

全部、本で得た知識だから、実際に体験したことはないのだけだ。

『——スロー』

ケイン王子がそう言って、ジェフリーさんに触れた。

聖術は術をかける対象に直接触れることで初めて発動するので、遠隔から、ということができない。

「では、お先に失礼しますね」

そう言ったジェフリーさんの言葉は酷くゆっくりとしているように聞こえた。

本人は普通に話しているつもりでも、起きる現象は遅い。

ゆっくりと窓際に立ち、ゆっくりと窓枠に足をかける。

それから、フワリといった感じに、まるで重さがないみたいに、地面に着地した。

『——スロー』

いつの間に次の術を唱え終わっていたのか、ケイン王子が何の前触れもなく、わたしの肩に触れた。

すると、妙に体が軽くなった気がして、これなら軽く空でも飛べそうな気分なのに、動きが遅い。

自分では普通に動いているつもりなのに……。

わたしは先ほどのジェフリーさんのマネをして、宿の窓から思い切って飛び降りる。

すると、景色はゆっくりと、わたしの目の前を通り過ぎた。

落ちてるだけなのに、まるで空を飛べちゃった気分。

凄い！なんだか人生観が変わっちゃいそうだ。

聖術って結構、便利だったんだなあ。本を読むだけじゃなくて、実践してみればよかった。

そうすれば屋敷から抜け出す時にもあまり苦勞しなくて済んだのに。

わたしの家には外へと続く秘密の抜け道があって、そこには所々に罠が仕掛けてあった。

何のために作られたのかは、わからないけれど。

わたしはそこを屋敷の探検中に発見したのだ。

今思えば、無謀な行動だったと思う。

けれど、幼かったわたしは何の恐れもなくその道を突き進んだ。

……運がよかったんだと思う。

仕掛けられていた罠は大人用だった為か、当時のわたしにはあまり効果を示さなかった。

だって、飛び出た矢は頭の上を飛んでいったし、落とし穴を開くボタンはわたしの体重くらいでは起動しなかった。

段々、大人に近づくにつれ、その道を通るのが困難になっていったけれど。

小さな頃から使いなれた道。

罨の場所もタイミングも知っていたから、避けることは可能だった。

だけど、スローの術を使っていたら、今みたいに窓からヒラリと外に出られたのよね。

聖術を使っているのは男性だけ、だなんて一体誰が決めたのかしら？

女性の聖術師もないことはないけれど、世間からは白い目で見られるらしい。

だから聖術を習いたかったわたしに、お父様は反対されたんだと、随分、後になってから知った。

その頃には既に、自分が聖騎士になることは不可能だと気づいていたから、なんとすることもなかったけれど。

そんなことをしみじみと思い出していたら、いつの間にかケイン王子も、道へと下りて来ていた。

取りあえずは街灯の少ない裏道を通って、なんとかこの町の領主の家へと向かう。

途中まではいいけれど、貴族や商家なんかの立派な屋敷のある通りには裏道なんてないから、家の屋根を伝うという荒業を使うらしい。

それにはやっぱりスローの術が欠かせないのだけれど、術の効果時間がそれほど長くないので、スローの術の籠められた首飾りを渡された。

「こんな便利な物があるなら、最初から使わせてくださいよ」

窓から降りるのもこの首飾りがあれば、わざわざケイン王子が聖言を唱えるまでもなかったのではないかしら。

「この首飾りにも使用時間があるのですよ。1回発動させると30分しか持ちません。スローの術は僕たちの行動する時間も遅らせるので、実質は15分といったところでしょう。15分で宿から領主邸までは辿り着けませんし。この首飾りは一度使うと、次の起動までには最低でも5時間くらいは使えなくなるんです」

わたしの苦情にジェフリーさんが苦笑いで答えた。

「便利なようで、便利じゃない代物なんですネ」

首飾りの感想をわたしがそう述べていると、ケイン王子が言う。

「ぐだぐだ言っていないで、さっさと行くぞ！」

どうも、領主邸への潜入が決まってからケイン王子のテンションが違う気がする。

見た目はライアン様に似ているだけあって、美しいのに、どうして中身がこんなにも荒っぽいのか。

……ご両親はどういった教育方針をされていたのかしら？

仮にも一国の王子様なのだから、それなりの礼儀作法や言葉遣いを勉強されたのではないのだろうか。

一体、ケイン王子の身に何が？

そう言えば、ジェフリーさんが何かヒントになるようなことを言っていたような……。

「いいですか？向こうに着いたら、二手に別れましょう。僕は1人で大丈夫ですから、ケインはナサニエルさんと行動してください」

ジェフリーさんの言葉に、あたしたちは同時に答える。

「どうして、コイツなんかと！」

「任せてくださいっ！ジェフリーさん！！」

これは早速、ケイン王子を更生するチャンス到来ね！
まずは聖騎士になってからと思っていたけれど、これ以上、ライアン様と似たような顔で暴言を吐かれたら堪らないもの。

「ケインさん、これが初めての共同作業ですね」

そう言ってわたしがニッコリ微笑んだのに、ケイン王子は顔を顰めた。

何なの。その反応、失礼しちゃう。

わたしの笑顔はそれ1つで、執事のバツスを騙くらかし、お父様の財布の紐を緩めてきたのよ。

お母様やメイドのジェシカ。子守のターニャには効かなかったけれど。

大抵は笑っていれば、それで誤魔化されてくれたんですからねっ！

「おや。初めて、ですか？……2人は確か昨日トイレで」

「お前ら、俺をおちよくってるのか？」
ジェフリーさんの言葉にケイン王子のこめかみには青筋が浮かんでいた。

「……そう言えば、今朝も何やら」

ケイン王子を無視して、ジェフリーさんが続ける。

「もう、いい」

王子は溜息混じりに顔を背けた。

……あ、なんだか。ちよっと可哀そう。

ケイン王子って、実はいじめられっ子なのね。

なるほど、だから根性がねじ曲がって、こんな性格に。おまけに口まで悪くなって。

「ケインさん。わたしはケインさんの味方ですよ」

だから、わたしの言う事をちゃんと聞いて、立派なライアン様のモデルを目指しましょうね！

そうすれば、自ずといじめられなくなりますから。

「……お前は、また何を言っているんだ？」

訳がわからないといった感じに、ケイン王子は肩をすくめた。
もう、また……。

「お前じゃなくて、ナサニエルです」
わたしが頬を含ませると同時にジェフリーさんが言った。

「では、遊びはこの辺にして、今から真剣に行きますよ。首飾りを起動するには、この飾りの付いたトップの部分を握って、聖力を注ぎます。そして、スローと唱えるだけですから」

ジェフリーさんに言われた通り、渡された首飾りの透明な黄色い球が付いた部分を片手で握りしめる。

聖力を注ぐのなんて、やったことがないから、どうすればいいのかしら。

チラリと2人を覗き見ると、首飾りを手に静かに目を閉じている。
……うーん、よくわからないけれど、取りあえず目を閉じればいいのね。

『スロー』

『……スロー』

横で2人の声がする。

わたしもそれに倣って、口を開いた。

『——スロー』

そう言うのと、体が急に軽くなる。
やった！成功したみたい。

これって、わたしが初めて使った聖術ってことになるのかしら？
でも聖言を唱えたわけじゃないから、初めての聖力使用体験と言ったところね。

そもそも、わたしの聖力は髪に表われるくらいに強いみたいだから、使わなきゃ勿体ないわよね。

「おい、ナサニエル！ぼさつとしてないで、さっさと行くぞ！」

お互いにスローの術がかかっているからなのか、ケイン王子の言葉は普通の速さに聞こえた。

「はい！」

「ナサニエルさん、お静かに」

思わず元氣よく答えて、ジェフリーさんに窘められる。

「……はあい」

今度は小さく、掠れるような声で答えた。

わたしたちは脇道から、目の前の家の屋根に向かってジャンプする。

高さに少々バラつきがあったものの、なんとか3人とも無事、屋根に上がることが出来た。

それぞれに顔を見合わせて頷く。

それから、闇色の服を纏ったわたしたちは、静かに屋根の上を渡って行った。

……聖騎士って、色々なことをするのね。

魔のモノ達を退治するだけじゃないと言うのは知っていたけれど。

本で得た知識よりも、随分と地味な気がする。

まあ、世の中ってそういうものよね。

わたしは今夜、また1つ大人になった。

酸いも甘いも噛み分けた大人に。

昼間に来た領主邸。

その門を飛び越えた所で、首飾りに籠められていたスローの術はその効力を失った。

わたしたちはそこで二手に分かれる。

ジェフリーさんは左手から、わたしとケイン王子は右手から屋敷に侵入することになった。

「——ケインさん。こういう事、いつもやっているんですか？」

懐から取り出した細い針金で、閉まっている扉の鍵を開けようとしているケイン王子に声をかける。

もちろん小さな声で。

聞こえないといけないから、邪魔にならない程度に近づいて話している。

「いつもじゃないけどな」

ケイン王子はそう答えて、立ち上がった。

「開いたぞ」

もう？ 実は凄いいじゃないですか、ケイン王子。

わたしはてっきりダメダメ王子かと思っていましたよ。

けれど、そのスキルはライアン・フランシス様のモデルには必要ないものかと。

本当に残念だけれど。

「……気のせいかな、お前。少し前から俺のことを憐れむような視線で見えないか」

「気のせいですよ」

憐れむような視線ではなく、慈しむといった感じかしら。

子供を持ったことはないけれど、きっとこれが母性愛。

憎さ余って可愛さ100倍？ 出来が悪い子ほど可愛い？ ちょうど、

そんな気分なの。

「昼間に俺の着替えを見ていた視線よりは何十倍かマシだが……お前、俺のこと見るなよ」

「そんなの無理です」

「簡単なことだろ？俺の前から消えてくれればいい。視界に入るな。さつきから妙に近いんだよ、お前」

「出来ません。ジェフリーさんにケインさんのことを頼まりましたから」

「お前な……頼まれたのは俺だ。お前じゃない」

「でも、ジェフリーさんは「いい経験だから」と言って、わたしを連れてきてくれたんですよ」

わたしはこの事件を早く解決して、聖騎士にならなくちゃいけない。

「ジェフリーの言った「いい経験」って言うのは、俺にとってのこと。誰もお前のこと信用しちやいねえんだよ」

「何を言ってるんですか、ケインさん。いくら散々いじめられて、根性が捻くれちゃったとしても、自分の部下を信用してあげなくちゃダメですよ」

「お前は俺の部下じゃないだろう？」

「はい？そんなの当たり前ですよ。わたしはまだ聖騎士ではありません」

もちろん、もうすぐなる予定ですけど。

その暁にはもちろんケイン王子のペアを狙っていますとも。

「……何か、話がかみ合っていないな」

「そんなことはありません。ケインさんは人を信じるのが難しいのかもしれませんが、ジェフリーさんの言ったことぐらい、ちゃんと信じてあげて下さい」

ジェフリーさんはわたしの為に足手まといになるかもしれないことを承知で、現場に連れてきてくれたのだ。

それも全て、わたしを聖騎士団に迎え入れようとしている為ではないかしら？

そのジェフリーさんの心意気に何としても報いなければ。

「さあ、ケインさん。こんなところで話している暇なんてありませんよ。早くしないと、見回りしている誰かに見つかって……」

「もう、見つかったままだったみたいだな」

ケイン王子はそう言って、わたしの後ろに佇む3人の少年達に向かって、両手を挙げた。

降参のポーズね。何もしませんよっていう意思表示。

「い、いつの間に」

まったく気配を感じなかったわ。

というか、足音すらも聞こえなかったような。

「——あいつ等は最初っからここにいたよ」

ケイン王子が小さな声でわたしに呟いた。

「お前の仲間じゃないのか？」

仲間、仲間って。なんで、この子達が……。

と、そこでようやく少年たちの格好に目が届く。

「こ、この子達って!？」

—— 盗賊団「白い風」!？

わたしたちはあの後、3人組の男の子に連れられて、屋敷の地下(?)にある窓のない部屋へと押し込められた。

出入り口はたぶん、わたしたちがこの部屋に入れられる時に通った扉の1つだけ。

それから通気口だろうか、どこから微かに風の音が聞こえる。

……これなら、窒息しなくて済むわね。

窓を作することを忘れるなんて、この部屋を作った人の設計ミスかしら。

それとも、この部屋は物置？

部屋の広さはわからない。

だってこの部屋、明かりが一切ないんだもの。真っ暗なの。

一緒に入ったはずのケイン王子がどこにいるのかさえ、わからない。

「……ケインさん」

わたしは恐る恐ると、その名前を口にしました。

怖いじゃない。怖いよ。

突然、暗闇から訳の分からない物体が飛び出してきたら、どうしましょう。

もしかしたら、ここは魔獣の飼育部屋かもしれないわ。

トリエスタ国内ではあり得ないことだけれど、ここから遙か北の大地では魔獣を愛玩動物として飼っている部族がいると聞いたことがある。

これも本で読んだのだけど。

家のペットは魔獣で、餌は人間なんです。

なんて、この国内では無理よね。

でも、ちょっとまって。

確か、ここの領主は少年達をお金で買っているのよ。

もしかすると、その子達は魔獣の餌にされたのかもしれない。

先ほど出会った少年たちは自分たちが餌にされないように、わたしたちを捕まえて、ここに放りこんだんだわ。
きつと、そうよ！そうに違いない。

……こ、これは大変だわ。

ケイン王子が抵抗もなしに少年たちに捕まっちゃうものだから、何か考えがあるのかと思ったけれど。

ダメね。わたしがケイン王子を守らなくちゃいけなかったのに。

「ケインさん、どこですか！？ここには魔獣がいますから、気をつけて下さい！」

わたしは暗闇に向かって声を張り上げた。

すると部屋の奥で何かが動いた気がする。

……魔獣！？

闇に蠢く何かが息をひそめて、こちらを窺っている。

……ああ、やっぱり。

しょうがないわね。ここは注意をわたしに引き付けて、その隙にケイン王子に逃げてもらおう。

ライアン・フランシス様を守るために自らの身を犠牲にした、物語の中のナサニエル・レインのように。

なんて、萌えるシチュエーションなの！？

「ケイン！わたしのことには構わず、お逃げくださいっ！」
物語の冒頭で登場するこのセリフ。1度は使ってみたかったの。
呼びかける相手がライアン・フランシス様ではなく、ケイン王子

なのがほんの少し残念だけれど。

この際、細かいことは一切、気にしないでおう。

それよりも、次のセリフが一番の見せ所なのよっ！

「なに勝手に呼び捨てにしてるんだ」

——ごすっ。

わたしが取って置きセリフを口にする前に、何かが頭の上に落ちてきた。

……い、痛いわ。

「くう。ま、魔獣め……」

わたしは目尻に浮かんだ涙を拭いながら、暗闇に向かって目を凝らす。

……うーん、何も見えない。

しょうがないから、もう1度。気を取り直して言うしかないよね。

「ケイン！わたしのことは構わず、お逃げくださいっ！わたしたちはここであなたを失うわけにはいかないのです！あなたは一国の王子。平民出のわたしなど、本来ならあなたと口を訊くことすら叶わなかった。でも、ケインはわたしのことを……友人だと。友と呼んでくれた」

「いつ、誰が、お前と友人になったと？」

「わたしには勿体ないお言葉です！でも、それでも……わたしもあなたのことを友人だと思いたい。ですから、ここは友の頼みを聞き、皆と共に後退してください！」

「……だから」

「なに、心配は要りません！わたしはこいつを倒して、直ぐにでもあなたの方の後を追うつもりですから」

「皆って、あなた方って誰だよ」

——ごすっ。

「い、痛いすっ！」

頭に振ってきた石のようなそれに、思わず声を上げてしまう。

……ああ、あと少しだけセリフが残っていたのに。

後は笑顔で「……行って下さい」と言うだけだったのに。

「今のは『聖なる騎士物語』の冒頭に出てくるナサニエル・レインの言葉ですよ。名前のところが、ライアンからケインに換わってますけど」

どこからともなく聞こえてきた声に、わたしは首をかしげる。

「あれ？今の声はジェフリーさんですか？」

「はい」

すると魔獣が居ると思った辺りから、衣擦れの音とジェフリーさんの声が聞こえた。

「……ジェフリーさん？」

魔獣は？もしかして、ジェフリーさん。食べられたりしてませんよね。

「この部屋には魔獣なんていませんよ」

よいしょっと立ち上がるような声がして、こちらへと近づく足音がする。

「ジェフリー。こいつ、もうここに置いて行こうぜ。こんな奴に盗

賊なんて務まるわけねえよ」

夜目も利かないみたいだし、とケイン王子。

「ですが……それならば何故、偽名を使うのかが分かりません。居もしないエルザ・クリンプトンなる架空の令嬢の名を使ってまで小細工した理由は？」

「そんなの知らねえよ。直接こいつに聞けばいいだろ？ なあ、ナサニエル。お前は何を隠してる？」

えっと、わたしには何のことやらサッパリ……。

密室で、しかも真っ暗闇の部屋の中。

魔獣の飼育部屋かと思ったら、そこには先ほど別れた筈のジェフリーさんが居て。

ケイン王子はわたしのことを置いて行こうと言うし、ジェフリーさんはエルザ・クリンプトンなんて存在しないと言う。

おまけにわたしが何かを隠していると、疑われているみたい。

「あの、ジェフリーさん……ジェフリーさんはクリンプトン家の遠い親戚の方、なんですよね？」

エルザが存在しないなんてこと、あるわけないじゃない。

だって、わたしは現にあそこで元気にスクスクと育ったんだもの。それにジェフリーさんだって、言っていたわ。

クリンプトン家には「奇跡の色」を持った娘さんが居るって。

「確かにその通りですが。今までのことは、それを踏まえた上での作り話だったのですか？」

ジェフリーさんが言うのと同時に、首筋に何か冷たい物が当たった。

細くて、固い何か。

それがわたしの皮膚を切り裂き、その部分がじんじんと熱く疼いている。

「……ジェ、ジェフリーさん」

わたしが掠れた声でその名前を呼ぶと、首筋から胸元にかけて一筋の何かが伝った。

——血。たぶん、きっと血だわ。

わたし、殺されちゃうのかしら。

せっかく聖騎士になれると思ったのに。

作り話なんてしていない。

そう言いたいけれど、所々に嘘が交じっている。

わたしの本名はエルザ・クリンプトン。性別だって違うわ。

でも、そんな話をしたところで、果たして信用して貰えるかしら。だけど、なんとかして誤解を解かないと。わたしはまだ死にたくないもの。

そう思うけれど、体が言う事を聞いてくれない。声が出ない。

「クリンプトン家に問い合わせた時に、はっきりと言われましたよ。エルザという人物はいないとね。エルザ、ではなくエルザムの間違いじゃないかと。エルザは女性名、エルザムは男性名。もっとよく調査するべきでしたね」

どういことだろう。

ジェフリーさんの言っていることは本当のことなの？

わたしはエルザよね。確かにエルザ・クリンプトンだったわ。

今はナサニエル・レインなんて名乗っているけれど……そんなの、嘘よ。

わたしはエルザ・クリンプトンとして16年間、ちゃんと生きてきたんだから。昨日までは。

「そもそも、そのエルザムと言う名のクリンプトン家の子息は、つい最近、生まれたばかり。そんな赤ん坊がサイズの大きな服なんて注文する訳ありませんからね」

エルザムと言うのは、弟の名前だ。

お父様がせっかくの姉弟なんだから、お揃いの名前にしよう、と言って付けた名前。

「ジェ、ジェフリーさん」

聞いてください、そう言おうとしたけれど、口を開いた瞬間に、剣がさらに皮膚に食い込んだ。

……痛い。

「あなたは何の目的があって、僕達に近づいたのですか？」

ジェフリーさんが静かに言う。

ここ1日と少しの付き合いしかないけれど、ジェフリーさんがこんな冷たい声を出すだなんて……なんだか、ちよっとショックだ。優しくて、話のわかるお兄さんだとばかり思っていたから、余計に。

「一時期、ある噂が流れたんですよ。クリンプトン家が「奇跡の色」の持ち主を隠しているっていう根も葉もない噂が、しかも少女を。それに僕の父が関わっているとね。お蔭で大変な思いをしました」

何の話かしら。

「奇跡の色」の持ち主を隠していたら、何かいけないことでもあるの？

そもそも、わたし、隠されてなんかいなかったわ。

だって、普通に屋敷を抜け出して、村の子達と遊んでいたし。それに町にだって買い物に来ていた。

それはまあ、この年になっても公の場所やなんかに出してもらった事はなかったけれど、お父様って過保護だったから、仕方がなかったのよ。

わたしはいつも大人しく屋敷にいただけ。

と、言っても、わたしは妄想するのに忙しくて、物事を深く考える余裕なんてなかった。

……ひょっとして、わたしって隠されていたの？

そんな、まさか、そんなことって、あるわけないわよねえ。

「前にも言いましたが、ケインが最初にあなたを連れてきた時に、荷物を調べさせていただきました。その中にクリンプトン家の名前が……噂もようやく下火になったというのに、これですよ。わたしがどんな気持ちだったと思いますか？」

ジェフリーさん、よほど嫌な思いをされたのね。

暗くてその表情は見えないけれど、声が少し震えていらっしやるもの。

けれど、だからと言って、わたしに剣を向けるのは間違っていると思うのよ。

「初め、あなたを見た時、女だと思いました。けれど、あなたは男だった。それならば関係ないかも知れない。そう思ったんですがね」

「ジェフリー、気持ちはわかるがその辺でやめとけよ……って、けしかけた俺が言うのも何だが」

わたしのすぐ傍からケイン王子の声が聞こえた。

その後、ジェフリーさんはわたしの首に当てていた剣を引いてくれた。

シャキンと剣を鞘におさめた音がする。

ああ、よかった。

取りあえずは殺されずにすんだみたい。

「あの、すみません。わたし……上手く説明は出来ないんですが、全て本当のことをお話します」

わたしはそれから、自分がエルザ・クリンプトンだという事。

昨日までの性別は女だった事。

わたしが聖騎士の服を作ったのは本当にライアン・フランシス様の等身大人形を作るつもりだった事と、何でも願いが叶う指輪に「聖騎士になりたい」とお願いしたら、いつの間にか男の人の体になっていた事を話した。

「お前はこの期に及んで、そんな微妙な話を信じろって言うのか？
取りあえず謝れ。真剣に聞いた俺達が馬鹿だった」

ケイン王子はわたしが話し終わるなり、ため息交じりにそう言った。

「ほ、本当の事ですょ！わたし、嘘なんか言ってます」

正直に話したのに、信じてもらえていない。

「ナサニエルさん、何度も聞くようですが、貴方の本名は？」
暗闇の中でジェフリーさんの声が響く。

「だから、エルザです。エルザ・クリンプトン」

「それだと、女性の名前になってしまいますよ？ちゃんと答えて下さい。また切られたいんですか？」

ひいいい。

チャキつと言う音がする。剣でまた、わたしを切りつけようとしているのね。

周りが暗いから、まったく見えないけれど、怖いわ、とっても怖いよ。

見えないことで余計に怖いかもしれない。助けて、お父様にお母様。

「ナサニエルです。もう、本名はナサニエル・レインでいいです」
これなら納得してもらえるだろうか。

「では、先ほどの話も作り話だと？」

「つ、作り話なんかじゃ……」

ないです、と主張したいけれど、どう考えても信じてくれそうにない。

ジェフリーさんみたいな穏やかそうな人が怒ると本当に怖いよね。
「言っときますけど、僕は怒っていませんよ」

……わたし、うっかり口に出しちゃったのかしら。

「そんなに脅えた顔をされると、傷つきます。僕は何も全て嘘だと言っているわけでは、ないんですから」

なんだ、表情を読まれたのか。

「クリンプトン家の方が従者である貴方の存在を証明してくれています。名前は明かしてはくれませんでした。が「奇跡の色」を持った少年なんて、その辺にごろごろ居るわけありませんから貴方のことで間違いないでしょう。ですが何故、貴方は居もしない令嬢の名を騙ったのですか？」

ジェフリーさんの言葉を信じるならば、クリンプトン家ではエルザと言う娘はいないことになっているらしい。

その代わりに「奇跡の色」を持つ従者の少年が存在している。

なんで、どうして？

さっぱりわけがわからないわ。

「でも、ジェフリーさん。昨日、言っていましたよね。クリンプトン家には「奇跡の色」を持ったお嬢さんが居るって」

「ちょっとカマをかけてみただけですよ。本当は「そんな人、存在しません」とか言って欲しかったんですけど。貴方はそれを否定しなかった」

「あ、あの時はちょっと間違えちゃって。クリンプトン家にお嬢様なんて、いませんよ。やだなあ」

なんて今頃、言っても遅いかしら。

もう、わたしにどうしろと言うのよ。

真っ暗闇の中、冷たい床に腰を下ろして、多分近くに居る筈のケ

イン王子とジェフリーさんに向かって話をしている。

……なんだか、もう疲れちゃった。

「それよりも、ちょっと聞いていいですか？」

わたしは言った。

「何だ？」

「どうぞ」

左右から、ケイン王子とジェフリーさんの声が聞こえる。

「いつまでここに居たらいいんでしょう？わたし達、当初の目的を忘れていませんか？」

今までの会話はなかったことに……なんて出来るわけないけれど。そろそろ、ここを出た方がいいと思うの。

幸い、誰も縛られたりしていない。

ただこの部屋に閉じ込められているだけなんだから。

早くこの屋敷に潜入している人の無事を確認しないと、日が昇っちゃう。

隠密行動をする時には夜が鉄則よね。

『聖なる騎士物語』の中で、ライアン・フランシス様の仲間が確かそんな風なことを言っていた気がするわ。

「……お前、自分の立場、ちゃんと分かってるのか？」

ケイン王子の声がする。

もちろん、わかっていますとも。

謂れない罪をきせられたなんとも可哀そうな乙女……今は男の子だけだ。

本当のことを話しているのに、誰も信用してくれない。

いままでの流れを考えると、ひょっとして、わたしは聖騎士にな

れないんじゃないだろうか。

そんなことないわよねえ。そんなはずない。

「貴方が今回の事件に関係ないという確証がえられなければ、ここ
で始末させて頂きます」

どうしましょう。

ジェフリーさんが物騒なことを言っているわ。

「―― まあ、2人とも安心なさい。その子の身元はワシが保証し
よう」

その声が聞こえると同時に、室内が明るくなった。

部屋の中はこれといった特徴のない白い壁紙で覆われている。

壁も天井も白。床だけは茶色の板張りだった。

家具は一切、置かれていないし、室内はそれほど広くもない。

こんなんじゃない魔獣は飼えないだろうから、ここはきっと物置だろ
う。

「髭じじい」

「ロアン様」

思ったよりも離れた所に立っていたケイン王子とジェフリーさん
が、部屋の中央に現れた人物に向かって、声を上げた。

わたしは暗闇から突然、明るくなった室内に、目をシバシバとさ
せながら、ロアン様（髭じじい）と呼ばれた人物を見る。

「あ」

そこには昼間、宿屋の公衆浴場で出会ったお爺さんが居た。

「すまんね、お嬢さん。うちの騎士達が失礼をしたようで」

「^{もつろく}髭碌したか、髭じじい。そいつは男だ」

お爺さんの言葉にケイン王子が横から口をはさむ。

「おや、これは失敬」

ほっほっほ、と笑いながら、蓄えた立派な顎髭を撫でつつ、こちらに近寄ってくるロアンお爺さん。

「どうやら、ちゃんと機能しとるようじゃの」

と、わけのわからないことを言いながら、わたしを見た。

「首の傷は大丈夫かね？」

先ほど、ジェフリーさんにつけられた傷。

そこには赤い血の滴った後だけが残っている。

「あ……大丈夫です。これくらいなら」

そう言って、わたしは自分の首元を手で隠した。

わたしは昔から傷の治りが異様に早い。

小さい頃、それが当たり前だと思っていたわたしは、遊び仲間の村の子1人がケガをして、しばらく寝込んだ時にその事実に気付いたの。

そのことで妙に不安になったわたしは、お母様に尋ねた……どうしてなの、と。

すると、お母様は少し困ったように笑って、わたしに答えてくれた。

——それはね、エルザの聖力が強いからよ。ファミリーアムに愛されているから。

神に愛されているなんて、ライアン・フランシス様とお揃いじゃないの！

その頃すでに『聖なる騎士物語』に出会っていたわたしは、その共通点に喜んだりのだけけれど。

「奇跡の色」の持ち主に、傷の治りが早いという特徴はないのよ。聖力とは関係がない。

わたしはその事実を踏まえて、今度はお父様に聞いてみた。

——エルザ、いいかい。その治癒能力はクリンプトン家に代々受け継がれている古の力^{いにしえ}。けして他人に知られてはいけないよ。

わたしはお父様のその言葉を信じて、これまで生きてきたのだけ
れど……どうなのかしら？

わたしってクリンプトン家の子供ではないのよね？

そこところは、一体どうなっているのかしら？

でも一応、隠しておくのに越したことはないわよね。

誰だって得体のしれないモノには恐怖を抱くもの。

何か首元を隠すものは……。

わたしは辺りを見回し、ふと目にとまったケイン王子の腰紐を解いた。

「おい！お前、ふざけんなよ」

「ふざけてなんかいません」

ただの飾りだった腰紐を自分の首に巻きつける。

「俺の腰紐を返せ！」

「腰紐がない方がお洒落です。いまどきです。恰好いいですよ、ケインさん」

ケイン王子が近づいてきて、わたしの首からスカーフみたいにして
いる腰紐を引き抜こうとする。

「痛っ！」

わたしは痛くも痒くもなかったけれど、腰紐の上から自分の首を
抑えた。

「おっと、すまん」

ケイン王子はそう言って、引っ張っていた腰紐から手を離れた。

「その傷、俺が治してやってもいいぞ」

そう声をかけてくる王子に、優しさの面ではライアン・フランシス様に通じるところがあるわね、と感心しながら首を振る。

「大丈夫です。もう、殆ど痛くないので」

残念なのは、その言葉遣い。

ライアン様ならばきつと「その傷、わたしが治しましょう」とか、もう少し砕けた感じでいくなら「その傷は僕が治すよ」といった感じかしら。

素材は悪くないのよねえ、素材は。

「……ナサニエル。お前、また何か変なこと考えてないか？」

頼むから消えてくれ、なんて言いながらケイン王子がわたしを見るけれど、そんなことよりも――。

「ケインさん……わたしの名前」

ナサニエルって、そう呼んでくれるんですか？

「ああ、お前の名前はナサニエルでいいんだろう。それとも、エルザって呼んだ方がよかったか？」

「いいえ、ナサニエルでいいです」

誰もわたしの話を信じてくれてないのかと思っていたわ。

でも、ケイン王子はわたしの話をちゃんと、

「まあ、お前の名前なんてどうでもいいんだけどな」

信じてくれた訳じゃなかったのね。

「ロアン様、この者をご存知なのですか？」

わたしとケイン王子のやり取りをしり目にジェフリーさんがロアンお爺さんに詰め寄る。

「うむ。ちょっと知りあいの娘さんでなあ」

「髭じじい、娘じゃなくて息子だろ？」

ロアンお爺さんの言葉にすかさずツツコミを入れるケイン王子。知り合いの娘さんって、ひょっとしてロアンお爺さんはお父様のお知り合い？それとも、お母様のかしら。

もしかして、わたしの本当のお父様とお母様のお知り合いだった
りして。

「そうじゃった、そうじゃった。今は息子さんじゃの」

「しっかりしろよ。仮にも神殿の幹部だろう？」

ケイン王子は何やら頭を掻きむしりながら、イライラとしている
様子だ。

それにしても、ロアンお爺さん。

この密室にどうやって姿を現したのかしら。最初からこの部屋に
いたとか。

ケイン王子もジェフリーさんも、何だかワザとここの人たちに捕
まったみたいだし。

予め打ち合わせをしていたとか……。

でも、どこの部屋に入れられるかなんて最初からわかるわけない
わよね。

「――娘、ですか」

ジェフリーさんはケイン王子とは違って、ロアンお爺さんの言葉
に何やら思案顔をしている。

それからしばらくして、わたしを見た。

「ナサニエルさん。先ほどのお話ですが……」

ジェフリーさんがそこまで口にした時、一ヶ所しかない出入口の
扉が音を立てて開いた。

「賊が入ったと知らせを受けたのですが、これはこれは」

そう言って、この部屋に姿を見せたのは白髪頭のでっぺんが禿げ……ではなくて、上頭部の髪が後退されているご老人だった。

見た所の年齢は60歳前後といった感じかしら。

それでもロアンお爺さんよりは背も高いし、背筋もしゃんとしている。

ロアンお爺さんと言うと、そのフサフサの髪とか眉とか髭のお蔭で謎めいてはいるけれど、実際の年齢はかなり高齢だと思う。

突然、現れた2人のご老人の所為で、無駄にこの部屋の平均年齢が上がっている気がするわ。

「花がないと思いませんか？ ケインさん」

「お前は少し黙ってろ」

わたしの素直な感想に、ケイン王子が冷たく言った。

ああ、そのいつもより低い声。すごくいい感じ。背中がゾクゾクとするわ。

ライアン・フランシス様も魔のモノに対峙した時には、普段の穏やかな声音とは違って、身も縮むような冷たい声を出したって書いてあったものね。

たぶん、きつとこんな感じの声だったんだわ。

「報告では3人と聞いていたんだが、1人多いな」

部屋に入ってきたご老人は後ろに控えていた少年達に向かって言った。

推定65歳くらいのご老人の背後には、聖騎士風な白い服を着こんだ少年達の姿がある。

みんな年齢的にはわたしよりも下、10歳に満たない子も居るのではないかしら。

彼らのお蔭で、平均年齢はぐっと下がったわ。

「あなた様はこの国の王子、ケイン・フィード・トリエスタ殿下とお見受けするが、間違いないですか？」

「人の名前を確認する前に、まずは自分から名乗ったらどうだ」

ケイン王子は一步前に歩み出ると、扉の前のご老人に向かってそう言った。

「これは失礼致しました。わたしはこの町の領主を務めております。クリストファー・ベアトリス言うものです」

ベアトリス卿は名乗ってから、深々と頭を下げた。

ケイン王子はそんなベアトリス卿を鼻で笑う。

「俺は殿下、なんて者じゃないさ。ただの人売り商人の従者ってやつだよ」

「おや、そうでしたか。こちらは失礼のないように丁重に扱おうと思っていたのですがね。それならば変に気を使う必要もなさそうだ。そもそも、殿下ともあろうお方がこんな田舎町の領主邸で賊まがいな事をなさる筈ありませんでしょうから」

ケイン王子の返答にベアトリス卿はほくそ笑んで言った。

「お前達、彼らの腕を縛りなさい」

ベアトリス卿の言葉に少年達が、わたし達の周りをワラワラと囲む。

その様子にジェフリーさんが腰の剣に手をやると、ベアトリス卿が言った。

「下手なことはしない方がいい。君が最初に売りつけた少年がどうなっても知りませんよ」

売りつけた少年と言うのはひょっとして、この領主邸に潜入していた聖騎士の人だろうか。

昼間わたしがここに来た時みたいに、売り物として、この屋敷に潜入したのね。

ベアトリス卿の言葉にジェフリーさんは剣の柄から手を離れた。

「あなた方には少々協力して頂きたいことがありますね」

そう言ってベアトリス卿は部屋を後にした。

なんでも準備があるのだとか……一体、何の準備かしら。準備って必要なの？

そもそもここに来る前に用意しておけばよかったのに。

手際が悪いわね、なんてことを思ったけれど、口には出さなかった。

ケイン王子は抵抗もせずに、腕を縛ろうとする少年達に自らその手を差し出している。

……何か考えがあつてのことなのよ、ね？

ケイン王子はダメな子とばかり思っていたけれど、案外そうでもないみたい。

わたしは王子に対する見方をほんの少しだけ変えてみることにした。

まず、わたしを捕えたのは盗賊団の一味と間違えたから……あら、これはダメよね。

でもトイレでは親切に、わたしに立ちシヨンの仕方を教えてくれたわ。

知りたかった訳じゃないけれど、それでも今後、男として生活していく上での参考になったのは確かよ。

聖騎士になった時にトイレの仕方も知らないんじゃないわね。

でも次からは個室でするわ。絶対に。

あの時、ケイン王子がわたしのズボンを下げたのだって、たぶんわたしの性別を確認するためだったのよ。

恰好は男の子だったけれど、見た目はやっぱり女の子っぽいものね。

ジェフリーさんも最初はわたしのことを女性だと思った、と言っていたし。

でもわたしには立派なモノがついていた。

というか、わたしの体ってどうなっているのかしら？本当に大丈夫？ちょっと心配になってきたわ。

体に変化が起きたのは、胸がなくなっ、アソコに例のモノがついたという事だけ。

見た目や声に何の変化もない。

それよりも、あの物置部屋で言っていたジェフリーさんの言葉を考えてみる。

どうやら「奇跡の色」を持った女性がクリンプトン家に居るといけないらしい。

わたしみたいに髪に変化が現れるタイプは男性では珍しいというし、女性に間違えられたってしょうがないわよね。

……ああ、なんでこんな髪色に生まれたのかしら。

出来ることならライアン・フランシス様と同じ、強い聖力を使った時にだけ変化する「奇跡の瞳」がよかったわ。

昼間、この屋敷に来る前にジェフリーさんに聞かれて、薄幸の少女、エルザお嬢様の作り話をしたけれど。

あの時、ジェフリーさんがその表情を歪ませたのは、立ちいった

ことを聞いてすまない、というものではなく。

不名誉（？）な噂を蒸し返すわたしへの嫌悪感からだったのかもしれない。

でも、ちょっと待って。

そもそも「奇跡の色」の少女を隠していたからって罪になることはないはずよね。

確かに珍しい現象だけれど、国宝級というわけではないもの。

—— いけない。思考が脱線しているわ。

今はケイン王子が思ったよりも出来る子なんじゃないかって、考えている最中だったのに。

見た目は文句なしに合格ラインを軽く突破しているし、声も問題ないわ。

中身だって、少しぶっきら棒なところがあるけれど、所々に優しさがあって、それはそれでいいと思うの。

ライアン・フランシス様には遠く及ばずとも、なかなか見どころのある殿方だとは思うわ。

「俺を見るな」とか「消えてくれ」なんて冷たいことを言っているけれど、あれはそうね。

一種の照れ隠しじゃないかしら。ケイン王子はどちらかと言うと、天の邪鬼っぽいもの。

本当は「俺を見てくれてありがとう」「俺の前から消えないでくれ」そう思っているに違いないわ。

それに昼間、ここへ来る前に「ライアン・フランシス様の名前を口にするな」みたいなことを言っていたけれど。

あれは嫉妬ね。ただの嫉妬だったのね。

そう考えれば色々辻褄が合ってくるわ。

ジェフリーさんがわたしに聖術を使わせようとした場面で、ケイン王子が妙にはりきっていたの。

わたしをこの領主邸への潜入に同行させてくれたのも、全てはわたしがケイン王子を見直すように仕組んだジェフリーさんの計らいだったのね。

……すると、今のこの状態も？

「ケインさん、ごめんなさい。わたしの身も心も既にライアン様のモノなんです」

「お前、急に何を口走ってるんだよ。っていうかなんで俺に謝るんだ？」

わたしたち4人は腕を縛られた後、白い制服を着た少年達に連れられて、屋敷内の細い廊下を一行で歩かされている。

「認めたくない気持ちもわかりますけど、わたしのことは諦めて下さい」

ケイン王子がもし、その言葉遣いを改めて名前をライアン・フラシスと改名してくださるなら、考えないこともないんですけど。愛しいわたしを手に入れるために、こんなに多くの人々を巻き込むなんて……この辺りで止めさせないと。

道を正す責任は罪深きわたしにあるわよね。

「なんじゃ、ケインはこの子のことを好いておったのか」

わたしのすぐ後ろを歩いているロアンお爺さんが言った。

「黙れよ、髭じじい」

「——ケイン。前々から思っていました、あなたの言動はロアン様に対して失礼です」

先頭を歩くジェフリーさんは後ろの王子に振り返ることなく注意

した。

「ケインさん……振られたからって、人に八つ当たりするのは、よくないですよ」

ごめんなさい、ケイン王子。

わたしにこんなこと言う資格はないかもしれないけれど、でも、わたしの所為で嫌な人にはなってほしくはないの。

「……おい、こいつの頭をどうにかしてくれ。でないと俺、たぶんストレスで死ぬと思うぞ」

まあ、振られたから死ぬですって。

そこまで思いつめていたなんて……。

「待って下さい。ケインさん、早まらないで。わたし、あなたのことを愛せるように努力します。だから命を粗末にしないでください」

王子がそこまでわたしのことを愛して下さっていたとは……。

わたし、まったく気がつかなくて。

いいの。いいんです。

わたしがライアン・フランシス様に捧げた愛はけして消えるものではないけれど。

大丈夫、2人とも愛してみせるわ！

わたしは愛情深いタイプだと思うの。

死を覚悟するほどのケイン王子からの愛。

わたし、ちゃんと受け止めて見せます。

そうだわ。エルザはライアン様を愛し、ナサニエルはケイン王子を愛す。

これで全ては解決ね。

だって、ケイン王子は男のわたしのことが好きなのですよ。

「わたし、ノーマルなんです。でも同性愛にも理解があるつもりです」

そう言って前を歩くケイン王子の背中に語りかける。

「男と男の間に友情以上のモノが芽生えたとしても、それはそれでいいと思うんです」

わたしは乙女だから、もちろん男の人が好きだけれど。

「こんなわたしでよければ、ケインさん。可愛がってくださいね」

男、ナサニエルはケイン王子、あなたのモノですよ。

だから、死んじゃうなんて物騒なこと二度と口にしないで下さいね。

「いや、めでたいのお。ケインにもついに春が来たのか。あの小さかったケインがお」

語尾を涙で詰まらせながら、ロアンお爺さんが言った。

「いくら誘っても女遊びをしなかった理由がやっとわかりましたよ。ケイン、お幸せに」

相も変わらずジェフリーさんは前を向いたまま、そんなことを言っている。

「……俺、死んだ。今、死んだ」

まあ、ケイン王子ったら。

嬉しくて死にそうだななんて、そんなこと言われたら、わたしも全力で王子に愛を返さないといけなくなるじゃないですか。

「ケインさん」

愛し合っている2人が、名前にさん付けなんて、ダメよね。

わたしはコホンと咳払いを1つして、改めて言いなおす。

「ケイン」

「もう、俺に話しかけるな」

頼むから、なんて照れちゃって。

ケイン王子は突っ張って見えるけれど、案外、可愛らしい方なの

ね。

「安心して下さい、ケイン。わたしがあなたを守って見せますから」
これがわたし、ナサニエルのケイン王子に捧げる愛の言葉です。

愛って難しいものね。

ダメだと判っているけれど、つつい比べてしまうの。

ライアン・フランシス様とケイン王子。

見た目は近くても、同じ人間ではないわ。

ライアン様は架空の人物だから、比べたって仕方がないのだけ
れど。

あの完璧なライアン・フランシス様とケイン王子を比べる方が酷
いものよね。

わかってる、わかっているのよ。

でも世の中にはどうしようもない事ってあるじゃない。

例えば、ライアン・フランシス様が本の中の主人公だという事と
か、お会いしたくても現実に存在していないから無理だという事。
それから、今の現状。

わたしたちはしばらく歩かされた後に、屋敷の裏手にある別館へ
と連れて行かれた。

手を縛られているとは言っても、隙をつけばいつでも逃げ出せそ
うなこの状況。

でも誰もそれを実行しない。

だからわたしは大人しく、ケイン様と愛の語らいをしながら歩き
続けていたのだけれど。

別館に入る前に、それまで大人しく前後にわかれて、わたしたち

を連行していた少年の1人が言った。

「ここからお静かに願います」

何故か、すごく軽蔑した眼差しで見られたわ。

ケイン王子がわたしの前で「俺は違う、俺は違うんだ」なんてブツブツと呟いている。

「わかりました」

わたしが素直にそう返事すると、少年たちは再び、わたしたちを連れて歩きだした。

それから、しばらくして――。

「あの……」

「お静かに」

わたしが声を上げると、先ほどの少年が口をはさんできた。

「じゃあ」

「……………」

少年は無言のまま、素早くこちらに近づいてくると、懐から白いハンカチを取り出して、わたしの口をそれで塞ぐ。

「ふあんふえふおふおふんふえふふあ」

何てことするんですか、と言ったつもりでも、口から出るのはくぐもった声ばかり。

「お静かにと言ったはずです」

確かにそう言われたけれど、一言も話しちゃいけないなんて言わなかったじゃない。

だからちよつと小声でお喋りしようとしただけなのに。

「少年、いい仕事したな」

グッジョブ、なんて言いながらケイン王子が少年の肩を叩いた。

「!？」

少年はケイン王子の両手が自由になっていることに目を見開いた。わたしも同じく目を見開く。

「ふえふいん、ふいふおふあふい」

「何言ってるのか、わかんねーよ」

もちろん。わたしは「ケイン、いつの間に」と言っただけれど通じていないみたい。

愛です。愛が足りませんよ、王子。

いや、これはケイン王子お得意の照れ隠しと言うやつね。

それともわたしがなかなか、ライアン・フランシス様への愛を断ち切れないから、怒っていらっしやるのかしら。

ごめんなさい、王子。

ナサニエルの時にはライアン様ではなく、ケイン王子を愛そうと誓ったのに。

でもわかってください。

愛とは耐えることも必要なのです。

そして少年は青年へと成長していくものだど、何かの本に書いてあったような。

「お前らって全然、盗賊らしくないよな。捕虜の手を縛るだけで、武器を取り上げないなんてよ。そもそも最初は縛りもしてなかったしな」

そう言っってケイン王子は腰に吊るしてある剣に手をかけた。

「これは一体どういう事なんだ？」

抜かないまでも剣を手にした王子は、随分と迫力があつた。

少年たちは脅えた目でケイン王子を見やり、リーダー格と思しき人物を見る。
おぼ

「これから旦那さまがご説明なさいます。それまで、どうかお静かに——あまり騒ぐとあの方が目覚めてしまう」

「あの方？」

少年の言葉にジェフリーさんが口をはさむ。

そのジェフリーさんの両手からも、いつの間にか縄が無くなっていた。

「まあ、ここは大人しく彼らの後について行くことじゃな。まったく、堪え性のない奴め」

そう言ってケイン王子を小突いたロアンお爺さんも、知らないうちに自由になっていた。

みんなズルイ！

わたしもなんとかして、この縄を解かないと。それから口を塞いでいるこのハンカチも。

息がしづらいこと、この上ないわ。

わたしは何とか猿ぐつわを外し、両手の縄に取り掛かる。

本当、詰めが甘いわ。ケイン王子の言うとおり、とても本当の盗賊団とは思えない。

義賊だから？ 義賊だからなの？

あれ、でも……この縄、解けないのだけれど。

みんなどうやって、外したのかしら。

今後の為にも、誰かに教えてもらう必要があるわね。

近くにいるジェフリーさんに声をかけようとして、その視線がある一点を見ていることに気づく。

「——マイケル？」

ジェフリーさんの口から零れ出た名前。

視線の先には、先ほどわたしたちが通ってきた別館の玄関ホール

に佇む人影が見える。

「若旦那様！」

少年の呼び声に、わずかに身動きする影。

わたしの目がおかしいのかしら？

マイケルに若旦那様、そう呼ばれた男性の左半身がよくわからない灰色をした物体に覆われていた。

まるで、何かの根のように見えるそれは、その人の体を這うように蠢いている。

「寝てなくてはダメじゃないですか！起きていればそれだけ進行が早まります！！」

「お部屋へお戻りください！」

「若旦那様！！」

制服姿の少年たちは口々に、声を上げる。

「どうして、どうして……ジェフリー先輩がここに？」

それに殿下まで、と、少年達の若旦那様は半分しか動かない口で、なんとか聞きとれる言葉を発した。

「マイケル、お前……一体どうしたってんだ、その体！？」

ケイン王子が叫んだ。

その隣でジェフリーさんが言う。

「そう言えば、マイケルの姓はベアトリスでしたね。失念していました」

館に部下を送る前に気付きましたようよ、ジェフリーさん。なんてことは言えない。

それよりも、この人はどうやら目的の人物ではないみたい。

ケイン王子やジェフリーさんのお知り合いのようだけれど……彼は人、よね？

ジェフリーさんに「先輩」なんて言っているから、彼も聖騎士の1人なのかしら。

「お兄様」

その時、背後（当初わたしたちが進んでいた方向）から声がかかった。女性の声。

振りかえると、廊下の突き当たりにある部屋の扉が開いている。そこからヒラヒラとしたドレス姿の女性と、なんちゃって聖騎士服の男性というか少年。

その後からベアトリス卿が姿を現した。

「テレサ！」

「ブライアン！！」

ケイン王子が女性を、ジェフリーさんが男性の名前を呼んだ。

わたしたちは今、ベアトリス邸の別館にある応接室にいる。時刻は深夜というよりも明け方に近いかもしれない。

先ほど館の外に出た時はまだ辺りは真っ暗だったけれど。

宿屋を出た時刻を考えれば、日付が変わってもう何時間か経っているはずだもの。

応接室には10人くらい座れるテーブルがあった。

その席にケイン王子、ジェフリーさん、ロアンお爺さん、わたしの順で腰を下ろしている。

その向かいには、ベアトリス卿、1つ席を空けて、テレサ姫とブ

ライアンさん。

先ほど現れたヒラヒラドレスの女性は盗賊団に攫われたはずのテレサ姫。

ふわふわの綿がしみたいな淡い金髪と青い瞳の持ち主。

顔はケイン王子に似ていないこともないけれど、目が悪いのか丸いメガネをかけている。

ブライアンと言う人は、わたしたちが探していた人物。

この屋敷に潜入していた聖騎士で、ジェフリーさんのパートナー。つまり対ね。ペア。

癖のある飴色の髪とそのべっ甲の様な瞳。

見た目はわたしよりも年下に見えるのに、なんとケイン王子やジェフリーさんよりも年上なんですって。

ケイン王子とジェフリーさんの年齢は『月刊 聖騎士☆通信』によれば、18歳と20歳。

なんと、ケイン王子のみならず、ジェフリーさんのことも、あの雑誌に載っていたのよ。

「今月の聖騎士」という、読者から人気のコーナーで、ジェフリーさんが取り扱われていたの。

ここに来る前に暇つぶしで、持ってきていた雑誌を見ていたら、発見した。

……どおりで見覚えがあると思ったわ。

たまたま、お気に入りでプレミア付きの号に特集されていたのがケイン王子とジェフリーさんだなんて、何か運命的なものを感じる。

ブライアンさんがその雑誌に載っていたかどうか、記憶にないけ

れど……彼は今年で28歳だと言う。

ここまで見た目と実年齢にギャップがある人を初めて見たわ。

それから、若旦那様ことマイケル・ベアトリスさんは、やっぱり聖騎士だった。

しかもケイン王子やジェフリーさん達と同じ、第3聖騎士団の団員らしい。

前回の魔物退治で負傷して、療養のために故郷のこの屋敷に戻ってきていたと言うのだけだ。

「まず、今回の件について謝罪をさせて頂きたい」
ベアトリス卿はそう言って頭を下げた。

「あなたが謝る必要はありません、ベアトリス卿。全てはわたくしが計画したことですから」

テレサ姫が言う。

「大方そんな事だろうと思ったよ。そもそも「白い風」は王都近辺を賑わしている義賊だ。こんな国境近い南の田舎町にどんな用があるのか、疑問だったんだよ」

姫の言葉に王子が言う。

「ケイン様、そんな言い方ではこの町の領主であるベアトリス卿に失礼ですよ」

もう、正体を偽る必要のなくなったジェフリーさんはケイン王子を呼び捨てしなくなっていた。

それならば、わたしも様を付けてお呼びしなくてはね。

何の敬称もなく呼び合うのは、二人っきりの時だけというのがセオリーかしら。

「ケイン様、もう正体はバレているんですから、そのチンピラ風な言葉遣いは止めて下さい。顔に似合いません」

「お前ら、話のこしを折るなよ」

ジェフリーさんとわたしがそう言うと、ケイン王子はため息交じりに言葉を返した。

「悪いのはケイン様です。そんな言葉遣いなのがいけないんです」

「まったく、ナサニエルさんの言うとおりですね」

わたしの意見にジェフリーさんが賛同してくれる。

あれから、なんとなく有耶無耶になってしまったわたしの身元調査は、ロアンお爺さんのお蔭でひとまず落ち着いたみたい。

ジェフリーさんはあまり納得のいってないような顔をしていたけれど、今では以前と変わらず接してくれている。

確か、わたしたちが閉じ込められていた部屋で何か言いかけていたけれど、もう一度、聞かないという事は、それほど大した内容ではないのだわ。

そんなわたしたちの遣り取りをニコニコと笑顔で見ていたブライアンさん（とても30歳近くには見えない）が、わたしを見て言う。

「ジェフリー君にケイン君、その子はだあれ？」

ブライアンさんの緊張感の薄い言葉に、向かいの席からわたしへと視線が集まる。

その喋り方からしても、年下だって言われた方がしっくりくると思うのですけれど。

「わたくしも先ほどから気になっておりました。彼女は……？」

テレサ姫はどうも表情の少ない方のようで、今のセリフも殆ど顔色を変えずに言った。

メガネをかけたお人形のような人。

「テレサ、こいつは女じゃねえ。男だ」

ケイン王子が訂正した。

なんだかこんなやりとりばかりね。

「桃色の髪の子か、珍しいね」

なんて茶色の瞳を輝かせながら、ブライアンさんが言う。

そんな彼はニコニコと可愛らしく笑っていて、その表情が更に年齢を若く見せている気がするのだけれど。

どうやら笑顔はブライアンさんの標準装備みたい。

だって出会ってから、ずーっと微笑んでるように見えるんだもの。

いるわよね。口角が元から上がってる人って。

そんな人は大抵、何か重要な時とか、悲しい場面で1人だけ笑ってるって思われて「ヘラヘラしてんじゃねえよ」とか「あなたって最低」とか言われちゃうの。

でも、ブライアンさんの場合はその容姿が手助けしている。

だって一見、子供に見えるから。

しかも口を開くと更に幼く見える。

「彼はナサニエルさんと言って、ロアン様の知人のお子さんだそうです」

ジェフリーさんが言った。

「どうも、ナサニエル・レインと言います」

わたしはそう言って、ペコリと頭を下げる。

「僕はね、ブライアン・トマソンだよ」

そう言ってブライアンさんはこちらに向かって手を振ってくる。

……これは振り返した方がいいのかしら？

疑問に思っ、ケイン王子やジェフリーさんを見るけれど、誰もこちらを見ていない。

王子はテーブルに肘をつき額を抑えているし、ジェフリーさんは誰も座っていない席の一点を見つめている。

ロアンお爺さんは、眉毛で目が隠れていて、どこを見ているのかさっぱり わからなかった。

わたしは取りあえず、テーブルの下から少しだけ手を出して、小さく振り返す。

すると、ブライアンさんの行動がエスカレートした。

「わーい。ナサニエル君は、もう僕の友達だね」

ぶんぶんと両手を振ってくる。

危ない。隣の席の姫に当たっちゃうわ。

……あ、よけた。

テレサ姫は無表情のまま、ブライアンさんが振りまわしている手を、上半身を傾けることによって上手く交わした。

何て言うか、わたしも気をつけましよう。

ここまで空気の読めない人が居たなんて……他人の振り見て我が振り治せとはよく言ったものだわ。

……わたし、ここまではないわよね。

そもそも、わたしの場合は空気を読めないんじゃないじゃなくて、あえて読まない時があるだけで。

ブライアンさんよりマシだわ。

それとも、ブライアンさんのこれは―― 計算!?

「わたくしは、テレサ・フェイス・トリエスタです」

ブライアンさんの隣でテレサ姫が冷静に言う。

うーん、一体何を考えているのか、わからない人だわ。

何が起ころうと無表情なお姫様と、やたらとテンションの高いブライアンさん。

この場合、空気が全く読めていないのは、後者の方よね。

「ブライアン先輩」

とうとう痺れを切らしたジェフリーさんが、ブライアンさんに声をかける。

「ダメだよ！ジェフリー君。僕は先輩じゃなくて、ブライアン君。見た目から言ったら君よりお兄さんには見えないでしょ。だから先輩じゃなくて、君付けにしてって、いつも言ってるのに」

無駄に語尾を伸ばすブライアンさん。

ジェフリーさんはいつものことなのか顔を引き攣らせることなく言った。

「これから真剣な話をしますので、あなたは少し黙っててください。雰囲気壊れます」

「ええ」

「よろしいですか？ブライアン君」

「でも」

「僕にこれ以上、言わせないでください」

あ、ジェフリーさんの背に、いつか見たような黒い闇が見えるわ。

「……わかったよ、ジェフリー君。キミがそこまで言うなら、その通りにするよ」

ブライアンさんは、ジェフリーさんの背後をチラチラと視線を送りながら言った。

「ジェフリー君は魔物を飼ってるよね、絶対」

「何か言いましたか？ブライアン君」

「ううん、なあんにも……」

そう言って首を振って、ブライアンさんは黙り込んだ。

その様子を見たジェフリーさんは、これでよし、とばかりにベアトリス卿を見る。

「―― 事情の説明をお願いします」

うん、なんだかブライアンさんが潜入捜査に使われた理由がわかった気がするわ。

たぶん、ケイン王子もジェフリーさんもブライアンさんの働きなんて、最初から期待してなかったのよ。

ただ、一緒に行動するのが鬱陶しいから、厄介払いしただけだと思うわ。

それに、ちょうど見た目も少年に見えるから。

たぶん、そう。きつと、そうよ。そうに決まってる。

「わかりました。ご説明いたしましょう。少し長くはなりますが……」

そう言ってベアトリス卿は話し始めた。

倉庫部屋で感じた悪役の様な雰囲気は一遍、ただの人の良さそうなお爺さんに見える。

でも、その中には領主としての威厳が見え隠れしているけれど。

……それにしても眠いわ。

生まれてこの方16年。

こんなに夜更かしをしたのは『聖なる騎士物語』の最新刊が出て以来1年ぶりだもの。

わたしは出そうになる欠伸を何度も噛み殺した。

ベアトリス卿の話は本当に長かった。

だってまず始まったのは、ベアトリス卿と今は亡き奥方様（屋敷の本館に飾ってあった肖像画の人物）との出会いから。

「おい、その話は必要なのか？」

ケイン王子が言った。

「それはもちろんですとも。彼女との出会いがなければ、今のわたしは存在しなかった」

そして始まったのは、その奥方様がどんなに素晴らしい女性だったかという話。

「ベアトリス卿。あなたの奥様が、どれほど素晴らしいご婦人だったのかは、嫌になるほど分かりましたので、そろそろ本題を……」

と、今度はジェフリーさん。

「ジェフリー殿、やはりあなたは分かってくさいますか。そもそもわたしの妻は息子のマイケルを出産した後も、あまり体形が変わりませんでね。以前のように美しかったです、わたしはそのことが心配で心配で……そんな時、どこかの馬鹿な若造が妻に言い寄ってきましてね」

ところが妻はそれを撥ね退けましてね、愛しているのはこのわたしだけだと、そんなことを申すものですから、と今度は惚気話のろけへと発展していった。

……どうしましょう。

ここにも空気の読めない人物が1人。
予想外だわ、ベアトリス卿。

ロアンお爺さんとブライアンさん、それからテレサ姫以外はみんなウンザリした表情を浮かべていた。

それもそのはず、ロアンお爺さんは隣の席で随分と前から、軽くイビキをかいている。

けれど、そのことは遠目から見ると限りさっぱり、わからない。

ただ規則的に鼻の下の髭がユラユラと揺れているだけ。

わたしは隣に座っていたから、その事に気付いたの。

ブライアンさんに至っては、もう机の上に突っ伏していた。豪快に居眠りしている。

そして、透かし彫りの豪華なテーブルの上には、ブライアンさんのヨダレが……。

その隣に座っているテレサ姫はと言うと、何やら先ほどから一心不乱に、どこから取り出したメモ帳にペンで何かを書き込んでいた。

たぶん、ベアトリス卿の話す奥方様のお話を、だと思っただけだ。

書き留める必要が、あるのかしら……疑問だわ。

「——もう、結構です」

ジェフリーさんが言った。

「まだこれから、めくるめくる愛の活劇があるのですが、お聞きに

ならないと?」

そう言うベアトリス卿の言葉を見殺して、ジェフリーさんはテレサ姫に顔を向ける。

「テレサ様、あなたは全ての事情をご存知なのでしょう?」

ジェフリーさんに無視されて、ベアトリス卿は何だかちよつと寂しそう。

「わかるぞ、クリストファー。お主の気持ち。最近の若者は年寄りの話を聞こうとしない」

先ほどまで、眠っていたはずのロアンお爺さんが、いつの間にかベアトリス卿の隣の席に移動していた。

「髭じじい。お前、さっきまで寝てただろう」

ケイン王子がテーブルに肘をついて、斜め向かいのロアンお爺さんに言った。

「なんと!? このワシを疑うのか?」

「ヨダレ、ついてるぞ。ご自慢の髭に」

ベアトリス卿がロアンお爺さんに、悲しげな眼差しを向ける。

「こ、これはお主の話がつまらなくて寝ていたのではなくて……」

「……つまらない」

ロアンお爺さんは弁解しようとして、ベアトリス卿を更に落ち込ませていた。

「テレサ様。ベアトリス卿に代わって説明して下さいますか?」

ジェフリーさんの言葉に、姫はメモ帳から顔を上げ、静かに頷いた。

「まず、わたくしが何故ここに居るのかと言いますと……」

テレサ姫はそこで言葉を切った。

「わたくし、一度でよいので囚われの姫というものを体験してみたかったのです」

……えっと、だから今回の事件を起こしたというコトかしら？

「この間の騒動の時には、もし自分が盗賊に攫われた場合に国がどう動いてくれるのか、果たして無事に救出することが出来るのか確かめたかった、と言われていましたね」

確かテレサ姫はジェフリーさんの話によると、以前も偽の脅迫状を自分の父親（つまり国王様）に送り付け、似たような騒ぎを起こしている。

「前回のことは反省しています。あれは想像以上に周りに混乱を招いてしまいました。ですから、今回はケインお兄様の名前を指定させて頂きました」

「おい、お前。今回も十分、混乱を招いてんだよ！」

テーブルに身を乗り出して、ケイン王子が言う。

「大丈夫。お兄様の行動は予想の範囲内です。今の現状はプランBですから」

「どこが大丈夫なんだ！？お前の所為で俺の第3聖騎士団を動かしてるんだぞ！」

「ケインお兄様ではございません。正確にはこの聖トリエスタ王国の聖騎士団です」

それは余計、問題があるのではないかしら。

「屁理屈言ってんじゃねえー。お前、そういう所はどんどん、あの女に似てきやがって」

……あの、女？

ケイン王子の口から聞き捨てならない単語が耳に入ってきたのですけれど。

一体、どこの誰なの？

わたしの知っている人かしらって……そんな訳ないわよね。

そもそもケイン王子とは最近、数日前に知りあったばかりだもの。

ついつい、その場のノリで修羅場的な発言をしてしまいそうだったわ。

よく考えてみれば、わたしの方が後から現れた女……ではなく、男なのよね。

ケイン王子ったら心に決めた女性がいらっしやるのに、男であるわたしにあんな愛の告白を？

振られたら死んでしまう……と言うような熱いセリフをおっしゃったの？

なんてことかしら。こんなこと、ライアン・フランシス様だったら……。

そうね、そうよね。

わたしにそんなこと言う資格なんて、なかったのだわ。

わたしだって、ライアン・フランシス様への愛を捨て切れずに、こうやって、いつも王子と比べてしまう。

いくらケイン王子の命がかかっているからと言って、わたしってなんて醜いのかしら。

口では都合のいいことを言って、ケイン王子を弄び。

心の奥ではライアン・フランシス様のモデルとして、相応しい方になって頂きたいと画策している。

いえ、でもこれは神に与えられた使命。
わたしは頑張ろうと心に誓ったのよ。

ケイン王子がライアン・フランシス様に近づけば、わたしは心底から彼を愛することが出来ると思うの。

やっぱり、どう考えてもライアン様への愛を覆すことは出来ないんだもの。

そうなれば、ここは王子に変わっていただく他ないわ。

そう、これは言わば必然。愛するが為の試練。

ケイン王子はこの世に生を受けた時点で、ライアン・フランシス様になる予定だったのよ。

偶々、名前を付け間違えられただけ。

性格の矯正だって、いまからでも遅くないわよね。きっと。

「あの女とは、マリエッタお姉様のことですね」

テレサ姫が言った。

「それ以外に誰がいる？」

まあ……女と言うのは、ケイン王子のお姉様のことだったのね。
わたししたら、変な誤解をしていたわ。

ケイン王子は男の人が好きなんですものね。

「そんなことより、テレサ様。プランBというのは……プランAもあったという事ですか？」

このままでは一向に話が進みそうもない所で、ジェフリーさんが言う。

「はい、ジェフリー。プランAは本当の義賊「白い風」に、わたくしを誘拐してもらうという計画でした。1年も前から、かの盗賊団の頭目宛てにコツコツと書状を送ってはいたのですが、一向に返事が貰えず。わたくしは妥協策としてプランBを実行することにしたのです」

プランBはプランAに比べて、随分と危険度が少ないのです、そう言ってテレサ姫は少しずれていたメガネをインクの付いた手で直した。

「それが今回の誘拐事件だ？」

ジェフリーさんの言葉にテレサ姫は首を振る。

「正確には誘拐事件ではありません。わたくしは誘拐などされていませんから。ただ、少し趣向を凝らした手紙を陛下宛てに送っただけですよ」

趣向を凝らした手紙とは、あの脅迫状のことね。

—— テレサ・フェイス・トリエスタを誘拐した。姫を返してほしくば、ケイン・フィード・トリエスタをネオスの町に連れて来い。

「誘拐ではなく、偽装誘拐だと仰りたいのですか？」

ジェフリーさんが言って、

「偽装でもなんでも、立派な事件だろ、これは」

お前が引き起こした迷惑極まりない事件だ、っとケイン王子が息巻く。

「違います。あの手紙はわたしからすれば——ネオスの町にいるので、ケインお兄様を迎えによこしてください。勝手に外出して申し訳ありませんでした。と、そのような意味合いをこめて送ったものです」

えっと、どの辺りがそうなのかしら？

テレサ姫の発言にケイン王子は、だーっと声を上げると、金色の髪を掻き毟っていらっしゃる。

あれはもう癖の様なものね。矯正するのは大変かもしれないわ。

「まあ、そんな事はこの際、どうでもいいです」
「どうでもいい、なんてジェフリーさん。」
世の中には思っている、口に出さない方がいい事があると思うのよ。

ジェフリーさんは深いため息をついて、続けた。

「何故、この町に？」

そう、ジェフリーさんの疑問はもつともだわ。

先ほどケイン王子が言っていたように、ここは国境が近い、南外れの地域。

しかも国の境さかいとは言え、後ろには、そびえ立つ山々。

そしてその山は誰も越えることが出来ない。と言うか、越えても意味がないのよ。

聖トリエスタ王国は大陸の一番、南端に存在している。
だから、山を越えた先には何も無い。

存在するのは、塩分を多く含んだ暗い水たまり。

人間が住むことのできない、不思議な土地が広がっている。

そこは足を踏み入れたが最後、ズブズブと奥深くまで吸い込まれてしまうという魔の領域。

人々はそれを海と呼ぶ。

そこを渡るには船と呼ばれる乗り物が必要だとか。

間違っても馬車で乗り入れてはいけない。そのまま帰ってこられなくなるらしい。

……恐ろしいわ。

そして、そんな海には面妖な生物たちが生息している。

他国にはそれを好んで食べる人々がいると言うけれど。

わたしはその魚介類とよばれる生物をお父様の書斎にあった『海の生き物図鑑』で見た。

そこに描かれていた生物は、見たこともないような不思議な形をしていたの。

手足が8本もある生き物がいるだなんて……正確には手が2本で、足が6本。

中には12本なんて、つわものもいたのよ。

……ありえない。

きっと、魔物の一種なのね。

わたしが未知の生物に思いを馳せていると、テレサ姫の声がした。

「わたくしが城を散歩していた時、ちょうど、ベアトリス卿のご息を乗せた馬車が止まっていたのです」

どうやらテレサ姫がジェフリーさんの質問に答えているようだ。

「つまり、偶々たまたまその馬車に乗り合わせ、偶然にこの町に来てしまったと、そう言う事ですか？」

「乗り合わせたというのには少し語弊があります。わたしはその馬車の屋根で昼寝をしていたのですから」

「……昼寝」

姫の言葉にジェフリーさんは絶句してしまった。

「そう言えば、テレサは所構わず昼寝する癖があったな」と、ケイン王子。

「お恥ずかしい話です。わたくしは城から足を引きずり馬車に乗れるベアトリス卿のご子息、つまりマイケル・ベアトリスの事が気に入り、興味本位でその馬車の屋根に身をひそめ、情報収集をしようとしておりました。けれど、ついポカポカと暖かい陽気で寝入ってしまい。気がついた時にはこの町に」

「そういうことですか」

「……え、どういうことなの？」

今の説明でジェフリーさんはどうやら、納得したみたい。

わたし、みんなの話についていけないわ。

眠いのも我慢して、こうして起きているけれど。

わたしもブライアンさんのように居眠りしてもいいかしら。

もちろん、ヨダレは垂らしません。

ブライアンさんは相変わらず、テーブルの上に水たまりを作って

いた。

テレサ姫はそれが自分の方に流れてこないように、ブライアンさんの服の袖で、それを拭いている。

「それにしても、なぜ脅迫状を？」

ジェフリーさんがため息交じりに、そう言った。

「脅迫状ではありません。それに……最初に言いましたでしょう。わたくし、囚われの姫というものを体験してみたかった、と」

テレサ姫はブライアンさんの腕を放して、ジェフリーさんを見る。

「お前、それ、全然理由になってねーからな。そもそも、テレサ。

お前に囚われの姫役は無理だ。見た目はそうだな、メガネを外せば何とか……ただ、その中身がなっちゃいねえ」

「やはり、そう思われますか」

兄であるケイン王子の言葉にテレサ姫は冷静にそう答えた。

何と言うか、わたしって、すっかり部外者よね。

なんだか置いてきぼり感がたっぷりで、寂しいの。

ついさっきまでは盗賊団の一味だとか、何かの陰謀に絡んでいるんじゃないかとか疑われ、なんやかんやと構われていたのに。

今ではすっかり蚊帳の外。

それでいいのだけれど……いいのだけれどね。

「仕方がないから、プランCに切り替えようかしら」

テレサ姫が不穏な発言をした所で、廊下の方が慌ただしくなった。

「旦那様っ！」

現れたのは、なんちゃって盗賊団だった少年たちの内の1人。
わたしに猿ぐつわなんかをしてくれた、あの男の子だ。

「若旦那様が……」

この国では珍しい漆黒の髪を振り乱し、現れた少年の言葉にベアトリス卿は席を立った。

「マイケルに何かあったのか!？」

ベアトリス卿の息子。マイケルさん。

彼は第3聖騎士団所属でケイン王子やジェフリーさんの部下の1人。

前回の魔物退治で負傷した彼は、奇病に侵されていた。

体の表面の半分が植物の根の様なものに覆われている。

「……不味いな、動き出したか」

ケイン王子が呟いた。

マイケルさんは寝ていないと病気の進行が早まるらしく、少年達に連れられて自室へと戻っていたのだ。

「彼を叱らないで上げて下さい。お兄様。マイケル・ベアトリスは何とか自分で解決しようとしていました。わたくしが下手に手を出してしまったばかりに、こんなことに」

無表情なテレサ姫の顔に、僅かに苦渋の色が滲む。

どう言う事なのかしら？

「お前は良かれと思ってやったんだろう？」

ケイン王子は言った。

「植物タイプの魔物は己の命が危険に晒されると、その生存本能から近くのモノに自分の種を植えつけると聞きます。まさか、それがマイケルの体に埋まっていたとは」

僕の注意が足りませんでした。すみません。と、ジェフリーさんが頭を下げる。

それから、わたしたちは部屋を飛び出したベアトリス卿の後を追って、廊下を走っていた。

ロアンお爺さんも、ついさっきまで眠っていたブライアンさんも、ジェフリーさんに叩き起こされて、一緒に走っている。

「アイツにやられてケガをした奴は何人もいたんだ。でも、マイケルだけ傷の治りが遅かった」

「疲労の蓄積により、体の再生機能が一時的に落ちているのだろう、と言う宮廷医師の診断を鵜呑みにしたのがいけませんでしたね」

ケイン王子とジェフリーさんは走りながら、そんな会話を交わしていた。

「あの時点で専門の医師に見せていれば、こんなことには——クソっ！」

そうやって、ケイン王子は悪態をつく。

テレサ姫はそんな様子の王子をを心配したのか、徐おもむろに口を開いた。

「マイケル・ベアトリスは言っていました。もしかしたら、自分のケガは普通の傷ではないかもしれない。その場合、上司であるお兄様方やそれを見逃した宮廷医師に迷惑がかかるかもしれない、と」

「何だそれ？」

少しイライラとした感じで、ケイン王子が後ろを走るテレサ姫を見る。

「彼は死ぬつもりで、故郷に帰って来たのです。ところが戻ってみると屋根にわたくしと言う邪魔者が居りましたでしょう？……わたくし、事情をよく知る前に彼の傷に治療術を施してしまったのです。そうしたら、突然、傷口から植物の根の様な物が生えてきて」

そして、今のような状況に陥ってしまった、と。

テレサ姫は死のうとしていたマイケルさんを何とか思い留めてみたい。

「わたくし、これほど自分の無謀さを呪った事はありません。彼が命を落とすような事があれば、わたくしも死ぬと、脅させて頂きました。お兄様達が来て下されば、どうにかなるのでは、と思い……ですが、こんなに進行が早いなんて」

「テレサ様、感謝します」

「お前にしては上出来だ！」

ジェフリーさんとケイン王子が言った。

よくぞマイケルを生かしておいてくれた、2人はそのような事を

口々に言う。

「でも、治癒術を使っちゃったのは失敗だったよね。テレサちゃん」

後ろを走るブライアンさんが言った。

まだ眠そうに、目をこすっている。

ブライアンさんの何気ない一言に、テレサ姫はその表情を少し曇らせた。

「魔物の種は、生物の生命力を吸って成長するからのお」
続く、ロアンお爺さんの呟きに、姫はピクリと肩を震わせる。

ファーム

治癒術とは、神に祈りを捧げ、己の生命力や術をかける対象者の生命力を一時的に増幅させる聖術。

だから、ケガや病気の時にはその治りが飛躍的に早まる。

厳密に言えば、ケガや病気の種類によって、使われる治癒術にも違いがあるのだけれど。

ロアンお爺さんの言う事が確かならば、テレサ姫の施した治癒術によって、マイケルさんの体に潜んでいた魔物の種の成長するスピードが速まってしまったことになる。

一見、万能に見える治癒術には、そうした欠点があった。

使い方を一歩間違えれば、それは一変してケガや病気を悪化させてしまうことがあるのだから。

それと、もう1つ。

1度、治癒術を施すと、最低でも1年以上はその人物に同じ術を使えなくなる、と言う事。

だからこの術は、余程の時でない限り、使われることが少ないの。

「わたくし、もう二度と聖術は使いません」

テレサ姫は静かにそう言った。

「ああ、そうしな。女の聖術使いは、なぜか煙たがれる」

「所詮は、男性優位の世界ですからね」

本当、どうして女性が聖術を使うと、変な目で見られるのかしら。

「そうじゃなくて、女が使うと危ないからだろう？」

ケイン王子が言う。

「そんなの詭弁きべんですよ。ケイン様はそんなこと本当に信じていたんですか？」

「え、いや。違うだろう？ ほら、聖術って対象に触れないと使えないじゃないか。だからさ、女性が自ら進んで異性に触れるのはちよつとなあ、ってことだろう？」

何とも古風な考え方だわ。

それなのに言葉遣いが乱暴なのは何故？

「ケイン様。普通それは魔のモノを相手にすることを指すんですよ」
そちらの方が危険でしょう？と、ジェフリーさんが少し呆れたように返す。

「お兄様は男性が聖術をかける際、女性の体に触れるのには問題がないと仰るのですか？ でしたら、それは差別です」

テレサ姫がじつとりとした目で王子を射抜く。

確か少し前に似たような問題で、事件があった気がする。

聖術をかけようとして、男性が女性の胸を触ったとか、触らなか

ったとか。

そのことで、女性の聖術師を国がもっと認めなくては、という話
が持ち上がっていた気がするのだけれど。

「そういう事を言ってるんじゃないやなくてなあ」

ケイン王子が走りながら頭を掻く。

それと同時にパラパラと白い粉が、え、えええ？

ケイン王子……それはライアン・フランシス様のモデル以前に王
子として、大丈夫なの？

そう言えば、昨日、お風呂に入られて無かったわよね。一体いつ
から？

「まったく、ケインはスケベじやのう」

「どうしてそうなる！？」

突然かけられた、ロアンお爺さんからの言葉に、ケイン王子が素
っ頓狂な声を上げた。

「そうまでして、女子おなごの体に触りたいとは……欲求不満な証拠じゃ
の」

「誰が言った？女の体に触りたいだなんて、誰が言ったんだよ！」
相変わらずな物言いだけれど、そうよね。誤解されているんだも
の。

そんな時には口調も多少、荒くなるものだわ。

間違った認識を改めて差し上げないと、ケイン王子の今後の為
にも。

「違いますよ、ロアン様」

そう言えばわたし、ロアンお爺さんを何とお呼びしてもいいのか
分らないわ。

たぶん、ジェフリーさんと同じ呼び方でも大丈夫よね。わたしは
言った。

「ケイン様は男性に触れたいんです。そして触れられたい。間違っても女性なんかには触れられたくない」と

だから女性の聖術師には反対されているのよね。

「ちがーう!!」

わたしの言葉にケイン王子は叫んだ。

「そう言えばケイン様はナサニエルさんと……」

ジェフリーさんが含みのある言葉を呟く。

それを聞いたテレサ姫は、ぱっとわたしを見た。

表情からは、彼女が何を考えているのか、よくわからない。

無表情だけど、少し元気がないようにも見えるし。

「そうだったのですね。ではナサニエル・レイン。あなたの事は兄とお呼びした方が？」

至極真面目な、と言うか無表情だからそう見えるのだけれど。

テレサ姫が後ろを走る、わたしに話しかけてくる。

「お前ら、ふざけるなよ」

ケイン王子が声を震わせて、わたしたちに言った。

その一言で、一気に膨れ上がった不穏な空気に気付かず、それとも、わざとなのかしら？

ブライアンさんが口をはさむ。

「ナサニエル君は僕と同じような可愛い系だもんね。ケイン君が血迷ったとしても納得だよ」

一番後ろから、ヨタヨタついてきていたブライアンさんが、笑顔でそう言っただけだ。

それが止めだったわね。

「お前ら全員。絶対、叩き斬ってやる！」

ケイン王子はそう宣言して、剣を手に、わたしたちを振りかえった。

けれど、それは振り下ろされることなく、ジェフリーさんの言葉で再び鞆に収まる事になる。

一足先に目的地に到着したジェフリーさんは息をのんで、こう言った。

「ケイン様、どうやら遊んでいる場合じゃないようです」

応接室を出て、廊下を走り、玄関ホールから2階へと続く階段を駆け上った。

そして、扉が開かれた一室に、彼らは居た。

広い室内。

奥にあるベッドの横には大きな窓。

そこから見える薄っすらと明るい空は、夜明けを告げている。

その景色をバックにして、蠢く何か。

扉の近くで呆然と佇んでいるのは、数人の少年達とベアトリス卿だった。

「……マイケル」

口から零れ出たベアトリス卿の呟きは、その名前の持ち主には届かない。

マイケルさんの母親譲りであろう紫色の瞳は固く閉ざされたまま。2度と開く事はないのかしら……。

彼の体を動かしているのは左半身の……魔物。

「マイケルさんは……」

死、わたしは浮かんだ言葉を飲み込んだ。

だってマイケルさんの顔色が凄く悪い。青白くて精気が無い。

マイケルさんの体を覆っていた植物性の魔物は、ウネウネとその根を伸ばし、辺りを物色していた。

その伸びた根の先には縛られ、動けなくなっている数人の少年達の姿が。

「大丈夫じゃ、まだ間に合う」

絶望した空気が漂う中、ロアンお爺さんが言った。

「今、マイケルに巢食う魔物は開花する為のエネルギーを探してある所じゃ。マイケル1人の力では恐らく足りなかったのじゃろう」

「それでは、マイケルは？」

ロアンお爺さんの言葉にジェフリーさんが問いかける。

「安心せい。まだ生きとるわい。マイケルが死ねば、あの魔物も死んでしまうのでな。殺さん程度に生かしておるのじゃろうて」

それならば、マイケルさんは言わば仮死状態と言う事かしら。

でも、早くなんとかしないと。

わたしに何が出来るわけでもないのに、気持ちだけが焦る。

魔物、魔物だなんて、凶鑑以外で初めて見るもの。

実物がこんなに凄まじいなんて思ってもみなかった。

対峙しただけで感じる、この言い知れぬ不安感は何？

「髭じじい！マイケルを助ける方法は！？」

勿体ぶらずにさっさと見えよ、と、乱暴な言葉を吐き捨てるケイン王子。

目の前の現状に焦っているのは、わたしだけではないのね。それもそのはず、だってヒト1人の命が、かかっているんですもの。

「マイケルの体から、あの魔物を切り離すのじゃ。それしか方法はない」

「いや、だから、それをどうやんのかって聞いてんだよ！このクソじじい」

ケイン王子、いくらなんでもクソは、ないのではないかしら。思っても、口にははいけない言葉の1つよ。

ケイン王子の暴言をものともせず、ロアンお爺さんは続ける。

「そうじゃな、マイケルにありったけの聖力を注ぎ込む。そうすれば魔物はそれを嫌って彼から離れていく」

「なんだよ、それなら楽勝だ！」

ロアンお爺さんの話を聞いて、そう言ったケイン王子は、早速、マイケルさんとそれに取りつく魔物に近づこうとする。

「ケイン、待て。話はまだ終わっておらん。まったくお前と言う奴は……人の話は最後まで聞くもんじゃ」

ここからが、重要なポイントなんじゃから、そう言ってロアンお爺さんはケイン王子の頭を叩いた。

「いいか、よく聞け。まずは根に捕まっている少年達を解放する。その前に聖力に自信のない奴はこの部屋から避難してもらうしかな

いのう。奴も生きなくてはいかんからな。そう簡単には離れてくれんぞ。並大抵の聖力では話にならん。しかも逆に寄生される可能性がある。一番に狙われるのは聖力の少ない奴じゃ」

その言葉を聞くや否や、ブライアンさんが聖術を唱え始めた。

……え？

確かそれは補助術の1つ。シールド。

その術がかかっている間は、ある程度の物理攻撃を防いでくれる。言わば見えない盾。

ブライアンさんは聖言を唱え終わるとジェフリーさんに近づいて、彼に触れた。

『——シールド』

その声と同時に、ジェフリーさんは部屋の奥へと飛び出した。手にはスラリと伸びた剣。

あれはわたしの首を切った時と同じもの。

「がんばってね。ジェフリー君」

ブライアンさんは魔物と対峙したジェフリーさんの背に手を振って、他のみんなにもシールドの術をかけ出した。

「わたくしは、あまり聖力が強いとは言えませんが、この子達を避難させます。みなさん、速やかに退去してください」

テレサ姫が声を上げる。

その間にジェフリーさんは、伸びてくる触手の様な根っこを、剣で切り刻みながら、少年の1人を救出した。

「この子をお願いします」

そう言って、ジェフリーさんが気を失っている男の子をコチラに

投げてよこす。

「あ、あああ」

わたしは竦んでいた足を何とか動かして、その少年を無事受け止めることが出来た。

それから、青ざめた表情で気を失っている男の子を、テレサ姫に託す。

他にわたしに出来る事は……？

辺りを見回すと、わたしたちが部屋に踏み入れた時の状態まま、動こうとしないベアトリス卿が目に入った。

「ベアトリス卿もお早く。ここはお兄様達にお任せして」
テレサ姫の言葉に反応を示さないベアトリス卿。

「ナサニエル君、この子もお願い」

ブライアンさんはいつの間にか、みんなにシールドの術をかけ終わり、今度はジェフリーさんの少年救出を加勢していた。

「投げるよ」

相変わらず、呑気で気の抜けるような口調のブライアンさん。

でも、彼は空気が読めないだけじゃなかったのね！

意外にも出来る人物だったなんて。

「おーらい」

わたしはそう言って、投げられた少年を両手で受け止めた。

これで、あの根っこの魔物に捕まった少年は後、1人。

みんな顔色は悪いけれど、息はしている。

マイケルさんに取り付いた魔物は、それほど力の強いものではないらしい。

けれど、その分、生命力が凄いと言う。

「権力にしがみ付こうとするどっかの馬鹿貴族や、玉の輿を狙う恐ろしい女の様なしっこさだ」

と、ケイン王子はそう明言した。

「わたしがやる。わたしにやらせてくれ！」
ベアトリス卿は言った。

マイケルさんの自室だった部屋は、様々な家具が散乱している。
魔物の根が辺りを這いずり回った所為と、その根を次々と斬り落
としているジェフリーさんとブライアンさんの所為もある。

本体から切り離された魔物の根っことは朽ち果てて、灰のようにな
り、それが赤い豪華な絨毯を汚していた。

ようやく、魔物の根から捕まっていた少年達を救出し、彼らを避
難させ、ここに残ったのは、ベアトリス卿となんちゃって聖騎士団
の黒髪の少年が1人。

わたしたちを呼びに来た男の子。なんと、彼は聖術が使えるらし
い。

それから、この屋敷の住人以外では、ケイン王子率いる、わたし
を含めた男性陣。

つまりはテレサ姫以外すべて、この部屋に居る。

テレサ姫はケイン王子の説得により、屋敷の外へと避難させられ
ていた。

姫は最後まで、この場に残りたがったのだけれど。

その逆にわたしはと言うと、情けない事に、出来ることなら姫た
ちと一緒に避難させてほしかった。

だって、役に立てるとは、とてもじゃないけど思えないもの。

わたしだって『聖なる騎士物語』のナサニエル・レイン見たいに、恰好よく決めたい気持ちはあるのよ。

ケイン王子の手足になって活躍したい。それこそ、ブライアンさんみたいに。

普段、あれだけ空気の読めないキャラのブライアンさんは、ウソみたいにジェフリーさんと息のピッタリ合ったコンビ振りを発揮していた。

厄介払いだなんて、そんなこと思って、ごめんなさい。

一番の役立たずは、このわたしね。

そんなわたしに、ケイン王子が言う。

荒れ狂う部屋の中、茫然と何をしていいのか分らず、ただ佇んでいるだけのわたしに。

「お前もテレサたちの所に行くか？」

「え？」

それは何とも優しい声だった。

別にそれはわたしに対する嫌味とかではなくて。

そう、ただ心配してくれている。

こんなに情けないわたしに、ケイン王子は言った。

「お前、こういうのは初めてなんだろう？無理するな。ここは俺達で何とかするから」

「ケイン様……」

開花する為の力を求めて、部屋中には魔物の根が伸びていた。

早くしないとマイケルさんの体力が持たない。

彼の代わりに魔物に力を与えていた少年達は、もういないから。

「それはダメじゃ。彼にはここに残ってもらわんと」
わたしたちのそんな遣り取りに、気付いたロアンお爺さんが横から口をはさむ。

ロアンお爺さんは、その手に銀色の淡く光る杖の様なものを持っていて、先端を襲ってくる根に翳^{かざ}し、どういう原理か、それを枯らしていた。

ケイン王子は頭上から迫ってきていた根を、ジェフリーさんのやり刃の広い剣で薙ぎ払う。

「何だよ、髭じい。コイツはたぶん、聖術だって、まともに使った事ないんだぞ！」

そんな奴に行き成り実践なんて無理だろう、と王子が叫ぶ。

……どうして、そんなことが分るのかしら。

わたしは何も言わなかったのに。

どちらかと言うと、聖術を使えるようなふりをしていた。

聖騎士になるのには、そっちの方が有利だと思っていたから。

もしかして、その事を知っていたから、わたしに聖術を使わせなかったの？

ジェフリーさんに試されるように言われたあの時に。

「この先、彼の力が必要になる」

「なんだよ、それ」

ロアンお爺さんの言葉に、ケイン王子の声がオクターブ下がった。

「お前さんだけでは無理じゃ。ケイン」

「そんなの、やってみなけりゃ、わかんないだろう？」

ケイン王子は鼻で笑った。

けれどロアンお爺さんは王子の言葉に首を振る。

「ここまで成長した魔物を取り除くのに、必要な聖力はお前さんの想像を遙かに超えとるんじゃないよ」

「コイツが、ナサニエルが色持ちだからか？」

ケイン王子が静かに言った。

色持ち……それは「奇跡の色」の保有者を下げずむ言い方だわ。

でも、違う。違うわよね。ケイン王子はそう言う意味で使ったんじゃない。そうよね？

持つ者と持たざる者。神の色は敬うべき対象だけれど、人の心はそんなに単純に出来ていない。

力がある者を妬む気持ち、それから己が敵う事のない恐怖。

大抵の人々は「奇跡の色」に好感を持っている。
けれど、そうじゃない人もいる。

そんな人たちは、色という言葉の様々な意味合いをもってして、
わたしみたいな人間を「色持ち」とそう呼ぶの。

その姿で人心を惑わしている、なんて。

ケイン王子は、そんな事、思っていないわよね。

「色持ちだからって、怖がってるコイツを、このままここに置いとくって言うのか？」

ケイン王子は震えるわたしの肩を、そっと包み込むようにしてくれた。

わたし、自分でも気づいていなかった。
……わたし、震えていたの？

どうしよう。恥ずかしい。

こんな事じゃ、聖騎士になんてなれっこないじゃない。
小さい頃からの夢なのに。

嫌よ。嫌。そんなの嫌。

わたしは決めたんでしょ。誓ったじゃない。

聖騎士になって、ケイン王子を立派なライアン・フランシス様に
して見せるって！

モデルなんて言わせないわ。元祖よ。元祖ライアン・フランシス
様！

ふっふっふっふ。

この時、わたしは頭のネジが弾け飛んでいたんだと思うの。

恐怖心が過ぎて、臨界点を突破して、飽和状態。

頭の中は真っ白で、フワフワと現実感がない感じ。

体から魂だけが抜け出して、勝手に動く自分を傍から見ているよ
うな感覚。

頭が空っぽのわたしに残っていたのは、この5年間で培われた、
深い深いライアン・フランシス様への愛だった。

「ナサニエル！行きます！！」

「お、おい。お前……」

わたしは勢いよく両手を振り上げた。

そう、わたしの腕はまだ縛られたままだったのよ。
これじゃあ、上手く身動きが取れないでしょう？

この状態のまま、子供を受け止めたり、非難させたりしてたんだから。

褒めてくれたって構わないのよ。

振り上げた両手の先には、鋭く尖った魔物の根の先端が……わたしを目がけてやってくる。

その軌道に上手い事、縄のつなぎ目を合わせた。

わたしの動体視力をなめるんじゃないわよ！
バッスン直伝、投げナイフで培われた能力なのだから。

——ブツン。

と、縄の切れる音がして、自由になった手で、わたしは向かってきた その根を払いのける。

痛あーい。

見た目で柔らかさそうだと判断した魔物の根は、涙が出るほど硬かった。

それはそうよね。縄が切れるぐらいなんだもの。

「ケイン様、痛いです」

「当たり前だ！ ナサニエル！！ 素手で戦うやつがあるか！」

わたしの手に弾かれて、軌道をそれた根が、再びコチラへと向かってくる。

それをケイン王子が剣で叩き落とした。

「ほら、これ使え」

そう言っ、ケイン王子が投げ寄越したのは、綺麗な装飾が施された短剣……ではなく、なんの変哲もないただのナイフ。

「それ、大切なもの何だから、使い終わったら返せよ。一応、それも聖器だ」

——聖なる武器。

己の聖力をこめることで、魔のモノたちを滅する事が出来る武器。

「あ、ありがとうございます！」

わたしがそう言っ、頭を下げると、ケイン王子は言っ、

「お前、本当にいいんだな？」

何がいいのかなんて聞かない。

聞く必要はないもの。

わたしは逃げない。戦うっ、決めたんだから！

「はい！」

「お前がいいなら、俺は何も言わない」

「はい！」

「行くぞ、ナサニエル！」

「はい！」

ああ、これっ、夢のよう。

わたしとケイン王子は、まるでペアみたいじゃない？

そう、物語から飛び出してきた、ライアン・フランシス様とナサ

ニエル・レインのような。

よかった。勇気を出して。

よかった。わたし、男の子で。

もし、女の子のままだったら、今、この現場に立ち会う事は出来なかったもの。

……でも、それにしても痛いわ。

先ほど、魔物の根を振り払った右手の甲がヒリヒリしている。
わたしの場合、すぐ治るのだけれど。

右手が利き手なのよねえ。

ケイン王子から貸してもらったナイフは、暫く使えそうもない。

迫ってくる魔物の根を粗方駆除したわたしたちは、マイケルさんに聖力を注ぎ込む段階に移る。

そこで、ベアトリス卿が名乗りを上げた。

「わたしがやる。わたしにやらせてくれ！」

ベアトリス卿は、青ざめた表情で声を上げる。

「マイケルは……マイケルを助けなくては」

そう言っつてその場に崩れ落ちる、ベアトリス卿を黒髪の少年が支えた。

本来なら、ベアトリス卿はみんなと一緒に避難するべきだった。

彼の聖力はそれほど、強くないのだから。

けれど、息子の傍に居たいと言う彼の願いを、聖術が扱える少年が一緒なら、という条件で、今、この場に残っている。

「お主の聖力では無理な話じゃ、クリストファー。ここは こ奴らに任せるがいい」

ロアンお爺さんはそう言って、わたし達を見る。

こちらは気にせず、早く作業に取り掛かれ。

口には出さなかったけれど、ベアトリス卿を宥める傍ら、こちらに振り向いたお爺さんは言外にそう語っていた。

「——おい、行くぞ」

ナサニエル、そう呼ばれて、振り向くとケイン王子が近くに居た。わたしが返事をする為に口を開くと、部屋の奥から声がかかる。

「おゝい。こっちは準備できたよおゝ」

ブライアンさんだ。

魔物の動きを封じたブライアンさんがコチラに向かって、手を振っている。

その横にはジェフリーさん。

まったくの無傷の彼は、傷だらけのブライアンさんとは対照的で、その額には汗も浮いてないんじゃないかしら。

ケイン王子もわたしも無傷には代わりないんだけど、もう汗だくだった。

だって360度、いろんな角度から、根っこが迫ってくるんだもの。

幸い、わたしは聖力が強いから、あまり狙われずには済んだだけで。

残念なことに、わたしの勢いは最初のうちだけだった。

だって、怖いものは怖いんだもの。

せまってくる根っこに、殆ど逃げ回っていたの。

力を蓄えるために、人間を捕獲しようとしていた魔物は、自分の体が傷を追うごとに、わたしたちを排除しようとその形態を変化させていた。

ちょっと硬めの根っこから、すごく硬い根っこに。

もう、先は尖がってるいし、しなやかな鞭のようだったそれは、今は木の棒みたいに硬質なの。

動きも素早くなって、それまでケガのなかったブライアンさんはお蔭で傷だらけ。

でも、誰も寄生はされていない。

今の段階ではマイケルさんの様に種を植えつけられる心配はないらしい。

だって花が咲いて実がつかないと、種は出来ないからね。

マイケルさんは本当に運が悪かったのだと思う。

わたしはそんな根っこから逃げ惑いながら、少し余裕が出来る、この中で一番、標的になりやすいベアトリス卿に向かっていくそれ

に、ケイン王子から借りたナイフを投げつけ、なんとか応戦していた。

遠くからの射る。

それがナイフ投げと言うものよね。

「ナサニエル！お前、人が貸した物を投げるなよ！それ、大切な物だと言ってたろう？」

ケイン王子はちよっぴり涙目になりながら、そんなことを叫んだ。

わたしは灰になった根っこの残骸からナイフを素早く回収、そして再び戦線離脱。

根っこが届きそうにない所まで、後退する。

「お前、人の話を聞けー！」

日頃、自分が散々人様から言われているであろう言葉を、わたしに浴びせながら、ケイン王子は魔物と戦っていた。

ジェフリーさんは余裕で、ブライアンさんは何故か自ら迫りくる根に向かって行っているように見える。

「あ、あれ？こっちに来た！」

うわぁなんて叫びながら、ブライアンさんの傷がまた1つ増えた。

わかったわ。ブライアンさんって空気が読めないから、魔物の動きも読めないんだ。

ジェフリーさんはそんなブライアンさんを上手い事、盾として使っている。

この中で一番恐ろしいのは、魔物よりもジェフリーさんかもしれない。

——部屋の隅。

マイケルさんの左半身を覆っていた根は、その範囲を広げて、まるで大木の幹の一部みたいに、しっかりとそこに根付いていた。

意識のないマイケルさんの体は、魔物の根でその殆どが、表から見えなくなっている。

唯一こちらから確認できるのは、洞うろのような場所から覗いている青白い顔だけ。

一体、魔物のどこに、そんな力が残っていたのだろうか？
花を咲かせる為、足りない力を集めていたというのに……こんなに成長するものかしら。

魔物の事は、よくわからない。

日がな一日、お父様の書斎で読書に励む事もあったけれど。

そこにあった『魔物の凶鑑』に、そんな記述はなかった。

それに『聖なる騎士物語』に出てくる魔物に植物タイプなんて、いなかったもの。

もし、物語の中に登場していたら、きっと調べつくしていたのに。

けれど、わたしの疑問はロアンお爺さんによって、解消された。

わたしたちの攻撃によって危険を感じた魔物は、開花に備えていた力を自己防衛に切り替えたのだと言う。

急成長の原因は自分の核を守るため。

その核はマイケルさんの中にある、だからそれを隠すように……。

マイケルさんは大丈夫よね？
まだ、ちゃんと生きているわよね。

逸る気持ちを抑えながら、わたしたちは作業に取り掛かる。

ブライアンさんは魔物の動きを封じる役目。

聖術で一時的に眠らせておくらしい。

マイケルさんに聖力を送る際に、邪魔されないように。

ジェフリーさんはもしも魔物が動き出した時の為の保険。

聖器を携え、近くで待機している。

聖力を扱う時には集中力が必要で、その間、とても無防備な状態になるから。

そんな時に襲われたら、ひとたまりもないもの。

そして、肝心のマイケルさんに聖力を注ぎ込むのは、わたしとケイン王子の仕事となった。

どうしてそんな大役を、聖術も使った事のないわたしが仰せつかったのか。

その理由は単純明快で、この中で最も聖力が強いのが、なんと、わたしだったから。

その次がケイン王子らしいの。

今まで調べたことはなかったけれど……ロアンお爺さんは聖力を

測る機器がなくても、大体の力量がわかるんですって。

だから、大したことも出来ない、力の使い道もしらない、聖騎士でもないわたしがこの場に引きとめられた。

よく考えてみたら、わたしって部外者だものね。

そんな理由でもない限り、今のこの状況はあり得ない。

力が有る者が居た。だから、それを使う。ただ、それだけの事。ケイン王子が言っていた「色持ちだから」には、そんな意味が含まれていたのね。

聖力が強いというだけで関係ない者を巻き込んでもいいのか、ケイン王子はそう言っていたんだわ。

わたしたちは、ブライアンさんの聖術によって動かなくなった魔物に近づいた。

そして、お互いを見つめ、頷き合う。

わたしは左から、ケイン王子は右から、それぞれ冷たくなっているマイケルさんの頬に手を触れた。

……大丈夫。きっと上手いく。

聖術を注ぐのは、初めてじゃないんだから。

この館に侵入する為に使った首飾りでは、成功したんだもの。

……大丈夫、大丈夫。わたしはきっと出来るわ。

そう自分に言い聞かせていると、何故かケイン王子が隣で噴出した。

「お前でも緊張したりするんだな」

え、そんなの当たり前じゃない。

こんなこと緊張するに決まってる。

「言わないんだな」

……え、何を？

わたしが訝しげな顔を向けると、ケイン王子は続けた。

「絶対、言うと思ったんだが」

だから、何を？

こんな時に、謎かけ？ 謎かけなの？

わたしにはケイン王子のお遊びに付き合っている余裕なんてないのよ。

もう、一杯一杯なんだから。

ぷいっと顔を背けたわたしの耳に、その言葉は飛び込んできた。

「愛の共同作業」

な、なんですって。

ケイン王子、今なんて？

「お前のこれまでの言動から、そう言うかと思ったんだが」

わたしの視線の左斜め上、45度の視界にケイン王子の素敵な笑顔があった。

笑った。笑ったわ。

ケイン王子が、わたしの隣で笑ってる！？

これまでの短い付き合いの中、一度も見た事のなかった笑顔。そう、純粹な。

苦笑いとか、嘲笑うとか、不敵な笑みだとか、そう言うものでは無くて、ただの笑顔。

そう、ケイン王子に足りなかったのはスマイルだったのよ！

ああ、笑顔であれば言葉遣いが、どうかなんて気にしないわ。だって、素敵なもの。

ライアン・フランシス様は別名、微笑みの貴公子で在らせられますことよ！

それに、それに、なんなの！？先ほどの、あの言葉は……愛の共同作業！？

その顔で、その声で、言ってしまったわね。

ああ、もう、なんて——し・あ・わ・せ。

誰か、誰か。有名な画家を連れてきてちょうだい。

この眼福な現象を一枚の絵に留めておくのよ！

タイトルはもちろん『愛の共同作業』。

願わくばその声も一緒に記録しておきたいけれど、そんな技術はどこにもないし。

せめて、わたしの脳内に保管しておくしかないわね。

ケイン王子の笑顔と共に、わたしの頭の中で繰り返される映像。いつもなら、それがライアン・フランシス様へと変換されて、わたしの記憶に残るはずなのに。

あら？おかしいわ。おかしいわね。

何……この、胸の高鳴りは。

動機に息切れ、それから、眩暈までしてきたわ。それに、胸が苦しくて、ぎゅっとするの。

でも、今はマイケルさんを助けないと。

深呼吸をして、少し落ちつきましよう。きっと緊張し過ぎているのよ。

「ナサニエル……お前、大丈夫か？」

鼻息が荒いぞ、だなんてケイン王子。

それは事実でも、女性に言っではいけない言葉だわ。鼻息だなんて。

まあ、今は男だけだ。

その言葉で、わたしは妙に落ち着いてしまった。

おかげで、すんなりと、わたしはマイケルさんに聖力を注ぐ事が出来た訳だけど……。

隣で聖力を送りながら、目を閉じているケイン王子の横顔をチラリと盗み見る。

すると、先ほどの笑顔を思い出して、急に顔が熱くなった。

「ナサニエル、聖力が乱れとるぞ」

意外にも、近くから聞こえたロアンお爺さんの声に、わたしは慌てて、作業に集中する。

目を閉じて、呼吸を落ち着かせ、体の中心に感じる力を自分の手から、マイケルさんの体へと流し込むイメージ。

すると、ゆるゆると、何かがその道順を辿って動いて行くのがわ

かる。

そうしてしばらくしていると、ある変化が起きた。

今まで動く事のなかった魔物が蠢きだしたのだ。

わたしは驚いて、思わずマイケルさんから手を離しそうになったけれど、それはどうにか　こうにか思いとどまる事が出来た。

「いい調子じゃぞ。あともう少しじゃ」

ロアンお爺さんの声が聞こえる。

わたしはもう一度、意識を集中させた。

まだ、わたしの中の聖力は尽きていない。

……よし、もう少し。

頑張るぞ、と気合を入れた途端。急にマイケルさんが苦しみ出した。

わたしは怖くなって、今度はその手を離してしまう。

「続けるんじゃ」

「でも！」

瀕死の状態のマイケルさんに、これ以上、苦痛を与えるなんて。

わたしはロアンお爺さんを振り返る。

「他に方法は！本当にこの2人に任せてマイケルは助かるのか！？」

そこにはロアンお爺さんに詰め寄るベアトリス卿の姿があった。
……その通りよね。

ケイン王子ならまだしも、見ず知らずのわたしなんて信じてもらえる訳がない。

マイケルさんを助けたい気持ちはあるけれど、それはどうしてかしら。

ここで活躍しておけば、聖騎士になれるかもしれないから？

けして、そんな理由じゃない。ただ助けたいだけ。

だけど、こんなに辛そうなのに、これ以上、続けてもいいの？

マイケルさんが苦しんでいるのは、わたしの聖力の送り方が間違っているからではない？

……わたし、自信がないわ。

マイケルさんを覆っていた魔の根は、その殆どが体から離れ、今は彼の左足から床一面に広がっている。

そして、今までは見える事のなかった傷口から、溢れ出す血と、蠢く根が彼に苦痛を与えていた。

眠っているはずなのに、動く魔の根は注ぎ込まれる聖力から逃れようとしている。

でも、それと同時に、マイケルさんの体力も削られていく気がする。

このままじゃ、彼は持たないかもしれない。

ベアトリス卿の言うように、他に方法はないのかしら。

マイケルさんに負担をかけることなく、魔物だけを退治する方法が……そうよ、浄化術！

浄化術は魔物に影響を与える術。だから、人体に影響が及ぶ事はない。

それなら、ちゃんと聖術を使える人が確実に仕留める事が出来る。

「ロアン様、浄化術を使っは？」

傍に控えていたジェフリーさんが言う。

わたしも今、そう言おうと思っていたの。

「今はまだ駄目じゃ。魔物の核が完全にマイケルの体から離れてからでないと、彼の体にその核が残ってしまう。そうなれば、また同じことの繰り返しじゃ」

いい考えだと思ったけれど、ロアンお爺さんに否定されてしまった。

「マイケル……」

そう呟くベアトリス卿の声に、僅かにマイケルさんが反応する。

どうしよう……このまま続けるしかないの？

続けたとして、マイケルさんを助ける事が出来るのかしら。

わたしなんか……。

「ナサニエル。大丈夫、上手くいくさ」

ケイン王子が言った。

「俺は……もう二度と自分の目の前で、命が消える所を見たくないからな。何が何でも助けて見せる。こいつを、な。まあ、あんまり信用してもらえてないみたいだが、一応、俺の部下だし」

わたしとは違って、マイケルさんに聖力を送り続けていたケイン王子。

そうよね、このまま。何もしないままでは、いけないわ。

これしか方法が無いんだったら、やるしかない。やらなくちゃいけないんだから。

わたしったら、何を弱気になっていたのかしら。

このままじゃ、ナサニエル・レインの名が廃る。

ケイン王子のことをライアン・フランシス様のモデルに相応しくないなんて、言えなくなっちゃう。

よし。気合を入れなおしたわたしは、隣のケイン王子を見た。

目が合うと、さっとその視線を逸らされる。

——奇跡の瞳。

ケイン王子の瞳の色が普段の色合いから、赤へと変わっていた。

「……その、目」

わたしの眩きは無視されて、再び王子は目を閉じる。

ケイン王子が「奇跡の瞳」を持っていたなんて。

そこまで、ライアン・フランシス様と同じなの？

強い聖力を使用することで生じる瞳の変化。

どうしましょう。一瞬とはいえ、本物を間近で見てしまったわ。

ああ、もう一度、じっくり観察したい。

「ナサニエル君、早く。魔物をこれ以上、眠らせておくのは無理だよ」

起きちゃう、起きちゃう、早くして！そう言うブライアンさんの声に、はっと我に返る。

いけない。今は集中しないと。

再び、今度は魔物の根が飛び出しているマイケルさんの足元に、手を添える。

なるべく近くから送った方が、魔物も嫌がるのではないかしら？そう思ったの。

「ぐっ……くう……あ……うあ」

程無くして、マイケルさんの口から漏れだす苦悶の声。

マイケルさんは意識を取り戻したのかしら？

それから、彼の足があり得ない形で波打ったかと思うと、その傷口から、何かが飛び出した。

マイケルさんの血で染まった、脈打った拳の様な塊がなんとも気色が悪い。

植物の種と言うよりは、まるで何かの臓器の様な、それ。

核が抜けて、支えを失ったマイケルさんはその場に崩れ落ちる様に倒れた。

そこへ、ベアトリス卿と黒髪の少年が駆け寄ってくる。

彼らは倒れたマイケルさんを抱き起こし、そして、よかったと涙を流した。

その様子を、暫く満足そうに眺めていたケイン王子は、

「やったな」

そう言って、わたしの頭をクシヤクシヤとかき混ぜる。

その王子の何気ない行為に、わたしの頭はパニック寸前。

や、やだ。何これ？

ケイン王子は、疲れたと言いながらも、マイケルさんから離れた魔物の処理に足を向ける。

聖力を使い果たしたわたしたちに、殆ど出来る事なんてないのに。聖術も使えなければ、聖器だって使えないんだから。

けれど、わたしはそんなことよりも、ケイン王子に対する自分の反応に戸惑っていた。

……こ、これが噂に聞く、恋のトキメキ。

ライアン・フランシス様を慕う気持ちとはまた別の、何と言うかキュンっと胸の奥が締め付けられるような、この感情。

どうして、ケイン王子なんかに。

彼はライアン・フランシス様では無いのよ！

外見は、まあ、似てるけれど。中身は違うもの。

わたしは見た目に騙されたりしないんだから。

愛そうとは思っていた（死なれると困るし）けれど、こ、恋。恋って言うのは、あれよね。

相手の一挙一動や、その言動に一喜一憂してしまうと聞く、あれ

のことよね。

恋も愛の始まりだけれど、愛には色々と種類があって、友愛とか博愛とか人類愛とか色々。

わたしのケイン王子へ対する愛はたぶん、博愛みたいなものだったのよ。

それがいつの間に、こんな事に。

こ、これじゃあ、わたしの計画が難しくなるじゃない。

だって、恋すると相手に触れる度に、恥ずかしいとか。

こんなことをすると嫌われちゃうかも、とか、色々と気にする事が増えるのよ。

ダメよ、ダメ。それは却下。

わたしには使命が！

神に与えられた使命があるんですから。

ケイン王子を立派なライアン・フランシス様にするという使命がね。

ここまで、リアルライアン様なケイン王子を、このまま野放しにしておけないわ。

きっと全国のライアン・フランシス様ファンの女の子たちは、わたしと同じように触って確かめられる彼を求めている。

そう感じるの。

だから、ダメ！

恋心なんて封印して、今はその目標に向かって突き進むのよ、エルザ……じゃなくて、ナサニエル！

わたしがそんな葛藤をしていると、視界の隅に何かがよぎった。

「危ない！」

わたしは咄嗟に、その軌道上に飛び出す。

瀕死状態の魔物の根が、ベアトリス卿を目がけて動いたのだ。

何も考えずに前に出てしまったわたしは、取りあえず懷に仕舞っておいたはずのナイフを探した。

ケイン王子から借りた聖器のナイフ。

聖力を籠めていない聖器なんて、普通の武器と殆ど変わらない。今のわたしに注ぎ込める聖力なんて、ほんの少ししか残っていない。

だけど、それでも、魔物の根を滅することはできなくても、進む方向ぐらいなら変えられるはず。

そう思って、黒装束の前方についた隠しポケットに手を入れてみるけれど、見つからない。

……あ、あれ？ない。どこにやったのかしら？

仕舞っておいたのは、ズボンのポケットだったのかも。

急いでズボンの両サイドを探るけれど、そこにもないみたい。

どうしよう。鋭い根の先がすぐそこに迫っていた。

もう、ダメ。わたしは咄嗟に目を瞑ってしまう。

最初の時みたいに素手で応戦しようなんて考えられなかった。

誰だって痛いのは怖いでしょう？

何もしないよりは、そうしておけば良かったなんて、それは後から考えた事。

後悔というものは、頑張っても先には出来ないんだもの。

ナイフが見つからなかった時点で、わたしは軽いパニック状態だった。

これも後から思ったんだけど、飛び出す前にちゃんとナイフがあるのか確認しておけばよかったのよ。

逃げたい。逃げ出したい。

でも、わたしがこの場から退くと、後ろに居るベアトリス卿たちはどうなるのだろう。

わたしはその場で、なるべく痛みがありませんように。そう祈りながら、ただ目を閉じてじっとしているしかなかった。

それしか思いつかなかったんですもの。

けれど、それからしばらくしても、襲ってくるはずの衝撃はなかった。

……あれ？痛くない？

恐る恐る目を開けてみる。

すると、そこには苦笑いするケイン王子の顔。少し顔色がおかしい気がするけれど。

王子の顔が凄く近い。

だ、ダメですよ、ケイン王子。

人様の前でキスするなんて、わたしにはできません。

まあ、それこそわたしの日課は、ライアン・フランシス様（肖像画）に接吻する事でしたけれど。

それとこれとは話が随分と違ってくるものです。

それに、そんなに近寄られても、わたし、まだ心の準備が……。

欲求不満が溜まっていらっしゃるのかしら、ケイン王子。

でも、今は状況をよく考えて行動して下さい。

そんな場合ではなく、わたしは魔物に狙われたベアトリス卿をお助けしなくてはいけないの。

それとも、これは夢？ 夢なのかしら？

「馬鹿……ナサニエル、お前……飛び出し、といて……目、瞑ってんじゃねえ、よ」

なんですって。馬鹿はケイン王子よ。

人様に向かって馬鹿って言う人が馬鹿なんですからね。

と言う事はわたしも馬鹿と言うこと！？

そんな馬鹿なって、わたしったら本当に馬鹿だった。

よく考えて、どうしてケイン王子がわたしの前に居るのか。

そんなこと、すぐに分ったのに。

本当に情けない。情けなくて、泣けてくるわ。

途切れ途切れな言葉を残して、ゆっくりと崩れ落ちるケイン王子

の姿を見るまで、自分が助けられた事に気がつかなかった。

——う、そ。

ケイン王子の胸から突き出ているそれは何？

灰色で、鋭く尖った木の根の様な……それ。

わたしは倒れたケイン王子の体を何とか受け止めた。

そのまま床に座り込む。

部屋に敷き詰められた赤い絨毯、それからわたしの黒い衣服が、実際の色よりも濃く、染められていく。

膝に感じる生ぬるい感触。

それが王子の体から流れ出る度に失われていく、彼の顔色。

やめて、嘘よ。

これでは立場が逆ではないの。

ナサニエル・レインはライアン・フランシス様を庇うのよ。

それなのにどうして？

倒れているのはわたしではなく、ケイン王子なの？

馬鹿よ、馬鹿。ケイン王子は本当の馬鹿。

ガキは嫌いだって言ってたじゃない。

ううん、人間が嫌いなんだって。

でも、そんなことをいいながら、一番面倒見がいいのはケイン王子、あなたよ。

自分の目の前で、命が消える所を見たくない、だなんて。

カッコつけて、自分がそれをして、どうするのよ。

わたしだって見たくないわ。

だって、そんなの辛すぎるもの。

「ケイン、さま？」

わたしの喉はカラカラで、出てきた言葉は掠れていた。

「ケイン！」

王子の名前を叫び、ジェフリーさんが魔物の残りをその一太刀で処分する。

ジェフリーさん、焦り過ぎて敬称を忘れているわ。

「ケイン君！！」

念には念をと、ブライアンさんが朽ち果てた魔物の残骸に浄化術を施し、こちらへと駆けてきた。

これで、もう大丈夫ね。魔物は退治された。

「……ケイン、お兄様？」

すぐ後ろからテレサ姫の声がした。

彼女は何故か、この部屋のクローゼットから姿を現した。

手にはペンとメモ帳がしっかりと握られている。

屋敷の外に避難されたはずよね？

ずっと、そのクローゼットの中にいらしたのかしら。

テレサ姫はヨロヨロとこちらに近づいてくると、その表情を崩した。

「しっかり、しっかりして下さい！お兄様！！」

ああ、どうしましょう。涙で視界がはっきりしない。
目の前には血まみれの王子。それから、それに泣き継るテレサ姫の姿が。

……表情の乏しい姫が泣いている。

ケイン王子、あなたの妹様が泣いているわ。
寝てないで、そろそろ起きたらどうなの？

「――ナサニエル」

そう、呼んでくれたのがケイン王子ならよかったのに。

最初、自分が呼ばれている事に気がつかなかった。

……そうだったわ。わたしはナサニエル・レイン。

「ナサニエル」

ロアンお爺さんがもう一度、その名前を呼んだ。

わたしは声ができる方へゆるゆると顔を上げる。

視界の先には毛むくじゃらのロアンお爺さんと、青い顔をしたジエフリーさん。

それから大きな瞳に涙をいっぱい溜めたブライアンさんが居た。

その奥には無事、救出することに成功したマイケルさんとベアトリス卿。

後、黒髪の少年（名前は知らない）が、心配そうにコチラの様子を窺っている。

「すまんが、お前さんの力を貸して貰えんかの？」

ロアンお爺さんの言葉に、わたしは首をかしげる。

この期に及んで、何に力を貸せと言うの？

わたし、ケイン王子を守れなかった。

ケイン王子はライアン・フランシス様ではないけれど、わたしが守ると誓った相手。

どうして、何がいけなかったのかしら。

そうね、わたしがいけなかったんだわ。

何も考えずに飛び出して、そして身動きが取れなくなった。

わたしが、わたしが死ねば良かったのよ。

だって、わたしことなんて、誰も必要としていないでしょう？

お父様とお母様はわたしを居ない事にしたいみたいだし、わたしが聖騎士になったって、大して役に立てそうもない。

ただ物語の中の主人公に憧れていただけ。

出来れば自分もそうなりたいたって努力してみたけれど、いざ実行しようとしても、思うようにはならなかった。

何とかなる、という根拠のない思いこみで、ケイン王子をこんな目に。

「考えとる時間はない。お前さんしかケインは救えん」
王子を救う？

「だって、だってこれって、こんなに血がいっぱい」

もう、死んでいるんでしょ？

さっきからケイン王子の体温が感じられない。冷たくて。

冷たいってことは死に近づいてるってことで……ケイン王子はまだ生きているの？

ロアンお爺さんの言葉に驚いているのはわたしだけじゃなかった。
ジェフリーさんもライアンさんも目を丸くしている。

「何をなさるおつもりですか、ロアン様」

「ケイン君、助かるの!？」

2人の言葉にロアンお爺さんが頷く。

「たぶん、じゃがの」

——たぶん。

「大丈夫じゃ。ほんの少しでいいから力を貸して貰えんかの？」

優しい声でわたしを安心させるように、ロアンお爺さんが囁く。

「……ち、から？」

聖力はたぶん、もう殆ど残っていないと思うけれど。

「そうじゃ。ワシが今から唱える言葉を繰り返してくれるだけでいい。傷口に、こう手を当てての」

「こう、ですか？」

わたしは恐る恐る、ケイン王子の傷口を抑え過ぎないように、そつと両手を重ねておいた。

「そうそう。上出来じゃ」

ロアンお爺さんは満足そうに頷いた。

「では、いくぞ」

張り詰めた空気が部屋全体を覆う。

その中は奇妙なくらいに静かだった。

みんな、息を止めて、ロアンお爺さんの声を待つ。

「古より伝えられし始まりの言葉」
エルザミア

ロアンお爺さんの言葉を一言一句逃さないように、耳を傾ける。

『——古より伝えられし、始まりのエルザミア』

エルザミアって何かしら？

「其れは我が名」

『——其れは我が名』

誰かの名前？

「神は言葉であり、言葉は神である」

『——神は言葉であり、言葉は神である』

これって、聖言よね。聞いた事、ないけれど。

「すなわち我は神である」

『——すなわち我は神である』

神って誰が？ファーム様のこと？

「この世にある全ての物は神々によって創られた」

『——この世にある全ての物は神々によって創られた』

何故かしら、体が熱い。

「創世の力をもってして、いま一度、彼の者に祝福を与えん」

『——創世の力をもってして、いま一度、彼の者に祝福を与えん』

その時、体の奥底から、何かがどっと、重ねた手のひらを伝って、ケイン王子の体へと流れ込んだ気がした。

すると目の前が真っ白になって、視界が戻った頃には、頬に赤み

が差したケイン王子の姿。

……よかった。傷も塞がっているわ。

辺りを見回すと、ジェフリーさんもブライアンさんも、そしてテレサ姫も目をシバシバさせていた。

この部屋にいる人全員。ベアトリス卿もあの男の子も。

眩しい思いをしたのはわたしだけじゃなかったのね。

ロアンお爺さんは例外だけれど。

あの眉毛は突然の光からも目をカバーしてくれるのよ。
羨ましくはないけれど、少し便利かもしれない。

ちょうどそんなことを考えていると、ロアンお爺さんが、いきなりわたしを引っ張った。

「え、ちょっと」

あ、待って。

ケイン王子の体をずっと抱え込んでいたものだから、足が痺れて動けない。

けれど、ロアンお爺さんはそんな事お構いなしにわたしを引っ張る。

「早くせい」

「あっ」

勢いよく立たされて、ケイン王子の体が床に落ちた。

下は絨毯とはいえ、なんだか凄い音が聞こえたような……ゴンって。

わたしはロアンお爺さんに引かれたまま、部屋の外へと向かった。廊下に出てすぐ、こちらからは部屋の様子が窺えるけど、向こうからこちらは見えない場所。

そこで、ロアンお爺さんがわたしを振りかえる。

「すまんの。神力が切れてしまったようじゃ。体が元に戻っておる」「え!？」

シンリョクって何？

そう思ったけれど、体と言われて、ロアンお爺さんの視線の先を見る。

わたしの体。着こんだ黒い服。首にかかっているのは、ケイン王子の腰紐。

そして、見下ろしたその先には……。

元々は存在していて、でもここ数日間には存在していなかった膨らみがあった。

代わりに慣れてきていた股間の物体が消えている。

……ど、どうということなの!？

驚くわたしにロアンお爺さんが言った。

「指輪で、お前さんは祈ったじやろう？ 聖騎士になりたいと」

「ど、どうしてそれを？」

神様しか知らないはずなのに。

……あ、そう言えばケイン王子やジェフリーさんは知っているわね。

信じてもらえなかったけれど、全て話したもの。

ロアンお爺さんはそれを聞いたのかしら？

「今、お前さんが女子おなこというのがバレるのは非常にまずい。まだ時期ではないんじゃないよ」

ロアンお爺さんは言った。

「だから力が戻るまでは暫くの間、これで胸を隠して。後、これを羽織っておきなされ。幸い、お前さんの事は誰も見ておらんでの」

そう言って、どこから取り出したのか、ロアンお爺さんはサラシと、わたしが特注していた聖騎士の服もどきを渡してきた。

「ほれ、皆が気づかぬうちに」

ようやく目が慣れてきたみんなは、辺りをキョロキョロと見渡して、それから無事生還したケイン王子の様子に歓喜の声を上げていた。

喜びのあまり、わたしやロアンお爺さんが居ない事にも気付いてない様子。

……なんだか、ちよっぴり切ないわ。

わたしは服の上からサラシを巻いた。

そうしてから、大きめのなんちゃって聖騎士服を身にまとう。

その時、水に浮く泡のようにポツカリとある考えが浮かんだ。

「あ、あの……ロアン様は……」

神様なの？ファームリアム

でも確か、神はこの世の物とも思えぬほど美しく、光輝く桃色の髪は甘く艶やかで、瞳は流れる血潮のごとく赤いのだと神殿が発行している聖書に書いてあったはず。

「皆まで言うな」

ロアンお爺さんの見えない瞳。
そのフサフサの眉毛の奥には、きっと赤い瞳が隠されているのね。
人の価値観とは様々なもの。

聖書を書いた人にとって、ロアンお爺さんの姿は美しく、白髪は
桃色に映ったのかもしれない。

そう言う事なんだわ。

「あ、あの、はい！」

わたし、今、神と対面しているのね。ファームと。

この事実には誰も気づいていないのかしら。

ロアンお爺さんは神殿の幹部だと言っていたし、ひょっとして姿
を隠して人々の暮らしを見守っていらっしゃるの？

——そうなんですネ、ロアン様。

わたしが確認の意味をこめて見つめると、ロアンお爺さんは頷い
た。

——わかりました。そう言うことならば、わたしは全面的に協力さ
せて頂きます。

ロアンお爺さんが神だなんて、ファーム誰にも言いません。

「お前さんの夢は叶うよ」

ロアンお爺さんはそう言って、ゆっくりと頷いた。
ご褒美ですか？ 察しの良いわたしにご褒美ですね！

わたしの夢……わたしの夢は、

「わかりました！ わたし、立派な聖騎士になります！！」
まだまだ未熟者だけど、一生懸命努力します。

わたしは1つの事にのめり込めるタイプだから。

「それから、それから……ケイン様のことも任せて下さい！」

わたしは言った。声高らかに。

きっとケイン様を神も認める立派なライアン・フランシス様に
て見せますからね。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5402q/>

トリエスタの聖騎士

2011年3月5日13時51分発行